

終戦七〇周年記念事業

未来へと語り継ぐ

# 日立の戦災

「戦争体験集」



## 核兵器廃絶・平和都市宣言

世界の平和と安全は、人類共通の願いである。

いま、国際的な核軍拡競争は、核戦争の危機を増大し、人類生存の恐怖となっている。

私達は、再び「広島」「長崎」のあの惨禍を繰り返さないためにも、すべての国に対し、核兵器の廃絶と軍縮を求め、いかなる国の核兵器も許してはならない。

一瞬にして尊い命を奪い、財産を灰にしてしまったあの悲惨な戦争をいかなる理由があろうとも繰り返してはならない。

日立市は、日本国憲法の恒久平和の理念に基づき、核兵器廃絶と人類永遠の平和を希求し、ここに「核兵器廃絶・平和都市」となることを厳粛に宣言する。

昭和六〇年二月二四日

## はじめに

多くの犠牲を払った太平洋戦争が終結してから七〇年の歳月が経ちました。戦争や戦災を体験した方々が高齢化し、悲惨な戦争の記憶が人々の心の中で風化してきております。

昭和二〇（一九四五）年八月六日の広島市、同月九日の長崎市への原爆投下による惨禍はあまりにも大きなものであります。日立市においても、昭和二〇（一九四五）年六月一〇日の一トン爆弾攻撃に始まり、七月一七日の艦砲射撃、同月一九日の焼夷弾攻撃と、他の地方都市には例のない連合軍からの三度にわたる激しい攻撃を受け、当時の市街地の六割以上が焼失するとともに、一五〇〇人を超える尊い人命が失われました。

改めて、ここに深く哀悼の意を表し、御冥福をお祈りいたします。

日立市では、昭和六〇（一九八六）年十二月二四日に、「核兵器廃絶・平和都市」を宣言して以来、戦争のない平和な世界の実現を願って、この宣言の理念を広く市民に普及・啓発するため、日立市平和展をはじめ、様々な事業を毎年実施してきました。

終戦から七〇年が経過し、戦争を体験した世代の方が少なくなる中で、当市が受けた大規模な戦災の様子や市民の戦災体験を記録に残し、特に若い世代に戦争と平和についての啓発を図るため、終戦七〇周年記念事業として、戦災体験談を募集し、記録集を制作することといたしました。

過去を見つめ直し、平和への願いを後世に伝えていくことは、今を生きる私たち全員の責務であり課題です。当市では、今後とも、次世代、特に若い世代への継承に努め、平和な世界の実現に向けた取り組みを進めてまいります。

この記録集が、「戦争の悲惨さ」や「命の大切さ」、「平和の尊さ」について理解を深めるとともに、戦争と平和についての関心をより高めていただく一助となれば幸いです。

第一章 語り継ぐ戦争の記憶

1

小林進	「少年期の回想」……………2
安藤靖子	「おこったようなさびしい顔」……………3
面川道宏	「私の戦争体験談」……………4
鈴木順子	「戦後七十年 六歳の記憶新たに」……………6
関根政子	「六歳の終戦」……………6
渡辺真喜子	「日立の戦災」……………13
和田昭	「東京大空襲の体験」……………14
青木昱秀	「銃後の戦場、体験記」……………15
武田孝一	「終戦の年の思い出」……………18
袴塚昭	「平和の願ひをこめて私の戦中戦後」……………21
皆川直司	「小学四年生の戦災体験」……………21
内山英子	「狙われた日立工場 大煙突」……………24
江尻智一	「じいじの語り伝え」……………26
酒井道子	「七〇年前の記憶」……………28
熊谷勝典	「戦争と私と少年時代」……………29
鈴木一夫	「日立工場空襲爆撃と戦争の悲惨さ」……………31
須田武	「軍隊生活を顧みて」ほか……………33
北見徳治	「戦死した兄（日誌より）ほか……………35
鈴木静枝	「出征した人を見送る」ほか……………44
齋藤義嗣	「終戦の年の思い出」……………45
吉田実	「私の六月一〇日午前九時」……………47
西村春男	「私の戦争体験」……………49
松村郁子	「戦争の記憶と平和」……………53
鈴木文吾	「九九・九九%の死から生へ昭和一八年二月満州にて」……………55
黒澤巖	「ある青年の兵役体験談・遺稿より抜粋」……………62

第二章 これからの平和を願って



▲空から見る日立市街地 昭和10年ごろ（寺山いつ子さん提供）

# 第一章

## 語り継ぐ戦争の記憶

## 少年期の回想

小林進（終戦時四歳）

光陰矢の如し、今年で終戦七〇年を迎えましたが、私は忘れようとしても忘れることの出来ない、あの時、あの頃が、走馬灯のように、浮かんでは消え、消えては浮かんで、蘇ってきません。

私は父と別れたのは、三歳に届く頃でした。船で戦地に行く時、久慈川口で日の丸の小旗を振って見送りましたが、父の姿を見ることは出来ませんでした。出征する父親の多くは、手を振って別れを告げているのに、私の父親はなぜ姿を見せなかったのか。いま思えばよほど切なく、つらかったのか。三人の子供たち（兄五歳、弟一歳に満たない）を残してゆかなければならない思い、きつと陰ながら涙で別れを惜しんでいたと思います。

母に残した最後の言葉は「いま、日本は負け戦。戦地に動員されるのは、生きては帰れない。子供たちを頼む」。涙ながらに言ったそうです。

それから私は、田舎の母の実家に、小学校へ入学するまで預けられました。その頃、お祖母さんは元氣だったので、可愛がられて育てられました。久慈小学校に入ってから、時が経つにつれて苦難との闘いでした。

当時は、戦後の混乱期で食べてゆくのは精一杯で、学校へ通う着る物は、みすぼらしかった。なぜ貧乏な生活でいじめられるのか。父が居れば、こんな目に合わないのに。そんな時、校庭の片隅に佇み、そこから太平洋を遠く眺めて「父ちゃん、本当に死んだのか。死なないで帰って来てよ」と。胸の内を叫んだ。水平線にポツカリと浮かんだ一片の白い雲が、おぼろげに

父の顔に見えた。何か言っているようにも思えた。学校に行くのが嫌いになり、次第に学校が遠のき、不良仲間と遊ぶようになってしまい。長欠児への道に、のめり込もうとしていた。

その頃、近所で空き巣に入られた事件が起き、その疑いをかけられた。今度は、世間から冷たい目を向けられ、噂された。またしても父親が居ないからか、貧乏だからか、あまりにも冷たく、非情だと思いました。

母親が噂を耳にした時、母だけは、私を信じてくれました。その苦難に負けてたまるか、頑張るのだ、と感じ取りました。母の苦悩、そんな顔を見るのがいちばん辛かった。

世の中には鬼ばかりはいませんでした。大らかな、人情豊かな人が、私を優しく励ましてくれました。母の形振りかまわず働いている姿に同情し、「お前たち子供の成長を目標に頑張っているのに、学校にも行かず不良なんかになったら、お母さんが可哀想だ。真面目な人になり、恩を返すのだ」と怒り気味に言われた。あの時、子供ながら嬉しかった。初めて知った他人の優しさであった。また、母の行商に行く後姿を見た時、どうして女でありながら、そんなに力があるのだろうかと感じました。大きな荷物を背におい、両手に重い荷を持った地下足袋姿は、まるで牛女の様と言っても過言ではなかった。こんなにしてまで、私たち子供に、小さな希望と夢をたくして、父親と交わした約束を守り通そうとする母に、真面目になって恩を返そう、と決心した。私の少年期の苦難のなかで得たのは、努力と人の情けでした。

七〇歳を超えた今、「お袋ありがとう」と母への感謝の気持ち一杯です。

そして、私たち戦争遺児として歩んだ悔しく悲しかった道の

りを、二度と後世には体験させてはならないと思います。

## おこったようなさびしい顔

安藤 靖子（終戦時六歳）

四歳から八歳までの四年間、私は茨城県の多賀郡にいました。父が、高等学校の教師をしていたので、家は官舎でした。私は、また小学校にも行っていなかっただけ、多賀の景色や様子をよく覚えています。同じ作りの家が三軒ずつ、合計一二軒建っていて、そのうちの一つが私の家でした。官舎の向かい側には、小高い土手に囲まれて、高等学校の学生寮がどっしりと構えています。その学生さんたちは、たびたび家へ父と勉強をしに、あるいは、私たちと遊びにいらっしやいました。家から千メートルほど歩くと、父の学校があり、もう少し先きは海岸になっていました。夏になると、家族そろって泳ぎに行ったものです。戦争中でありながらそれはそれは楽しい、夢のような毎日だったと思います。

けれど、私が七歳になったころから、たびたびけたたましいサイレンの音を聞き、防空壕へかけこまなければなりません。飛行機がうなりながら飛んで行くのを、薄暗い壕の中で、息をひそめて聞いていました。が、あのころの私には、戦争のつらさ苦しさが、まだはつきりわかっていなかったのでしょうか。物心つくとすぐ、ずきんにもんぺ姿で走りまわっていたので、戦争のない生活は知りません。これでごくあたりまえの人間の生活だと思っていたのでしょうか。かえって今の方が、あの時のことを思うと恐ろしくなります。

忘れもしない七月一七日、夜一時ごろ、ぐっすり寝いてい

た私は、乱暴にゆり起されたのです。電燈も消されていて真っ暗、やみつき破って聞こえるのは、いつもの不気味なサイレンの音でした。母のうわずった声もします。ぐずぐずとはしていられません。「早く早く」と追いかけるように、サイレンは、ますます鳴りわたります。シャツか上着か、表か裏かとにかく身につけて、リュックサックを背負ったとたん、どどーんと、ものすごい音がしました。家がびりりと震えました。「こわいっ」と思う間もなく、爆発音は、どかーん、どどーんと響きます。姉に手を取られた私は、げたをけとばしたり、石につまずいたりして、どきどきする心臓を押さえながら一〇メートルばかりさきにある防空壕へ飛びこみました。父をのぞいて家族全員そろいましたが、父は寮の学生を避難させるための指導に行っておりません。私がもう少し大きかったら父が死ぬか生きるかのさかいにいることがわかったでしょうし、また、赤ん坊をまじえた六人の子どもたちを、ひとりで守らなければならない母に、どれだけ感謝したでしょう。爆発音はますます激しくなり、天井からは、ばらばらと土のかたまりが落ちて来ます。入口からは、からだも吹き飛ばされんばかりの爆風とともに、かわらやガラスのかけらしい物が飛びこみます。皆、奥のほうにかたまり、目と耳をおおって身を守りました。こまくをつんざくような音は、なかなかやみそうにありません。おり悪く雨も降り出してたちまち泥水が膝のあたりまで、たまつてきました。夏といっても真夜中です。足が冷え、しびれたようになってしまいました。およそ三時間もたつたでしょうか。ようやく爆発音が遠のいて行きますと、「荒又先生一家無事——」と向こうの壕から、伝令が、怒鳴るように伝えに来ました。私たちもやつと気を取りもどし、ふーっと大きく息をはき出して、「なんだろう。

あの大きい音」「爆弾ではありませんよ」「けがした人ない？」などと、口々に話し合いました。あとでわかったのですが、私たちは、艦砲射撃といって、あの楽しく泳いだ海から、軍艦の大砲をうたれたのでした。外はまだまっ暗、それに、どんなに natte いるかわかりません。あぶないといっているので、夜が明けるのを長い間、泥水の中で待ちました。

空が薄明るくなるのを待ちかねて外に出ました。足もとこそ見えても、人の顔ははっきりわかりません。母に連れられてそろそろと家の前まで来ましたが、家の中はともひどいらしく中に入ることをとめられました。しかたなく門のそばで姉たちと立っていますと、寮のほうから、どろだらけの父がやって来ました。「お帰りなさい」父がどんなに危険な目にあつたのかも知らず、いつもと同じ挨拶をしました。けれどなんとなく嬉しく、また、私たちに返事をしながら家に入っていく父の姿が、とても珍しく思えました。

やがて、びしょぬれの服を、母が出してくれたしまのパジャマに着替え、また攻撃されそうだとか言うので、寮の裏手の山へ待避しました。みな寝不足の腫れぼったい、薄汚い顔をしています。食事の世話は、寮の炊事係の方がそれはそれはよくしてくださり、四〇人の官舎の人に大きなおむすびが一つずつ配られました。肥料の豆かすがはいった物、今なら目もそむけられましようが、あの時のおいしかったこと、お腹にしみ渡るようでした。夜になりますと、固い丸太をまくらに、転がり落ちるのを心配しながら、大人の間で小さくなって寝ました。

朝。やがて待避命令も解除され、そろそろと山を下りて家へ帰りましたが、家の様子は、見れば見るほどひどい。塀は倒れ屋根は抜け落ち、天井の板が頭の上に垂れています。壁も落ち

て畳もどろんこ。たんすやげた箱も吹き飛んだり鋭い弾の破片がつきささってこわれたり。庭で弾が破裂したのでしよう、直径一〇メートルもある大きなすりばち型の穴が開いていました。そのそばでは逃げ場を失ったにわとりが目を閉じて死んでいました。しかし、それ以上にかわいそうだったのは寮の学生さんです。たった三か月前に喜び勇んで入寮式を済ませた一年生が今日は大勢冷たくなっています。父の話によるとちやうど逃げるところへ弾が落ちたとか。どんなに家の方が悲しまれるでしょう。あるお母様は「足を無くした息子が夢に現れた」と駆けつけたところ、たずねる我が子は足をやられて死んでいたそうです。あちらでもこちらでもむごい話しか聞けません。姉もいちばん仲良しだった友だちの死を聞いておこつたような顔をしていました。父や兄が家の整理をしているのを、私たち子どもはぼんやりと眺めていました。

「私のお人形ある？千代紙は？」たずねてもむだなことでした。疎開、終戦。目まぐるしく過ぎた私の幼稚園時代。あれから九年という長い年月がたちましたが夏がくることにあの時の姉のおこつたようなきびしい顔が目には浮かんできます。

※この体験談は6歳の時の体験を中学生の時に書いたものです。

## 私の戦争体験談

面川 道宏（終戦時六歳）

### ◇成沢国民小学校入学

昭和二〇年四月成沢国民小学校一年生六歳。通学は六号国道近くの高学年生の家に集まり集団登校でした。戦争は六月になると日本の主要な地区への攻撃が広がり、六月一〇日には日立

工場に一トン爆弾が落され、多数の人がなくなりました。工場（建屋、設備など）も大きな被害を受けました。これが日立地区への戦争被災の始まりでした。小学一、二年生の思い出の中に教科書の中への墨塗りを忘れ、先生から大目玉でした。二年生の時、学校で購入したズック靴は足の親指のところが一日で穴があきました。やっと買ってもらえたのに残念。

#### ◇艦砲射撃

七月一七日の夜は雨降りで大きな雷鳴と思い振動で飛び起きた。北側の隣家に母が戸を開け大声で「敵が来たのか」と「艦砲、艦砲射撃だ」といって雨戸が強く閉った。押し入れに布団を半分、残りを周りに積んだ。今夜父は夜勤で、母と一歳の弟と三人なり。艦砲射撃も音と振動は激しさを増して揺れも強く大きい。ドツシャーーンと地響きが何度も続く。早く終わってくれと……。神に手を合わず。どれくらい経ったか。北の道路（梅林通り）の方から音に混じり「いたいよ！」「いたいよ！」と泣き叫ぶ声が続く。家の南玄関、勝手口の方でも人の声がしていた。艦砲射撃は長く長く感じ、早く終われ、早くと祈った。夜の一時三〇分ころまで続いた。

七月一八日雨も上がり庭に出てみると人の身体の一部と思われるものを兵隊さん二人が袋に集め持ち帰った。庭と雨戸から破片二個、後年畑から数個出た。また、電線に黒い髪の毛のようなもの多数下がつており、不気味だった。

#### ◇父朝帰りと疎開

艦砲射撃の翌日の七月一八日、父が夜勤明けで朝帰宅した。みんなの無事を抱きあつて喜んだ。

帰宅途中の道路は亡くなった人が横たわっていたので自転車を担ぎ帰ってきたと。家の内外を見て回りながら「ここは危ないよ！」私は疎開しようと詰め寄った。母の実家は家も蔵も大きく、常陸太田の上大門へ今日出発することに決まる。道順は多賀―石名坂―大橋―常陸太田の上大門までの二四キロメートルである。

父の自転車にリアカーへ荷物を積み、弟（二歳）は母の背に、自分は救護品袋入りのリュックを背負い、夕日の中五時ころ出発する。松並木の砂利道の国道をひたすら歩く。

あの「かんぼう」から早く逃げたかった。途中休憩は小屋根のあるところ、郵便局なども借りて休んだ。田舎道に入ると土手、草むらなどからの虫の音が賑やか、眠気とも戦いながら歩く。最後に滝の音の橋を渡るともう一息……。到着した父からよく歩いた！と褒められた。母も一歳の弟を背負いながら歩き大変な頑張りでした。休憩時には必ず足への手当をしながら歩いた。絆創膏を張替え心配なところにも早めに貼る。

七月一九日、挨拶後、先に来ていた妹は疎開先にすでにとけこんでいて楽しそうだ。すでに神戸や東京からの先客があり、初めて顔を合やす人も多い。部屋一室を借り一家全員が揃った。七月二〇日、昨深夜未明に日立地区へ焼夷弾攻撃があり、被害大きいとの情報が入った。

父は日立へ戻るため、九時ごろ自転車で出発した。午後一時到着時に家は焼け落ちて、収穫した小麦がブスブスと燻（いぶ）っていたそうだ。他はすべて燃え尽きていた。周囲の家で残っている家は瓦屋根以上で在宅し、消火活動ができた家だけが助かったそうだ。

◇結び

昔の戦災体験を書いてきたが、今思い出しても当時、家族全員が一致協力してよく生きのびて来たものだと思っている。戦争は本当に恐ろしい。将来戦争が起こらないことを祈るのみである。

戦後七十年 六歳の記憶新たに

鈴木順子（終戦時六歳）

忘れもしない六歳の時でした。

家は日立製作所海岸工場近辺の堀米に居ました。「百聞一見にしかず」と言う言葉もありますが、現実の戦争の恐怖というのは地獄絵図のようでした。朝起きて見ると父と母が夜中に掘ったのだろうか六メートル位の小さな防空壕が庭にありました。父が出征する前、「お父さん戦争になんかいかないで押し入に隠れていな」と、私は何度も言っていたそうです。六歳の絶叫も空しくその明日八丈島へ出征しました。駅まで小旗を持って父の手を握って別れました。戦争も激しさを増し、私は三人兄弟でしたが三才の弟が足手まといになるので母の実家太田の水府村の祖父母の家に一人疎開させました。警報音が鳴り響くと防空頭巾を被り防空壕に飛び込みます。

B二九の低空飛行と強烈な爆音、暗黒の夜であるのに閃光が防空壕の中まで照らし母は兄と私を覆い被さるように支えてくれました。母は「一人の子供を置いて来て失敗した、ここで四人で死にたかった」と嗚咽していました。

家は全焼しました。

敗戦を知らせるラジオの放送がありました。最初は意味がわ

かりませんでした。大人たちの会話で敗戦したのだとわかりました。助かったと子供心に実感しました。その夜は三人で母の実家にいくのですが途中見たものは死体の山、服はボロボロ、首がない人も、人間の形などないものも：一輪車で次から次へと重ねられていきました。別なところでは、防火用水に頭だけ入れ、折り重なって人々が亡くなっていました。六歳の時この光景を見た時どんな考えをして見ていたのだろうか。何本もの電柱が折れ、兵隊さんが小さな子供を抱えて、またがしてくれました。

実家に戻ってから数ヶ月、父も無事でした。戦後の食糧難に耐え抜いて昭和の激動を生きぬいてきました。あと僅かな余生ですが平和な生活を楽しみたいと思います。戦争を知らない若者よ、平和を守り、未来を考え、子や孫の時代も世界が一つの和になるように、平和であることを祈り続けよう。

六歳の終戦

関根 政子（終戦時六歳）

幼かった私には、戦前戦後の事は殆ど記憶になく、ただ私達家族の運命を変えた八月の出来事は、私の脳裏に焼きつけられ、夏が来ると当時の事が一編の動画のように目の前に映し出されます。

私は昭和一四年に、福島県小名浜（現いわき市）に生まれ、その後第二次世界大戦がはじまり本土が危険だと言う事で、当時母の親兄弟が住む樺太本斗町へ移住する事にしました。昭和一六年のことです。

私の家族は、父母、私と一八年に生まれた弟の四人家族でし

た。母の実家は大きな鉄工場を経営、たくさんの工員さんがいて、幼稚園から帰ると、よく遊び相手をしてくれました。戦時下でありながらごく普通の、しかも穏やかで楽しい日々を過ごしていました。戦争の気配すら感じる事はなかったのです。

父は山形の日本海に面した小さな漁村の出身で、仕事は漁師で機関士をしていました。仕事を探しに樺太へ渡ったそうです。そこで母と知り合い結婚。一時期内地（本土）へ帰り漁船の機関長をしていました。家族で樺太へ戻ってからは、水産試験場へ勤務し故障をした船の修理を担当し樺太の東海岸が勤務地で、今と言う単身赴任でした。私達が住む家は、反対側の西海岸でしたので父とはめつたに逢えませんでした。

しかし、戦争は刻一刻と深刻な状態になっていました。ソ連軍の侵攻が、始まっていたのです。しかし、本土との通信網が、届かなく不通になるなど、悪条件が重なり、危機が迫っている事など知りませんでした。

私は六歳になり、幼稚園では相変わらず楽しくしていました。でも、時折日の丸の旗が多く見かけられ、母さんや近所のおばさんが集まって、何かを作っている様子が見え、私はとても気になり、ある日母さんに聞いてみました。「あれはね、千人針と言って兵隊さんが敵の玉に当たらないように皆で手拭いに赤い糸結びを千人分ぬいつけるのよ」私も母にいわれて結びを二つ付けました。これを兵隊さんはお守りにし、出征したのです。

ある日、幼稚園から帰ると大人達が難しい顔をして「赤紙がきた」「いよいよよきたか」とあちこちで交わされていました。私には何の事かわからず「赤紙ってなに」と聞いてみると「子供はいいの」とにらまれ私なりに怖い事が起きると感じたものです。祖母の家で近所のおばちゃん達が台所で忙しそうにしてい

ました。

弟に「お客さんかな」「今晚御馳走だね」弟は「うんそうだね」と嬉しそうにうなずきました。夕方になると近所の人達が沢山集まって来て「バンザイ バンザイ」と大きな声で叫び、私には何が起きたのかさっぱり理解出来ません。

翌朝母が「長行おじちゃん、兵隊さんに行くんだよ」「明日は皆で見送りに行こうね」といいました。翌朝、家のすぐ後の無人駅には、昨夜の人達が日の丸の旗を振ってやっぱり「バンザイ」を叫んでいました。叔父ちゃんはまだ学生で、母の一番下の弟でした。私の遊び相手をよくしてくれギターが得意で私は大好きでした。

「ああ兵隊さんになるって何処へ行くのかな」皆で日の丸の旗を振り、列車の中に消えて行くお兄ちゃんを見送りました。私には笑って手を振るお兄ちゃんが泣いているように見えませんでした。確実に戦争の波が押し寄せていたのを感じました。

それから段々近所のおじちゃんたちの顔が見えなくなってきました。

その後は、何事も無い日々が続きました。幼稚園では「ハーイ 耳と目を手で押さえて、机の下に隠れましょう」先生と避難訓練をしたり「飛行機が来たら防空壕に隠れましょう」少しづつ園のお遊びが変わっていきました。でも、私には新しい遊びでしかありませんでした。

そんなある日、父が事故で怪我をし、真岡の病院に運ばれました。船のドラムに服の端がからんでの事でした。実はこれが父の命拾いになったのでした。赤紙が来たのですがこの怪我で入営を免れました。昭和一九年の事でした。

年が明けると本土の状況は益々悪くなり我が家でも窓には紙

を張り、夜は灯りが漏れないようにと、黒い風呂敷を巻いて、外に漏れないようにとヒソヒソと話すようになりました。そんな中でも、私達姉弟は元気に遊び廻り、やがて二番目の弟が生まれ、怪我をした父さんも退院しました。我が家は笑いが一杯でした。しかしその後、父は職場へ戻り、何時もの母子の生活に戻りました。

そのころ、本土では空襲が毎晩のようにあり、段々悲惨な状況になっていました。もちろん六歳の私には知る由もなく、大人達も情報は掴めなかつたようです。

八月一五日の朝、突然すごい爆発音で、私は目を覚まししました。窓の外が真っ赤に染まり、私はこれが戦争だと、胸にあつた不安の正体を見た気がしました。隣の町豊原が爆撃をうけました。大人たちが皆役所へ向かい、皆ラジオ聴き泣いているのです。何だろう私は怖い事が起きると感じました。お父さんがいない、どうなるの・・・。

ラジオを聞いていた大人たちは「戦争に負けた!」「日本が負けた!」と叫び、ほかの誰かが「ソ連軍が攻めてくるぞう」「早く逃げろ」怒鳴りながら駆け回っていました。私は茫然としている母の手を握りながら母さんを見て、びっくり、青ざめた顔で涙を流し私の手を握り返し只頷いていました。私達はしばらくその場から立ち上がるできませんでした。

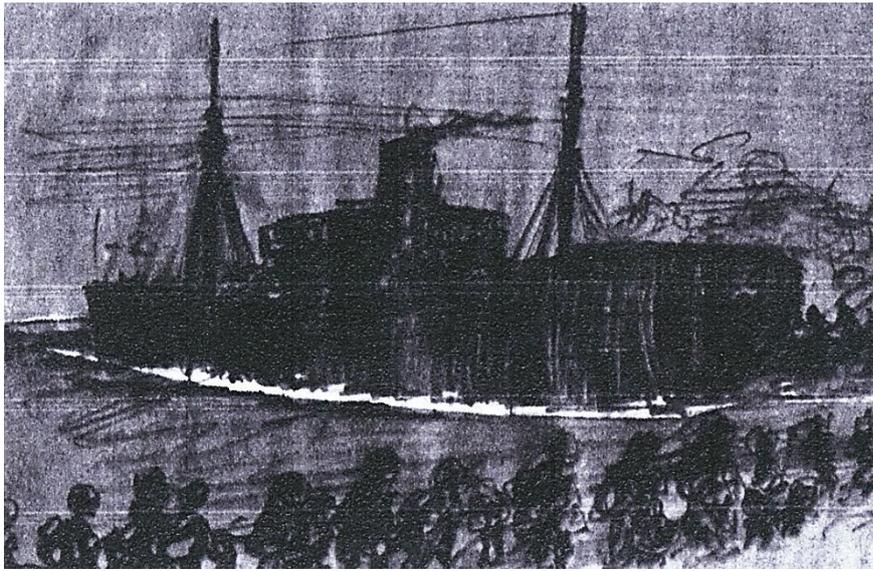
八月一五日は、私の運命を変えた日。私達の家族には新たな戦争に卷込まれる開戦記念日となったのです。

まず、一刻も早く、本土に帰らないと、大変なことになるとは幼い私にも解りました。母は産後二週間、赤ん坊と三歳、六歳の子供達では、どうする事も出来ず途方に暮れるばかりでした。

祖母の家に駆け込み「どうするの!どうするの」と私は泣き叫んでいました。祖母が「大丈夫皆帰れるよ」「お父さんが戻るまではあなたが黒柱だよ、頑張ろうね。」私は何のことか解らないまま、大丈夫と頷いていました。祖母達は北海道小樽へ、私達は父の故郷山形へ帰る事に決め、役場の連絡を待ちました。母は、本土に変える手立てを確認する為に、産後の体を休める暇もなく、役場に何度も足を運んでいました。それと言うのも、内地からの引揚船は停止を通知され、役場では各港の船を「避難移送船」と呼び、代わりに運行させる手筈を進めておりました。海には沢山の機雷が漂っており、引揚船の停止はそれが理由でした。私は「どうなるの、死ぬのかな、助けておとうさん」と、何度も神様をお願いをしていました。一刻も船に乗りたいのです。戦争は終わったのにロシアは侵攻して来ていたので「早くしないと捕まるぞう」「子供はサーカスに売り飛ばされるぞ」と色々な噂が飛びかかっていました。

引き揚げの条件は先ず子供、女性、お年寄りの順で、成人男性は現地待機でした。手荷物各自一個他米一升、所持金等制限されたそうです。幼い子供三人を連れての私達にはとても無理なこと、持ち出すものはほんの僅かで着の身着のままの状態です。身支度も簡単です。「おねえちゃん、一番お気に入りの服を重ねて着なさい。リュックにおむつを入れてね、何があっても母さんの手は離してだめよ」この暑い時に何枚も重ね着は大変でした。私は一番お気に入りのピンクの花柄お袖は提灯のワンピースに靴はサンダル。弟はお気に入りの水色の水筒を背負わされ今にも泣き出しそうな顔でも、歯を食い縛って堪えているのが私には良くわかりました。

母は生後間もない弟を背負い米と粉ミルクをそして、実は樺



太へ戻った時すぐに亡くなった弟がいました。その子のお位牌を母は、風呂敷に包み腰に巻いて家をでました。

とにかく握った手は離さない事、それが母子の約束でしたから、私は弟の手をしっかりと握り、私は母の手を握り、港へと暗い道を黙々と歩きました。港には人々が溢れ我先にと大きな声を張り上げていました。

薄明りの下に薄汚れた船が繋がれ、ジャポン、ジャポンと波の叩く音が響いていました。

母さんが「あれに乗るよ。能登呂丸だよ」  
母さんがホツとしたように微笑んでいました。

港の出入り口一帯には、沢山の機雷が放置されたままで、港を出るのにもとても危険でした。ただ私は、ひたすら明るく「大丈夫、大丈夫」と母さんと弟の手を握りしめ、目を見開いてじっと父さんの事を考え、船に乗る列に並んでいました。

暗い海を見つめていると、いきなり黒く

て大きな手が私を抱き上げ「泣かないで、声をださないで」耳元で囁きながら、タラップを駆け上がり、黒い船底へ私を運びました。次に弟が泣き叫びながら降りて来ました。必死になつて弟を抱き抱え、母を待ちました。「大丈夫かい」「あつ！かあさんだ」声の方へ眼をやりましたが暗いので中々見えません。眼を擦ってみても同じです、そこには薄汚れたランプが一つあるだけ、眼が慣れるのを待つしかありません。暫くして落ち着いてよく見ると、そこは船底で、あげくにあちらこちらに石炭が積んでありました。母はとにかく子供達が横になれるような場所を探し出し「少し寝なさい」と言いました。

私にとっては目を覚ました時のことが怖くて寝るなんて無理です。それに聞きたい事もあるし、父さんの事、どこへ行くのか、おばあちゃん、ご飯はあるのか、もうそれを考えると頭が一杯でした。

突然エンジンがかかりました。「船が出るぞー」誰かが「皆さん一緒に頑張らしましょう、必ず無事に着きますよ」この船には何人位いるのかわかりません。女子供とお年寄りばかりです。船底の小さな窓から覗くと海面が近く大丈夫かなと私はその窓から離れる事が出来ませんでした。先ず港を無事に出られるかが一番の問題です。誰も不安げな顔で出航を待ちました。しばらくして天井が開き先程の人が顔を出し「間もなく出航だ。何があっても騒がない様に」。皆が一瞬息を呑みました。私は母にどこへ行くの、と聞いてみました。「父さんの生まれた家よ、心配ないよ」と母は優しく答えました。やがて色々な思いを乗せ、出発の合図もなく船は本土へ向けて動き出しました。

八月一九日。樺太本斗町、私が一番子供らしく楽しく過ごした故郷を離れました。この時はまだ戻らないとは知らずにいた

のです。

船底は息苦しく石炭も置かれていたので、ムシロを敷いた仮の寝床、とても眠れませんでした。船は時々停まつては動きの繰り返しでした。それはまだ沢山の機雷が浮いていたからでした。怖くて眠れないまま私は小さな窓から暗い海を見ていました。すると、いきなり火柱がぼーと上がりあつという間に海に呑まれて消えました。機雷が爆発したのです。

今日の出来事が頭の中を駆け巡る中、ようやく眠りに入ったようです。

「朝だよ 起きて」の声で目を覚ますと明るくなった周りに沢山の引揚者がいました。家を出る時持ち出した食べ物も少なくなり空腹で子供達が泣き出して大人達はただ「我慢してね」と云うだけした。うしろから「乾パン食べて」という声がしました。振り向くと祖母がいました。「母さんお婆ちゃんだよ」もう嬉しくて飛び跳ねていました。母が「札幌までお婆さん達と一緒にだよ。よかったね」それはもう嬉しくて、弟の手を取ってはしゃいでいました。

そんな時、誰かが歌を歌い始め、それについて誰かがハーモニカで伴奏を付け歌い始め、涙を流す人もいます。子供の私には何の曲かは解らず音の方を見るとお爺さんが涙を流しながら吹いています。母を見ると、歌っているように見え、後にあの時の曲名を尋ねたことがあります。「故郷」とわかりました。

二一日、この船はやっと稚内の港へ着きました。恐る恐る下船して周りを見ると、みな歓声を上げ喜び、またお互いに手を取り別れを惜しんでいました。私達は先ず、我々の身なりにびっくりに。私の一番のお気に入り、ピンクのワンピースは見るも無残に、石炭煤で汚れ哀れな格好でした。仕方なく重ね着をし

ていたので二枚目の洋服に着替えようと見ると汗でシミだらけ思わず涙がこぼれてしまいました。「我慢なさい」母に叱られ周りを見ればもつと酷いものでした。情けないのは、私だけじゃないと解り何時の間にか声を出して笑っていました。

きつと出発した時から声を出したり、笑ったりしていなかったのです。着の身着のままとはこの事、終戦から六日目が経っていました。

稚内の駅へ着くと、引揚者であふれ返り今日の列車は既になく朝まで待つ事になりました。

後日、私達が乗った船（能登呂丸）は八月二二日稚内から大泊に帰港する途中、ソ連機の魚雷攻撃を受け沈没。乗員の多くが犠牲になったそうです。もしかして、私を船倉に連れて行ってくれた人も：と思うとやり切れません。一寸の時差で運命が決まる、そう思うと私達は本当に運が良かったと、思いました。駅前には宿がなく、その夜は仕方なく紙を敷いて皆なで休みました。

あくる朝、残り少ない乾パンを分け合い札幌行きの汽車を待ちました。私達は消息の掴めない父の故郷へ一先ず帰る事になりました。

札幌に着くと祖母達は小樽へ行く為、私達はお別れしました。母子四人になり、函館行きの列車に乗ると、少し寂しく心細くなり、皆は黙って窓の外を見詰めています。父の故郷は山形県鶴岡の加茂という小さな漁村で、母は父と結婚した時に少しの間住んだ事があるそうです。

函館から青函連絡船に乗り青森へ着いたのは夕方、明日の朝まで汽車はなく、足止めとなりました。まず目に入ったのは、一面焼け野原の光景でした。いつ空襲を受けたのか、まだあち



らこちらで燻っている様子で、人の姿もなく、青白い煙が、その光景を隠すように低く漂っていました。六歳だった私には不思議な世界に迷い込んだ様に思えたものです。良く見ると、所々に小さな掘立小屋がたっています。夕飯の支度でもしているのか、小さな煙突から休み休み煙が上がっています。

母はそんな小屋を一つ一つ訪ね「休ませて」と頼み歩きましたが、誰もそんな余裕がありません。途方にくれた母は「今夜は野宿ね」私は「おなかがあすいた」と言おうとして母さんを見ると弟と背中の中の弟はミルクも与えられずヒーヒーと微かな声で泣き、途方にくれている母を見て可哀相になり「大丈夫、大丈夫」私はお姉ちゃん、母さんを助けなくちゃと笑って見せました。そんな時、一人のおばさんが「お嬢ちゃん達ここでお休み、大変だったね」といって小屋の中に入れてくれました。母は「何も持ち合わせが無いけど」と

言って炊く事も出来ず持っていた生米一升をお礼に差し出しました。

「何もねえけど」とおばさんは汁を出してくれました。その時頂いたお芋の汁は、生涯忘れられないものになりました。何日か振りで敷物の上で休みました。

サクサクサク、お米をとぐ音が聞こえてくる。母さん朝食の支度をしているんだ、そっと辺りを見ましたが…あ

あ、夢だった。しかし、ぷーんとご飯の炊けるいい匂いがします。夢じゃない、私はそつと起きだしおばさんの傍へ行きました。すでに弟もお釜の傍にいます。おばさんがお釜の蓋を取ると、炊き上がったご飯の匂いがし、わあ、二人で手を叩きおばさんの手を見ていました。熱々のご飯で御結びを作って私達に「はい、お待たせ」と手渡してくれました。

赤ん坊には自分が食べるお粥の上汁をすくってミルク代わりにと差出しました。こんなに親切な人が居るなんて本当に嬉しく、母は何度も頭を下げ私達は駅に向かいました。私は暫くの間あのおむすびを作るおばさんの赤くなつた手の平とその中できらきら光るおむすびを思い出していました。

青森駅は引揚者や戦地からの帰還兵隊さん達で大変な混雑で乗車出来ず見送るばかりです。どの列車も身動き出来ない程で乗降口からは人がはみ出し、今度も無理だねと母が諦めた様子で窓の方へ歩いていった瞬間いきなり「早く手を掴んで」と兵隊さんが身を乗り出して私の目の前に手を差し伸べてくれました。夢中で私はその手にしがみつきました。

他の兵隊さん達に中へ引き上げてもらい、弟と母も同じように何とか列車に乗ることができました。びっくりにしている私達姉妹を膝に抱き上げ「頑張ったね偉いよ」と言って乾パンをくれました。今でも乾パンを見るとあの時の兵隊さんが思い出されます。

その後、何度も電車を乗り換え、夜遅くに鶴岡駅に着きました。この



夜は野宿をし、駅でバスを待ちました。私と弟はバスに乗るのが初めてで、嬉しさと不安で複雑な気持ちいっぱいでした。バスが走り始めるとやがて海が見えてきました。

青い海、白い砂浜とても綺麗でした。何となく樺太の潮の香りと同じだと思いました。前方に小さなトンネルが見え、目の前に小さな港と穏やかな家々が飛び込んで来ました。そこが父の生まれた町でした。

切り立った山の下に寄り添うように家が並び目の前は海で港には小さな漁船が波に揺れています。バスを降りて歩いている間、私は祖母はどんな人か少し不安になりました。

父の兄夫婦はすでに他界し実家には祖母と三人の従兄弟が住んでいて私達を迎えてくれました。

「ようきたのう」奥から腰を曲げてお婆さんが出て来て「まあちゃんかい」と言いながら私の手を取り「桶の水で手足を洗い流して、済んだら上上がりな」。ああ、親切なお婆さんだ不安だった私は少し安心しました。

大人達は夜遅くまで話込み、私達子供はしばらくぶりでお布団に入りその夜はぐっすりと休みました。あの日から一〇日余り無事本土に帰る事が出来ました。でも依然として父さんの消息は分らず小樽の祖母が言った大黒柱となった私には、生きる為の戦いが待っていました。母さんは疲れと父の心配で休みがちで弟の面倒は私の係となり何をするにも小さい弟が着いてきません。嫌でした。お金もなく（樺太の民間の金融は全部無くなり貯金も全部無効になったそうです。）私達は厄介者になり従兄達に嫌味を言われ始めたのです。無理ありません。上のお姉ちゃん二人が日雇い仕事をして家計を支えていたのです。母さんが「働かず者は食うべからず、おねえちゃん、かあさんの代

わりにお手伝いしてね」と何時も申し訳無い様に言っていました。夜に泣いているのを何度も見ている私は「大丈夫だよ、頑張るね」笑って見せました。

日本海の冬は厳しく樺太と同じく毎日のように雪と風が荒れ生活は益々厳しいものでした。あくる年私は尋常小学校一年生となり、冬の海が穏やかな日は、祖母と海苔摘みに行きます。海苔は高級品で温泉場へ売って来ます。大事な収入源でした。

又、学校から帰ると南京袋をもって山へ松傘を取りに袋を身の丈以上に重ねて背負い、それで風呂を沸かします。又日本海は荒れる日が多く波打ち際にいろんなものが有り中でもクルミは最高です。そんな生活が暫く続きました。

夏休みのある日玄関先に大きな黒い靴が、目に飛び込んで来ました。「あつ父さんだ」大きな背中、声、笑っている父さんがいたのです。私は恥ずかしくて傍に行けませんでした。父は分厚い手で「ご苦労さん。頑張ったね。ありがとうね。」ただ私の頭を撫でていました。樺太で一時足止めをくった父は会社の船で仲間達と逃げたそうです。引き揚げ出来なかった人々を乗せ北海道、青森、秋田と人々を送り返しながら酒田湊へ着いたそうです。ああ、夢じゃないよ！父さんがいるみんな笑っている。

親子全員無事で再会できたのです。  
戦後七〇年、あの時の私達を救ってくれた沢山の人々、たくましい黒い手、赤くしておにぎりを握った手、力強く抱えてくれた手、グローブみたいな堅い手、それらを忘れる事はありません。

## 日立の戦災

渡辺 真喜子（終戦時七歳）

終戦間近、日立の空襲があつた頃、私はまだ七歳でした。当時、私は多賀町に住んでおりましたが、父が出征していたこともあり、母の実家のある東海村とを往復しておりました。下孫駅（現在の常陸多賀駅）から叔母に連れられ、石神駅（現在の東海駅）へ、そしてバスで阿漕ヶ浦で降り、祖父母の家に通つたのです。

その日は、いつものように祖父母の家に泊り、一泊した翌日でした。雲一つないよい天気だったことを覚えています。廊下に干した布団の上に寝そべっていたときのことです。言いしれぬ爆音に思わず空を見上げると、アメリカの飛行機が列をなして飛んでいます。二〇機、いや三〇機はあつたでしょうか、一斉に北に向かって飛んでいくのです。

雲一つない、からりとした日曜の青空を、ドンドンドン…という音を立てながら連隊をなして北の方角へ飛んでいくのです。子供心に、怖いと感じました。何かしら不吉なことが起こる予感がありました。

そこへ叔母が来て、「下孫あたりよ。早く仕度をしなさい」と呼び立てました。緊迫した、ただならぬ様子は子供にも伝わってきました。母たちはどうしているのだろうか、大丈夫だろうか。

それから叔母に手をつながれて石神駅に向かいました。駅への途中、坂を上りながら高台あたりに立つと、北の方角の山の間から大きな煙が空高く立ち上がっていくのが見えてきます。言葉ありませんでした。すぐさま叔母と手を握り、ただただ駅まで急いだのです。「あのあたりよ」

叔母の言葉からは、叔母も煙の広がるあたりが姉家族のいる

多賀町らしいと推測していること、とんでもないことになっていくという焦燥や恐怖の感情が伝わってきました。

石神駅にたどり着くと、うまい具合に汽車に乗ることができました。私たちが乗った列車は、下孫駅までは行くことができませんでした。幸い家は無事でした。私は、母に会うことができた安堵感でいっぱいでした。

ほっとしたのもつかの間でした。

父方の叔父がその日、海岸工場に出勤していたのです。当時、叔父は二六歳、研究生として日立の寮におりました。

米軍機の攻撃のねらいは、軍要工場である海岸工場だったのでした。工場内の防空壕もろとも直撃されたのでした。叔父たちは防空壕に入れば安心と思つて避難したのでしょうか。ところが、入り口をふさがれ、一週間、防空壕の中に入って生き埋めになっていたのでした。その後、連絡を受けて遺体を引き取りに行った母や叔父の兄弟たちの話では、顔は大きく膨れ、むごい姿になっていたといえます。

空襲からしばらく経って、母たちに連れられ、私も海岸工場へ行って見ましたが、子供心にこんなつらいことはありませんでした。寮の叔父の部屋に行き、そこにあつた匙ひとつだけを遺品としていただいて帰ってきました。つらい思い出となりました。

身の安全を考え、自らの命を守るために入った防空壕だったはず。六月一〇日、あの晴れた青空を叔父も見ただけではありません。出口を塞がれ、息絶えるまでの一週間で叔父はどんな思いで過ごしたのでしょうか。国のために、日曜も出勤して研究に励んでいたのでしょうか。

帰りの道すがら、叔父と過ごしたことなど思い起こしながら歩きました。叔父は寮生活を送っており、休みの日に家に帰ってくるという生活でした。その折りには、私たちに手作りのおもちゃをもってきてくれました。私には扇風機を、弟には車などを作ってくれたのです。それらを動かして遊んだことは楽しい思い出です。

今でも空いっぱいのB二九の姿がまざまざと思い起こされます。七歳の子供が体験した、その時の不穏な感覚、恐怖心や言いしれぬ不安感は忘れもせず、よみがえってくるのです。戦争はいやです。

叔父さん、安らかに眠ってください。

## 東京大空襲の体験

和田 昭（終戦時九歳）

### ◇東京大空襲時の私の体験

私は深川区常盤町二丁目に生まれ、東京大空襲の時は深川国民学校三年（学童集団疎開残留組九才）に在籍していた。家族構成は母、長姉（一九才）、兄（都立第三中学校四年一六才）、次姉（旧制高女二年一四才）、私の五人家族である。

三月九日午後一〇時三〇分、警戒警報で起され、全員が家内の床下防空壕に入り、解除を待った。午前〇時過ぎ、東南二キロメートルの木場二丁目に最初の焼夷弾が投下され、続いて東南五〇〇メートルの白河町、三好町にも……、午前〇時一五分に空襲警報が出た時は四方八方に火の手が上がっていた。

午前一時前に「家を火災から守る。」と言う、隣組防火隊員の長姉と兄を残して母、次姉と私の三人で予め決めていた避難先

「清澄庭園」に向かった。清澄通り（電車道）に出ると避難する群衆でごった返し、火災による台風並みの突風で火の粉が雨あられの如く飛び、持ち出した放置布団袋や風呂敷包みに火が点き、それが「火の玉」となって電車道を後から駆け抜けてくる「地獄道」だった。

清澄通りへ出て、一〇〇メートル程、進む間に次姉がいなくなり、母と二人で高橋を渡って、左側二番目の歩道下にある防空壕に入る。防空壕の入口扉は木製のため、焼失してなくなり火の粉が入って来て、私を庇った母が顔や手足に火傷を負傷した。私の入った壕の両隣の防空壕は焼失家屋の倒壊で埋まっていた。

火災が下火になり、明るくなってから探しに来た長姉と兄が防空壕を出たところで、顔の火傷でうずくまっていた母の傍らで泣いていた私を発見した。兄が母を、長姉が私を背負って「清澄庭園」に行き、次姉にも会えた。兄や姉達は「清澄庭園」の大きな池の中で胸まで水に浸かり、助かった様だ。

奇跡的に生き残った私ども、家族五人は「清澄庭園」より清澄通りに出て、家に向かった。清澄通りは、髪の毛のないマネキン人形を黒く焦がした様な男女の別の判らない死体がごろごろ転がっていた。家は完全に焼失しており、ただ金庫だけが、ポツンと残っていた。

母の火傷の負傷もあり、近くの救護所に行き、そこで、懇意にしていた近所の遠藤家の姪に会い、彼女のご好意で、三鷹（下連雀）の彼女宅に母の火傷が回復するまで約一か月、お世話になった。（遠藤家は一家五人全滅だった。）

この忌まわしい「東京大空襲」のショックのためか、現代風に言うPTSDにかかり、五年間通った深川幼稚園と深川小学

校の友達や先生の名前や顔の記憶がなくなつた。しかし、不思議な事に深川小の校歌だけは、歌詞もメロディーも覚えていた。「都の辰巳、空澄みて……」

#### ◇七〇年後に思うこと

「東京大空襲」の一週間後、昭和天皇の戦災地御巡幸があつた事を戦後、記録ニュース映画で知つた。もし、この時、天皇が終戦を決断していたら、悲惨な沖繩戦（民間人一五万人死亡）や原爆による広島、長崎の悲劇も、そして、未だに新聞テレビを賑わしている中国残留孤児や北方領土の問題もなかつたことと思う。

もし、「東京大空襲」がなく、青少年期を東京で過ごしていたら、どんな人生行路を歩んでいたか……と想う今日この頃である。

#### ◇東京大空襲（昭和二〇年三月一〇日）の空襲記録

①警報時刻 三月九日 二二時三〇分 警戒警報発令

三月一〇日 〇時八分 空襲開始

（深川木場に第一弾投下）

〇時一五分 空襲警報発令

二時三七分 空襲警報解除

三時二〇分 警戒警報解除

B二九の大群が東京湾上高度三キロメートルから海面すれすれを滑空して侵入。軍司令部は全く探知出来ず。

②気象 (天候) 晴れ (気温) 三・四度

(湿度) 四九% (風向) 北西

(風速) 七・九メートル冷たい風の強い日

#### ③被害

焼失区域…深川、城東、本所、下谷、浅草の各区大部分。

当時の東京四〇%が二時間半で焼失。

死傷者…死者一〇万人

負傷者…一十万人 被災者…一〇一万人

焼失家屋…約二十七万戸

④爆撃状況 三月一〇日 〇時八分～二時四〇分

B二九、三二五機が単機又は数機に分散して、超低空から焼夷弾（一七〇〇トン）の絨緞爆撃を行った。

大本営発表（三月一〇日一二時）

「三月一〇日零時過ぎより二時四〇分の間、B二九約一三〇機が帝都の市街地を盲爆、各所に火災発生。宮内省主馬寮は二時三五分、その他は八時迄に鎮火せり。判明せる戦果は次の如し、撃隊一五機、約五〇機に損害。」

米側報告

サイパン島、テニヤン島よりB二九、三二五機が出撃。

損害は対空砲火…二機、不時着…四機、事故及び機械故障…一機、原因不明…七機、敵機の要撃…〇機の一四機

#### 銃後の戦場、体験記

青木 昱秀（終戦時一〇歳）

大東亜戦争に負けた昭和二〇年、私は一〇才で、国民学校の四年生、日立市仲小路国民学校に通学していました。自宅は大和町（現平和町一丁目）にあり、位置的には常陸セメント（現

日立セメント)の南西側高台にあり南方方向に日立鉦山の操作場をはさんで日立製作所、海岸工場がありました。

家族は父母と子供六人の八人家族で、父は日立製作所勤務の技術者で、当時は高萩工場で、ジェットエンジンの開発に従事していました。私は三男で、長女は八才年上、五才年上の長男と三才年上の二男、四才年下の弟と生まれたばかりの妹(昭和二〇年二月生)の大家族(当時はこれが普通)でした。

家は大きな子供部屋のある平屋で、東側に広い庭があり、芝生の真ん中にシンボルツリーの「さるすべり」がありました。父は果物の木を植えるのが好きで、周囲に柿、栗、梅、桃の木などを植込んでいました。これらの木々が、結果的に家族の命を守って呉れることになりました。

#### ◇必勝を信じていた軍国少年

当時の教育は、国民学校の幼児といえども戦争一色で、教室に入るにも、入口上部に掲げられた山本五十六元帥の写真に直立、敬礼してから入るなど、軍国調が徹底していました。特に私は、何げなく画いた戦艦大和の絵を学校へ持って行ったら、担任の先生に、褒められ、額に入れて教室の黒板の上に飾られたことがあります、舞い上がってしまいました。それ以来、「加藤隼戦闘隊」の軍歌を口ずさみながら、戦闘機や軍艦の絵ばかり画く軍国少年に成りきってしまいました。戦争には絶対勝つ、最後には神風が吹くと、先生の云う事を信じていました。学校の校舎の一部には、本土決戦に備えて軍隊が駐屯しており、時々「たばこ」や絵を持って慰問に行ったりして、すごく心強く思っていました。

#### ◇一トン爆弾で半身生埋め

終戦の二カ月前、六月一〇日の朝、いつものように登校したら、警戒警報が出たので、自宅へ帰り、庭で兄達と「タドン」作りをしていた。父は振替休日で町内会の集まりがあり、不在でしたが、その日は、妹の百ヶ日の記念写真を撮る予定になっていた。

空襲警報が鳴り、まもなく南上空からB二九の爆音が聞こえて来たので、急いで庭先に作った防空壕に、父を除く一家七人は防空頭巾をかぶって避難した。日製海岸工場方面から爆弾の爆発音が聞こえ始めた。ヒュルヒュルヒュル：ドカン、ドカンと段々と近づいて来る。怖くて頭をかかえていました。ヒュルヒュルと云う音は爆弾の落下する音で、これが非常に長く感じられ、精神的に強烈な恐怖感を感じたことが、未だに頭に残っています。

恐れていた事がついに来た！海岸工場を狙った一トン爆弾の流れ弾が、庭先に落ちた。ものすごい爆発音と同時に防空壕内に爆風と土砂が吹き込み、全員胸のあたりまで埋まった。

壕の入口が、着弾点の方向にあったため、ひどかったが、植木の枝が爆風で倒れ、壕の入口を塞いでくれた。これが幸運であった。これが無かったら、完全に生埋めになり窒息死であった。兄達が入口の枝をどかし棒で突いて穴を明けたら、外の光が挿し込み明るくなり、助かった！と思った。その穴から助けを求め叫んでいたら、町内会の人達が見つけて、掘り起こしてくれた。外へ出て見ると、庭のすぐ先にあった二階建ての家が二軒、跡かたもなく、その跡に直径約一〇メートル以上の挿鉢形の爆裂口が明いていた。防空壕の入口は、その爆裂口の端からほんの二〜三メートル、運が良かったとしか云いようが無い。

泥まみれであったが、すぐに全員で、宮田川の防空壕を目指して逃げた。

途中、セメント会社のトロッコ軌道を過ぎたあたりで、第二波の爆撃が始まった。麦畑の中に逃げ込み、B二九の編隊が行き過ぎるのを待った。避ける物が何も無く怖かった。

空襲が終わって、自宅へ帰って見ると、家は傾いていたが倒れておらず、その日は補強をして一夜を過ごした。この空爆で、日製、海岸工場は壊滅的な被害を受けた。

◇艦砲射撃で一步も動けず

爆弾被災の後、市内の宮本町（現若葉町三丁目）へ転居した。その間、母と子供三人を実家（広島県因ノ島）へ疎開させるべく試みたが、東海道本線が爆撃でストップし、中央線の甲府駅から引返した事があった。甲府駅のホームから見た富士山が印象に残っている。

七月一七日夜、警戒警報はB二九の接近を報じていたが、一棧のみだったので余り気にしていなかった。ところが突然、海上方面から爆音が轟き、山手方面で爆発する音が聞こえて来た。何事が起きたのか、驚いて外へ出てみると、海上沖合より夜空に赤い線を引いて照明弾が飛んで来た。頭上を通り越して山の手で爆発した。艦砲射撃だ！夢中で家の中へ、押入れに飛込み、布団をかぶって息をつめていた。艦砲射撃は、ひとしきり発砲すると、弾を込める時間なのか一時発砲がとぎれる。そしてまた発砲が続く、発砲がとぎれる数分間に、庭に作った防空壕に逃げ込みたいのだが、足がすくんで一步も動けなかった。至近距離の着弾が無かったので被害は無かったが、経験した事の無い恐ろしい体験であった。

◇火の海を逃げ廻る

艦砲射撃を受けた二日後、七月一九日夜、B二九編隊による焼夷弾攻撃を受け、日立市街は焼け野原となった。

その日は、警戒警報が出てから家族全員で人家の少ない山の方へ逃げた。逃げる途中で日立市街への焼夷弾攻撃が始まり、花火のように落ちる途中で、パツパツと分裂しながら火の粉が降りそそいでいるのが見えた。

林の中に軍の防空壕があったので、そこにに入れてもらった。その壕は通信隊で、さかんに交信を行っていた。軍の壕なら、ひとまず安心と思っていたら、しばらくして、頭上でコツンコツンと音がして、焼夷弾が炸裂した。兵隊さんから「ここはもう危ないから山へ逃げるように」と、壕を追い出された。外へ出て見ると周りは、すでに火の海、林も民家も燃えていた。壕の入口にあった防火用水の水を頭からかぶり、火の無い畠の方に一家で逃げ出した。

畑の周りにも、用捨なく焼夷弾が降るように追いかけて来る。スポン！と音がして近くに焼夷弾が落ち、花火のように火を噴き上げる。近くに田圃を見付け、畦道を家族バラバラになりながら逃げ、土手の影に身を寄せ合った。焼夷弾は田圃の中まで、用捨無く追いかけて来て火を噴き上げた。対岸の土手の中腹にあった一軒家に、焼夷弾が落ち、火が着き、そして丸焼になるまで、幻でも見るように見届けた。翌朝までそこに待機。帰宅してみたらず自宅は全焼、押入れにあった父の図書が未だ燃えていた。前日、母が買出しに行き、農家から分けてもらったジャガ芋が黒焦げになっていたが、その焼け残りを皆んなで食べて空腹をしのいだ。

◇遅まきながら疎開

一家八人は、一トン爆弾、艦砲射撃、焼夷弾攻撃の中を、かくぐり、逃げ廻ったが、一人の怪我人もなく、奇跡的に全員無事に生き延びた。この様に完璧にやられても未だ戦争に負けるとは思わなかったし、本土決戦で勝利すると信じていた。(幼児教育の恐ろしいところである)

住む場所を失なった一家は、父の職場の同僚の好意で、母子三人は賀美村(現常陸太田市里美村小菅)へ疎開した。小菅国民学校に転校したが、四、五、六年生が合同のクラスで部分授業だった。しかし授業はほとんどなく、毎日グラウンドの畠の草取りやヒマの実の収穫などの勤労奉仕で過ごした。

八月一五日の玉音放送は、食糧調達(川魚、赤蛙採りなど)のため、川や山を駆け廻っていて聞いていないが、家に戻った時、母から聞いた。今まで教えられて来た事は何だったのか? これからどうなるのか、呆然とした思いであった。それよりも、何よりも明日の食糧の方が心配だった。農村と云えども、よそ者の食糧難は、厳しかった。お金があっても売ってもらえないのだ。戦後の食糧難は、さらに続いた。食べ盛りの子供六人をかかえて、母の苦労は、いかにかりであったか想像もつかない。母は栄養不足で体をこわし、昭和二七年に他界した。六人の子供の犠牲になったのだと、私は思っている。この大戦では約三〇万人の犠牲者が出たと云われているが、カウントされていない犠牲者は数知れない。それにも増して幾層倍の外国人犠牲者を出している。

いかなる理由があっても、英知を尽くして、戦争は絶対避けなければならぬ。多くの犠牲者により手に入れた戦後の平和を守り続けなければと切に願う。

終戦の年の思い出

武田 孝一 (終戦時一〇歳)

◇一トン爆弾攻撃

六月一〇日の朝は、暑くなりそうな気配だった。八時過ぎの警戒警報のサイレンで、生後一週間の妹を背負った母と、私と妹と弟は、大平社宅の南側の崖に掘られた防空壕へと避難した。次々に入ってくる人々に押されて中へと進んだ。人いきれと暑さが高まっていった。やがてB二九特有のキュンキュンという金属音が壕内にも聞こえてきて、次いで、戦闘機が急降下するような音に続いて、地上での破裂音と地震のような響きが襲ってきた。そのたびに壕の天井から、ばらばら、ザーツと土埃が落ちてきた。

壕の中は「南無妙法蓮華経」、「南無阿弥陀仏」という読経に満たされ、もし、近くに着弾したら、この壕の中のひとびとは、このまま生き埋めを覚悟、と思わされた。わたくしは、ときどき、母の背中の妹の鼻の下に指を当てて、呼吸をしているかどうかを確かめるのがやっとだった。

九時半ごろまでに爆撃は止んだようだが、皆さん煤けた顔で、外に出てみると、海岸工場と思える方向に千メートル近い黒煙が上がり、そのなかに、日蝕のような、ピンク色の太陽が見えた。

軍需工場、しかも地下工場を持つと思われて、大量五百発以上の一トン爆弾攻撃を受けた海岸工場は灰燼に帰し、六三四名の犠牲者を出したのであった。

母がこのままでは、生まれたばかりの子育てはできないと、実家のある秋田への疎開を決断した。即、宮田国民学校へ出向き、私と妹の転校手続きを済ませてきた。

## ◇秋田への疎開

一番上の姉が会社の休暇をとって、わたしたちに同行して秋田の母の実家へと向かうことになった。母の実家は、冬は雪の「かまくら」で有名な横手市の二つ先の飯詰駅の郊外、雄物川べりの角間川というところであった。当時の東北への旅は、日立から仙台まで鈍行で六時間もかかる状況であり、途中一泊して次の日の午後に着くという長旅であった。列車の移動は、窓から出入りする、という混雑ぶりで、忍耐、辛抱、我慢を言い聞かせながらの移動であった。やっと最初の乗り換えの平駅（現在のいわき駅）について降りようとしたとき、網棚に載せておいた、妹のオムツの入った風呂敷包みが紛失か盗難に遇ったことがわかった。一同、いわき駅の待合室で、泣き暮れていたとき、親切なおばさんが現れて、おにぎりを分けてくださったことがいまでも忘れられない。

仙台ひとつ前に長町という駅があり、ここに秋田の祖母の妹の家があり、最初の夜は泊めていただき、翌日、東北線で黒沢尻（現在の北上）駅まで行き、そこから横黒線で横手まで。やっと、次の日の午後、飯詰駅に降り立った。そこから、二里半ほどの田舎道を、暑さで汗まみれで歩いて、漸く祖母の家に辿りついたのであった。

祖母の家には、既に母の妹一家が疎開しており、祖母、祖父、長男一家、叔母一家、母の弟、妹、そこへわたくしたち五人が加わったのであるから、一家の跡取りの長男のお嫁さんのこの人数の食糧の調達の大変さが偲ばれた。その後、叔父の葬儀のときに訪れた際、この叔母が、「皆さんに食べさせるために、わたしの嫁入りのときの着物は皆、食糧に変えました」と言われたことがあり、わたくしは、返す言葉を失ったのであった。

学校には東京からの疎開児童が、講堂に蓐藁を敷いて寝泊りをしていう状態で、わたくしたちは、午前の授業が終わると、午後は雄物川の川べりに大豆を蒔いたり、あるときは、全校生徒が学校から片道三里の山へ、野生の蕨の採集にでかけたりした。この日の為に、祖母が編んでくれた草鞋を出がけに結んでくれたとき、祖母が、「戦争でもなければ、こんな苦労はしなくてすんだのに」とわたくしの草鞋の上に涙を落としたことが生涯忘れられない思い出になっている。その草鞋も帰りの道の落雷と大雨のために全部溶けてしまつて、裸足のまま帰宅となった。

このあたりは、二階まで雪が積もる地域で、着いてすぐ驚いたのは、地下に水がたまっていて防空壕が掘れないということであった。したがって、敵機来襲のサイレンが鳴つても、この辺のひとびとはただ、戸外に立って頭上を飛んでいく飛行機を眺めているだけであった。

しかし、戦局が日増しに悪化し、北の土崎の石油タンクも爆撃されるようになってきて、母はもう一度の悲壮な決断をすることになった。それは、日立に遺してきた娘たちも一緒に、どうせ死ぬなら一家全員が偕にしよう、ということだった。最初に、日立に向かったときは、日立が艦砲射撃で、列車が富岡で止まってしまいこれから先へは行かない、ということをやむなく秋田に引返した。

次いで二回目は、今度は、何事があつても秋田には戻りませんと、角間川を後にしたのであった。このときも、長町の叔母の家に泊めていただいたが、翌日、陛下の玉音放送があるというので、近くの公園に集まって正午の開始を待った。当時国民学校五年生の理解力では、やっと三〇分の一ぐらいしか分から

なかつたし、今もって覚えているのは「忍び難きを忍び、耐え難きを耐えて」ぐらいであつたらう。

やつと、近くにいたさるおじさんが、「日本は戦争に負けたんだよ」というのを聞いて合点がいったのであつた。

翌日朝、当時の日立駅について、駅の棧橋を渡ったとき、街中が完全に焦土と化し、真正面に当時の日立鉱山の「共楽館」が夏日の中に輝いて見えたことが忘れられない

#### ◇青空教室

一面焼け野原と化した街中に出ても、何もできなかった。多くの人々が防空壕の中での生活を強いられていた。夏休みが終わつての新学期は、照り付ける太陽の下での始業式の後、それぞれのクラスが、焼け落ちた校舎のコンクリートの上に座つての授業だつた。

午前中の授業が終わつた後は、校舎の焼け落ちた残骸を校舎裏の窪地に竿や板に乗せて運ぶ作業が、来る日も来る日も続いてきた。割り当てられた教室の中で、特に異臭が強い所があり、でも先生方に対しても「なぜ」と聞ける状況ではなかつた。とにかく、その匂いが着衣から身体の表面にこびりつき、幾日も抜けないのであつた。なにしろ、石鹸などというのは、戦後お目にかかつたことは無かつたからである。暫くしてから、その場所は音楽室であり、艦砲射撃で負傷した人々が床に横たえられていたのだが、二日あとの焼夷弾攻撃の際、そのまま、焼死した：という話を聞いてきた友達がいて、やつとその匂いについて合点がいったということもあつた。

その後も、滑川浜の青年館、付近のごみ焼き場、あるいは、観音院のお寺の本堂などと、新聞紙を綴じたような教科書、あ

るいは、今までの教科書の軍國主義を強調した個所などを墨で塗り潰したものを持ち歩いての授業が続いた。やつと出来上がつた校舎は、六三制という新制度の下、中学校併設のもので、教室は週代わりに今週午前中、来週午後登校、というものだった。

このころである、昇降口に置かれた一台の卓球台の周りに、午前か午後の空いている沢山の生徒が集まり何とかして負けないテクニークを磨いたのは。合わせて、手巻きのボールに、手製のバットで空き地に野球が大流行だつたには。その頃生まれの川柳が、「六三制野球ばかりうまくなり」であつた。

民主主義、平和国家などという言葉がそれなりに、社会に浸透していき、日立製作所関連の工場、町工場にも、やつと、物を造り売りにだせるような日々になつてきた。それでも、一軒に子供七、八人というのは珍しくなく、食糧の確保が、当時の親たちの毎日の課題であつた。それぞれの家で鶏やウサギを飼うのはごく普通で、なかには、狭い社宅の庭で、ヤギを飼つていた家があつたほどである。

子どもたちは学校から帰ると近くの森や林に薪を拾いに行き、あるいは、海へ、ワカメやかじめ拾いにいくというのは極々普通であつた時代がしばらく続いていた。そのころのおやつは茨城一号という図体ばかり大きいさつまいもで、これも、茹でて時間がたつと、甘みも失せて、ただただ水っぽい食べ物でしかなかった。

気が付くと、国民学校は小学校と名前が変わり、戦争の傷跡も少しずつ、少しずつ消えていつていたのであつた。

## 平和の願ひをこめて私の戦中戦後 袴塚 昭（終戦時一〇歳）

### ◇戦中の出来事

先の大戦が激化してきた昭和一九年七月に長兄がニューギニアで戦死したとの公報が届きました。その時の母のなげき悲しみは大変なものでした。

当時私は大久保小学校の三年生でした。

その頃から食糧増産と鉄類供出令が出されたとかで校庭は大畑となり道路わきも同様です。部落にあった火の見やぐらも取りこわされてしまいました。

そして忘れもしない昭和二〇年六月一〇日、B二九の編隊がきて海岸工場に向け爆弾の投下が始まったのです。

私の家は桜川町にありましたが我家の上にくると投下が行われました。私は当初、防空壕内にいましたが直下は安全と聞き外に出て不安な思いで見えていました。

その後七月一七日、夜海から多賀工場などに向け艦砲射撃があり、その破片が私の家の押入れに落下しました。

### ◇戦後の生活

#### (一) 食事

一週間に一度位玉子かけごはんを食べましたが子供三人でひとつですから玉子の味よりしょう油の方が多かったです。それでも当時としてはごちそうだったのです。

#### (二) ひと粒の米

食事中ごはんをこぼした時、父親からきつく叱られました。お前達はひと粒の米でも作れるのかと。今でも忘れる事はありません。

#### (三) 子供向けラジオ番組から

夕方五時頃になると戦災孤児収容施設のことをテーマにした放送がありました。

（歌詞の一部）：『鐘の鳴る丘』

みどりの丘の赤い屋根トンガリ帽子の時計台、カネがなりますキンコンカン鳴る鳴る鐘は父母の、父さん母さんいないけど……

このメロディを時々思い出します。

私と同世代の子供達は今、子や孫に恵まれて幸せだろうかと思像し、七十年続いた平和な日々が絶えない事を願わずにはいられません。

### 小学四年生の戦災体験

皆川 直司（終戦時一〇歳）

昭和二〇年の夏、私は日立市立会瀬国民学校四年生だった。

学区内には日立製作所海岸工場がある。私の家は工場の省線門から東に向かい海岸に下る坂の近くにあった。

六月一〇日は朝からよい天気だった。日曜日なので女学生の姉も小学六年生の兄も二年生の弟も家にいた。朝早くから工場の屋上にあるサイレンが警戒警報を報せていた不安な朝だった。

父は会社が休みで家にいたから、その日は六人の家族全員が居たことになる。兄弟は家から離れることなく遊んでいたが、連続音の空襲警報のサイレンを聞いてあわてて庭先の防空壕に



▲伊藤長助さん画（日立市郷土博物館蔵）

入り込んだ。

当時は空からの攻撃に備えてどこの家にも壕が作られており、公共の防空壕もあった。わが家の壕は父が作った家族六人が入ると身動きもできないような小さなもので、天井に薄い板が二、三枚載せてあり、深さは一メートルくらいだった。

そのうちに飛行機の爆音とともに無数のヒューンヒューンという音と、今まで聞いたことのないものすごい爆発音が連続して聞こえた。壕の中でうずくまったまま手を顔面に持っていていき、親指で両耳を押さえ、他の指で両目を押さえた。学校で何度も練習した行動である。衝撃音で耳の鼓膜が破れないように耳を守り、衝撃で眼球が飛び出さないように閉じた目を押さえ、呼吸ができるように口を開け身体を低くするのだと教えられていたのだ。

連続する爆発音、地響きと振動は身が縮まるような恐ろしさで生きた心地もしなかった。耳を押さえる手にも力が入る。爆弾が落ちてくる時の音、炸裂する音が怖いのだ。まわりには家族がいる筈なのだが、真つ暗闇の中では自分ひとりの存在しか感じない。小さな箱の中にひとり閉じ込められ、坂を転げ落とされているような気持ちだ。

非常に長い時間に感じたが、やっと静かになった時、みんなの安全を確かめる父のかすれた声が聞こえた。父はすぐさま会社がどうなっているか見てくると言い出し、家族みんなの「行ってはだめ！」という悲痛な声にもかかわらず壕から出て行ってしまった。

それから間もなく再び恐ろしい音がきこえてきた。爆弾が落ちてくる時の異様な、すごくいやなヒューンという音だ。それに続く破裂する轟音、またひとりぼっちになっちゃった。父

のことどころではない。小さな壕が崩れてしまうような振動だ。神様、仏様なんとか助けてください、早く終わらせて下さいと念じ続けた。音が止み静かになっても同じ姿勢でいた。父が無事な姿で壕に飛び込んできた時は家族みんな喜んで。

ホツとする間もなく三回目の攻撃が始まった。そして四回目と、終わりのない恐怖が襲いかかってくる。四回目が終わってから長い沈黙の時間が過ぎていった。何がどうなっているかわからないが、生きていることだけは確かだ。狭い壕内に息をひそめ身動きしないでいたが、やがて暑さを感じるようになった。もう大丈夫だろうと父が外に出た。四回目が終わってからずいぶんと時間はたっていた。

外に出てもよいとの父の声で、やっと壕の外に出た。外の太陽の光はびっくりするほどまぶしいものだった。いつも見慣れた工場のあたりには黒煙が上がり、黒い鉄骨だけの建屋が見えた。わが家は健在だったが、家の中の壁は落ち、足の踏み場もないような状態だった。

その時、家の裏に今朝までなかった大きな石が転がっていた。黒い斑点がある白い石で、石垣に利用するみかげ石だった。この石は百メートル位離れたところの不動院の石垣のもので、この不動院の石垣付近に爆弾が落ちたことを後で確認している。で、爆発の衝撃でそこから空を飛んできたとしか考えられない。この記念すべき石はその後しばらくの間、わが家の漬物の重石に利用された。

家の外はどうなっているのか、どんな被害状況なのか見たくてしかたなかったが、父は私たちを外に出さず、夕方ちかくなつてやっと外に出る許しが出た。

そこから駅方面を見ると毎日学校へ通っていた道路はなく、

いたる所に大きな穴があり、凸凹の荒れ地と家屋の残骸が眼に入った。不規則に傾いた電柱とたれ下がった電線ばかりがよく見える。電線の一部が倒れかかった電柱と電柱の間に残っていたが、どの電線にもボロボロがぶら下がっている。ボロボロの土色をした不揃いの雑巾のような布の切れ端が路の両側の電線にぶら下がっていた。どうしてあんなにボロボロがぶら下がっているのだろうかと思議でしかたなかった。

不発弾があるという周りの声で、正門橋をわたり見に行った。海岸工場正門前あたりの路上には大きな爆弾があった。まるまる太ったような爆弾だった。鉄が裂けてめくれた胴体の中には、ビッシリと詰まった鮮やかな黄色の火薬が見えた。

相賀町内には一家全滅の家もあり、多数の犠牲者がでたが、痛ましい姿は私の眼に触れることはなかった。

まもなく梅雨にはいった。夜はいやだった。むしろあつく真つ暗な夜なのである。灯火管制といって、夜は電灯の使用が自由ではなかった。外に灯火がもれないようにしたのである。

学校では暗い家の中で衣類を身につける訓練までやった。枕元に脱いだ衣類を順序よく重ね、暗闇の中でもすばやく着衣できる訓練である。

昭和二〇年七月一七日の暑い夜、飛行機の音とともに急に家の中が明るくなった。不安と恐怖のなかで着替えた。真夜中で外は雨だ。やがて、今まで聞いたことのない恐ろしい音が頭の上から襲いかかってきた。

雨の中、また庭にある防空壕に逃げ込んだ。遠くからヒュルルルという音が聞こえたかと思うと、頭の上を越えた音はすぐに爆発の音に変わる。耳で手を覆ったが、ヒュルルルという恐

ろしい音は間断なく耳に入ってくる。いつまで続くのか、とてつもなく恐ろしい長い時間だった。遠くで聞こえる爆発音がだんだん近づくような感じもした。飛行機からの爆弾でないことはわかったが、一体何が始まったのかまったく判らず、暗いじめじめした壕のなかでうずくまっているだけだった。

身近に危険が無いと思つたのか父は外に出た。「海からの攻撃だ、外にでて見てみる」と言われ、おそろおそろ外に出て海の方を見たが、雨の中、暗くてなにも見えなかった。それが艦砲射撃というものだったことは後で知った。

会瀬学区に被害はなかったが、真夜中の艦砲射撃で多くの住民は恐怖に打ちのめされた。

頭上を砲弾が飛んでいくときのあの音は、体験した人のみ記憶に残り、いつになっても忘れはしないだろう。まして子どもにとつては……。

艦砲射撃の恐怖もさめない七月一九日の真夜中、空襲警報と共に飛行機の爆音が聞こえた。真つ暗な家の中で息をひそめていたが、やがて今までに聞いたことが無いようなザーザーという音を耳にした。

わが家の壕では危険と察した父は、海岸近くの岩をくり抜いた避難壕へ逃げると家族へ指示した。赤くなつた上空を見上げると大きな火の塊が見える。手に小さな腰掛けを持ち、避難壕までの最短距離である土手下の隣家の庭先を横切り、無我夢中で走った。五〇メートル位離れた海岸への坂道の途中にある岩をくり抜いて作つた壕には、大人が何人か避難していた。兄と真つ暗なじめじめした穴の一番奥に行き、手にした腰掛けに座った。この腰掛けは家族が「猿の腰掛け」と名付けていたもの

## 狙われた日立工場 大煙突

内山 英子（終戦時一一歳）

で、高さと幅が一〇センチ、長さ三〇センチくらいのものであった。安全な避難場所である岩の壕は、天井から地下水が垂れ落ちており地面には水たまりがあるので、父がこの腰掛けを作ったのである。

遅れて姉と弟も壕に入ってきた。きょうだい全員がひとまず無事であったわけだ。

壕の中まであのいやなザーザーという音が聞こえてくる。やがて静かになったが、今度は鼻をつく油の臭いと煙が狭い壕に充満し、息苦しくなってきた。

いぶりだされるように壕の入り口に出、海の方を見てびっくりしてしまった。見える範囲の海は一面火の海なのだ。白い波ではなく赤い炎の波が、次から次と砕けているのが見えた。波の上を黒い煙が覆い、陸地の方に流れている。この煙が壕の中まで入ってきていたのだった。真夜中なのに一面の炎でまわりは昼間のように明るく、壕の前では声も無く大人も子どももぼうぜんと海を見て立ちつくしていた。

やがて、無事だった父がみんなの安全を確かめるとともに、幸いにもわが家が被害を受けなかったことを知らせてくれた。夜明けとともにわが家に戻ったが、その頃には海の火も消えており、遠くの濱の宮にある工場が炎と黒煙をあげているのが見えた。

昼間、家の周辺を偵察した。不発弾が多いと父に聞いたからだ。昨夜夢中で走って横切った隣の庭先にある木材置場に、列をなして焼夷弾が突き刺さっているのを見た時は身震いした。

昨夜の空からの攻撃が、焼夷弾によって日立を焼きつくすためのものだったと判ったのは後のことだった。

※日立市郷土博物館 二〇〇三年『日立の空襲 語りつく戦災体験』への寄稿

私は六月一〇日を忘れない。

銀色に光る大きなB二九が、会瀬小学校の上にせまってきた。何機位だったかは覚えていない。その時、五年生の私は、三年、一年、三才の弟や妹たちと、日立工場の土手で、ふかしまんじゅうを作ってもらうために、よもぎ摘みに夢中になっていた。

とつさに危険を感じ、小さい弟を背負い、他の弟、妹を引きずる様にして、近くの岩穴の防空壕に走った。ただただ走った。声もない。弟たちも泣かない。やっと辿り着いた時、入口は閉められてしまった。

その時、突然、耳をつんざく轟音と爆風が、すさまじく、小石がたくさん舞い、土が舞った。日立工場への爆撃が始まったのだ。

音が止んだ時、入口が開けられ中に入った。間もなく続けて更に前より強い揺れ、衝撃。岩穴の中にたまっていた水が、うずくまって必死に、目、耳を押さえている顔に、バシヤバシヤとはねる。母はどうなったのか考える余裕すらなかった。ひとしきりの爆撃が止んだ時、母たちがころがり込んで来た。おくられてしまった母は、大きなトランクを持って、途中の粗末な防空壕に一時避難していたらしい。その防空壕は、直撃で跡形もなく、すり鉢状の大きな穴となってしまうていた。トランクはどこへやら、母の身代わりとなって吹き飛んでしまったのだろう。周りの家並みも消えてしまった。

この日は、日立工場に一トン爆弾が五百発も落とされたそう。工場は殆んど破壊され、鉄骨だけの無残な姿となっていた。丁度上役たちの会議があったとか。たくさんの犠牲が出た。工

場の周りの家々も被害を受け、亡くなった人も多かった。地下工場もあると思つての攻撃だったのだろうか。我が家も爆風や、破片で壊され、ただ白いにわとりが二羽、じゃが芋畑にヨタヨタと歩いていった。

父は、警報が鳴った場合、学校を守りにかけつけることになつていった。そのため会瀬小学校が近くの教員住宅に越して来たのだ。父は家が工場の下にあるので家族は全滅と思つたらしい。その後、六人家族は元気な姿で再会を喜び合った。片付けが始まつた。ただちに会瀬地域の人々の炊き出しが始まり、多くの人たちの暖かなお見舞い、ご親切は、子ども心にも忘れない。ご好意により、会瀬小の西側で間借を始めた。その頃海辺では漁夫が、機銃掃射で亡くなつた。

やれやれと思う間もなく、七月一七日の夜、空に照明弾が落とされた。それを合図に艦砲射撃がはじまつた。私たちはわけも解らぬまま昼間下見しておいた二百メートル位南の岩穴へ、かい巻をかぶつてひきずりながら逃げた。

頭上をヒュルヒュルとたくさんの大砲の玉が、山の方へ飛んでいつて「ピカー！ドーン！」とものすごい音で破裂している。私は草むらに迷ひこんでしまつた、と思つたら、突然足が宙に浮いたなと思つたら二階位の高さから下に落ちた。こんな時は怪我などしない。下は丁度岩穴だつた。

この艦砲射撃で工業高校の上あたりにあつた青年学校の生徒たちが多数犠牲になつたそうだ。銀座通りに家があつた親類も破片に当たり亡くなつた。何しろ小名浜沖あたりの艦上からの爆撃だつたらしい。標的だつた大煙突を正確にねらえたわけはない。茨大工学部あたりまで砲弾が落ち、多くの民家人命が犠牲になつてしまつた。

その後、子ども四人だけで磯原へ疎開することになり汽車に乗つたが、高萩の手前あたりで列車が止まつた。米機の機銃掃射が止めたのだつた。「ここからは歩いて下さい」との事、有無も言わず私を先頭に弟たちが線路内を歩き出した。誰も話をしなかつた。「手を引いて」や「おんぶ」という声もしない。「疲れた」もない。やがて暗くなつて磯原に着いた。それから炭こう跡地の方まで更に三キロメートルはあつたらうか。途中、蛙の鳴き声を聞きながら、少しはホツとして父の実家に着いた。田舎なのに飛行機の音がするたび祖父は、「聞こえるから小さい声でしゃべろ」と注意され、電燈には黒っぽい布をかぶせていた。

或る夜、日立方面の空が真っ赤だつた。空襲を受けている最中だつたのだ。焼夷弾といつて途中で八方にガソリンの入つた弾が散れる仕組みだつた。両親はどうして居るか、ものすごく心配だつた。当時電話等あるはずがない。ラジオも無い。

終戦の日、お隣りにはラジオがあり、大人達が集まり、私も小さいながら、親代りでもあるので集まつた。昭和天皇のお言葉「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び…」と戦争に負けましたとの玉音放送だつたのだ。大人たちは下を向き泣いて居た。

昔を思い出して原稿を書いていると、いつきに孫の声に現実に戻る。「ただ今」と元氣な声、「お腹すいた、何かある？」と：今はおいしいものがたくさんある。何と平和で、おだやかで、いつもお腹一杯で：。庭には、あふれんばかりの色とりどり花が咲き乱れ、孫たちも職に就いたり、大学生で学んだりしている。天下太平で伸び伸びと生き生きと暮らして居る。

これからも永久に平和であつて欲しいと祈りつつ…。

歴史の大きなうねりの二〇世紀、その一九三三年生まれの八二歳。まさに激動という言葉そのものの、戦争と平和の時代を生きてきた人間の一片が、どのようなものであったか消え失われぬように語り伝えておくのも後世への使命と思い、記憶にあるものを記しておきたい。

## ◇わたしの少年時代

太平洋戦争が始まった一九四一年一月八日は国民学校（小学校）二年生で、戦争が終わった一九四五年八月一五日は六年生の時であった。小学校のすべてを戦争の中で育つたため、自分の人生に忘れることの無い心身共に大きな影響を受けてしまった。

当時「すべては戦争のため」「欲しがりません勝つまでは」等のスローガンのもと、国民が軍部独裁に左右され押し切られた政治家により、無謀な戦争に突入した。国家総動員令のもと生活や教育すべてが軍国主義一色になってしまった。

六年生だった一九四五年終戦の一年間がとりわけ大変であった。すべてが負け戦で、三月一〇日東京大空襲、四月一日〜六日二三日沖縄上陸作戦、八月六日広島原爆投下、八月八日ソ連北方領土等侵入・八月九日長崎原爆投下、八月一五日終戦。日本国中が悲惨な状態だった。

日立では、六月一〇日午前九時、空襲による爆弾（一トン爆弾五〇八発）を受け、一二〇〇人が亡くなった。

日立製作所は壊滅的被害を受けたが、その周辺の相賀町も悲惨な状態だった。今の国道二四五号線周辺は爆撃された跡がい

くつも谷底のようになり、そこに家の残骸や衣服等が散らばり、倒れ掛けた電柱や電線に衣服などがぶら下がっていた。また、常磐線のレールが折れ曲がり宙に立っているというようなこの世の地獄を見ているようだった。雨が降ると水たまりが爆弾の破片のさびで赤く染まり、死者の血を思わせるような不気味な情景だった。一家全員が亡くなった歯医者さんの家付近に現在慰霊塔（万霊塔）が建立されている。亡くなった同級生もいた。

七月一七日午前一時、軍艦からの艦砲射撃（五三〇発）によって、四七四人が亡くなった。

一番恐ろしかったのが、この艦砲射撃だった。雨で真つ暗な中ヒュル、ヒュルと不気味な音が頭の上を飛んで行き、どこで爆発しているのか分らずただ音を聞き、「ああ、生きていた」の堪えがたい時間であった。

七月一九日深夜から翌日まで、空襲による焼夷弾爆撃（一三〇〇〇発・九六〇トン）を受けた。

八割の家が焼かれ、七三〇二八人が家を失った。死者六五人初崎海岸の崖に掘られた防空壕に避難。目の前の海が火の海（油脂が浮いて燃えている）恐ろしかったが、きれいだった印象がある。日立駅から山まで総て焼け野原になっていた。

## ◇戦中・戦後の生活

総てが、軍事優先と戦争悪化による生活必需品の不足と生産低下の状況下の生活であった。

## 〈衣〉

物が無いため、同じ物を着ていた。穴が開けば、継ぎを当てて着ていた。また、ある者を改良して作り直したり、兄弟のお下がりを着ていた。不潔になり、のみやしらみが発生した。

## 〈食〉

一番大切な「生きること」

「命を守ること」でありながら、一番大変だった。配給制度（一人一日米二合）になるが、現物が無かったり、遅配になっていた。当然米の代わりの代用食としてさつまいも（茨城一号 航空機のガソリンを取るためのイモ）腐れかかったものが多かった。大豆やコウリヤン等の雑穀類。たまに鮮度が落ちて悪臭が出ている「さめ」の切り身が配られた。そんな物では足りないので、家庭菜園・空き地・校庭・道路・屋根まで使って、さつまいも・カボチャ・野菜・豆類等工夫して作った。また、木の実・雑草・海藻等も採集して食べた。一番大変だったのは親で、育ち盛りの子に食べさせるために必死に食べ物を探した。買い出し・農家との物々交換・闇市等、できることは何でもやった。誰もが常に空腹で、食べられないものは何でも食べた。そんな中、餓死者も出た。

学校での昼食時は弁当の包み紙の新聞紙を立てて見えないように隠して食べた（工夫して作ってくれた代用食だから）。しかし、五、六人は外へ出て水だけで我慢していた。家で料理や食べ物の本の写真や絵を見て、いつか食べられるようになったら腹一杯食べてみたいなど話して、気を紛らわせたものだ。

## 〈住〉



▲河原子朝日町日立製作所社宅の家庭菜園  
(1940(昭和15)年 日立製作所多賀工場提供)

ほとんどが焼かれてしまい、親類や知人の家へ疎開をしたり、防空壕やバラック（焼け残った材料を集めて作った仮小屋）暮らしをしていた。幸いなことに私の所はいずれの被害にも遭わなかったが、生活の限界を超えたのと、今後どのようなかにも分らないので、焼夷弾攻撃を受けた後、親類の福島県へ疎開をした。

## 〈日常生活〉

「命」を守り生きることが中心の生活で、サイレン（警報・空襲・解除）の合図やラジオからの情報を常に注意していた。防空頭巾の着用と防空壕への避難。夜は光が漏れないように、新聞紙に墨を塗った窓かけをつるし、電灯にも覆いを掛けて真下だけ照らした。

必要な物は遊び道具も含め、ある物を活用し工夫して作って使った。

## ◇学校

小学校は「国民学校」と改められ、「鬼畜米英」「ぜいたくは敵だ」「欲しがりません勝つまでは」のスローガンのもの軍国主義一色、体を鍛えて兵隊になる教育になってしまった。

学用品も不足し、ノートも印刷物の裏紙や反古紙を活用したり、鉛筆も二、四センチくらいまで竹のケースにさして使った。ほとんどが下駄履きで、体操の時間は全員はだし、音楽の時間でB二九等飛行機の爆音の聞き分けをしたり、図工では戦争画を描いたりした。避難訓練もよくやった。

## ◇戦後

戦争が終ると、すべてのものが一八〇度変わった。「軍国主義」から「民主主義」へ、政治も社会も教育もすべてが大きく変わっていく。どうやって「生きていくのか」不安の連続で、頭も変化に対応できず混乱し目標を失い、不自信や悲惨な負け戦に打ちのめされ、新しい生活へと立ち上がるため心の葛藤、苦しい生活、栄養失調からの死者や病気の増大など大変さを強烈に味わった。

わたしも、多感な小中学生時に激動のなかで生活したため人間形成にまで大きな影響を受け、今までの教育すべてが否定され悩み苦しんだ。いまだに、その影響が出ている。生活も学校も遊びもすべて何もなしからの出発。焼けてしまった学校は、青空教室、午前午後の二部授業、焼け残った校舎もガラスは無し、冬の冷たい風が吹き抜ける中で、震えながらの授業だった。墨を塗った前の教科書（軍国調な言葉、文章はすべて墨で塗って消した）、新しい教科書も新聞紙大に印刷されたものを折りたたんで使った。実験もなし、ただ、講義一方の授業だった。机、椅子もなし、自分で作った腰掛け用の台を毎日持ち帰り使った。まだまだ、書ききれないほどの体験があるが、このような激しい変化と困難さに耐えた小中学校時代であった。

今の平和な国と生活は、命をかけて国を守り築いてきた先人のお陰と感謝し、日本人としての誇りと、伝統・文化を守り、日々の幸せな生活ができることを願っている。また、「生きる」ことの素晴らしさを大切にし、もう二度と悲惨な戦争をしない日本にするために、今できることを力強くみんなで頑張っ

## 七〇年前の記憶

酒井道子（終戦時一二歳）

昭和一九年に入り生活が段々と変化をしてきた様に見えました。食料品は何もかも姿を消し、配給制となり、皆買出しを余儀なくされ、衣類は衣料切符を持参しないと買えない様になり、店頭からはすべて消えてゆきました。その様な時に戦地にいる兵隊さんからの贈物として「ゴムマリ」が学校を通じて配られた事がありました。その時は飛び上がる程に喜んだものでした。そのうち戦況も厳しくなったのでしよう、町では防災の為に称して、通りに面した家屋が強制的に取り壊されました。「ぜいたくは敵だ」「ほしがりません勝つまでは」の標語があふれていました。一般庶民はそれを忠実に守り堪えていました。

七月に入り学童疎開が実行される様になり、六年間学び遊んだ校舎、友達との別れです。地方に縁故のある人は縁故疎開、行く所のない人は集団疎開とそれぞれの道を選びました。夏休みに入った頃、集団疎開をする友達を学校まで送りに行きました。皆で手を振り、まるで遠足へ出掛ける様な状況でした。それ以来二度と会う事のない友達が大勢います。

私は縁故疎開を選び、日立の祖父母の所に親元を離れ一人で来たのでした。二学期から中小路国民学校に転校しました。みんなあなたかく迎えてくれました。秋深くなる頃、東京が危ないと、母弟妹も日立に来て私と合流しました。父は仕事の為一人東京に残りました。

昭和二〇年に入ると生活はますます不便になり、学校では暖房もなく、持参する弁当も粗末なものでした。しかし私達子供は屈託もなく毎日を過していました。その頃東京では激しい空襲に見舞われていたとの事ですが、地方では情報も少なく特に

子供には知る由もありませんでした。

四月になり女学校に入学、その頃から警戒警報、空襲警報が度々鳴る様になりました。五月のある日憔悴した姿で父が日立に帰って来ました。東京の家が空襲で焼けた事、知人が行方不明になり探し歩いた事など悲惨な様子を聞かされました。二、三日で父は亦東京に戻りました。

そしてあの六月一〇日、日立製作所への爆撃攻撃です。空襲警報のサイレンが鳴り響き、防空壕に逃げ込みました。B二九の爆音が聞こえてくると間もなく「ズズーン」と地響きが起これり、壕の壁が「ビリビリ」とゆれた様に憶えています。ひとしきり音が止んだので外に出て見ると、製作所の方に黒煙が「もくもく」と云うか吹き上がると云うかすごい勢いで舞い上がっていました。祖父が現場に行ってみると、大きな穴が到る所にあると話していました。その後私達は日立から離れた何軒かの親戚にお世話になりましたが、なにしろ食糧難の折親子五人では肩身がせまく、母は大変苦労した事と思います。そのため、また日立に戻りました。そうこうしているうちに七月一七日を迎えたのです。

床に着いてからどの位したでしょうか、突然の爆発音、ひっきりなしに襲ってくる地響き、百雷の一時に落ちた様な音、稲光り。何が起きたかわからないまま、家族で身を寄せ合い布団を被っていました。朝になり周りからそれが艦砲射撃だと聞かされました。家の屋根に穴が開きそこにあつたかまどが粉々に割れ、そばに断面がキラキラと刃物の様に光る塊まりが転がっていました。砲弾のかけらだそうです。大人達は市内の惨状に右往左往していました。

その夜再びのサイレン、飛行機が無気味な音をたて空を覆った。周囲の空が真赤に染まり出した。祖父の「早く逃げろ」の声に祖母は七才の妹、母は一才の弟を背負い、私は三才の弟の手を握り安全な場所を求め走りましたが、焼夷弾が火の玉となり、花火の様に降ってくるので、これ以上は無理と思った時、運良く近くにあつた共同防空壕に飛び込みました。もう何人かの人が入って「水をかぶれ」と云われ頭から水を被りました。その間にも「ヒュルヒュル」と焼夷弾の落ちてくる音、「ドスン」に近い落ちる音、「バリバリ」と建物の崩れる音。その都度恐怖に身を固くし外の気配に耳をそばだてていた。母は弟に乳を与えながら「最後の乳かな」とつぶやきました。どの位したか音が止み静かになったので何人かと外に出ると、そこは熱風が吹き見渡す限りの焼野原となっていたのです。皆声もなく茫然として座りこんだのでした。

日立市が連日の空襲で廃墟と化した時、私は一二才。その後何日か壕の中で生活しましたが、何を食べていたか、どの様なものを着ていたか、思い出せないのです。戦後七〇年の今もお戦火に追われている世界の子供達の姿と、あの時の私達の姿と重なるのです。



## 戦争と私と少年時代

熊谷 勝典（終戦時一三歳）

私が、これが戦争なんだ。戦争の始まりなんだ。と思ひ浮か

べるものに灯火管制がありません。小学校三年生（一九四一年）の頃と思っておりますが、当時の日立市は助川町と宮田町の合併の時代で、小学校の名称も国民学校に改称されました。

私は今の日立電線工場あたりの桜内社宅と呼ばれていた、日立製作所の社宅に住んでおりました。この社宅内は全市でもと思われませんが、時刻のお知らせは柱時計でもなく、ラジオの放送でもなく日立製作所の各工場から流されるサイレンの音でした。朝六時に鳴られるサイレンは、朝だ起きろ。七時のサイレンは各工場で作業が始まるぞ。一二時のサイレンに合わせてお昼ご飯にしようという具合でした。

日立製作所からのサイレンによって、間隔のすこし長い連続音の警戒警報、間隔の短い連続音の空襲警報とに区別され、桜内社宅内の全家庭に訓練としての夜間の灯火管制が敷かれました。家中の各部屋は一部屋のみが点火され家族全員が、電灯笠に明かりが漏れないように筒状の暗幕がかぶせられた電灯の下に集まりました。畳に六〇センチくらいの丸さの明かりが灯され、電灯のつけしめは上部のスイッチで大人の手で出来る高さで覚えております。

昭和一六年（一九四一）日本は真珠湾攻撃以来、南にマレーシア半島・シンガポール、北にアリュウシャン列島・アッツ島



▲伊藤長助さん画（日立市郷土博物館蔵）

と戦果をあげ、戦線も拡大し、いつしか敵の空襲の恐れがないとの考えからか、その後灯火管制の実施は記憶にありません。昭和一六年から二〇年（一九四一～四五）の前半は、軍の発表も戦火大でこれぞ日本国と感じ、日本は戦争を世界のどこでしているんだろうと思つた程でした。

日立市が戦争の被害をいやと言うほど被つたのが、昭和二〇年（一九四五）六月一〇日のアメリカ巨大爆撃機B二九一二五機四波五〇〇発にのぼる、日立製作所海岸工場一トン爆撃攻撃の被害からでした。七月一七日・一八日の夜半深夜にかけての米英艦隊一六隻による八四〇発の艦隊射撃攻撃。つづき一九日・二〇日の夜にはB二九、一一五機一三九〇〇発（九六〇トン余）の焼夷弾攻撃。これにより日立市の六四・五パーセントが焼失破壊され、この三回にわたる攻撃により日立市としては壊滅的打撃を被りました。このあと七月二六日午後、模擬原爆「パンプキン」が白銀町付近に投下され死者も発生しました。

一トン爆撃攻撃のときは、頭の真上から落とされた爆弾は斜めに目的に向かって落ちて行くと教えられていたし、軍国少年の私は爆撃攻撃は初めて見たもので、B二九から落とされた爆弾を海軍の戦闘飛行機ゼロ戦と勘違い、四倍も大きいB二九に勇敢に立ち向かう姿に感動と拍手を送った程でした。その瞬間東側の海岸工場からもくもくと黒煙が立ちのぼり爆撃の強烈さを思い知らされました。

海岸工場から直線四キロぐらいの二戸建ての上の内社宅の西側に住んでおり、被害はありませんでしたが、東側の隣は柱と土壁の間に亀裂が生じ畳みに土が散乱しておりました。飼っていた子猫は腰が抜けたようで歩けなくなっていて、工場からの爆発音は覚えておりませんが、爆風の強さを感じました。

昼過ぎ工場近くに行ってみますと、あちらこちらに大きな穴があいていており、近くのお寺の南側の畑に白いものが落ちておりました。夏大根だとよく見ますと飛ばされ血が流され白色になった人間の手か足でした。友人と逃げるようにその場を立ち去りました。今の日製野球場の中にテントが張られており、野球場隣接の体育館から負傷した兵隊さんが運び入れられておりました。

七月の模擬原爆投下のときは、ただ一機の来襲であり不思議な思いがいたしました。後に原爆は一機で行ったことが解りました。

八月に入りソ連軍の日本領土侵攻のニュースがはいり、一五日の午前中に重大ニュースの発表があることがラジオで報道され、軍国少年の私には、このニュースは日本は強いんだ全世界の国々を相手にしても戦争には負けないんだ。ソ連に宣戦布告をするんだとおもいを強くしたものでした。

しかし、正午のラジオ放送は、日本は連合国に無条件降伏をするという内容のものでした。

軍国少年の私としては、体内の力が抜けてしまった思いでしたが、その夜各家庭から明かりが漏れ、夜は暗くしなくてもいいんだとの安堵感も浮かんで来ました。

夜半、警戒警報に続き空襲警報が発令され、各自カバンや荷物を背負い近所のひとびとと西成沢の山の中に逃げたり。庭に畳み一畳大ほどの四角い防空壕を掘り、布団などの寝具を埋めたり。土手に防空壕を掘り、防空頭巾を被りその中で身を潜めたり。そんなことをする必要はもはやないのです。

家の近くの東斜面の段々畑に大人の人の身の丈ほどの不発の焼夷弾一発が見つかり、これが爆発したらと考えるとゾウーッ

とする、と家中での話題になりました。

両町合併でこれから発展と言う日立市も、戦後の人口は、合併時の半数以下の三万八千余となりました。

五年前からの戦争継続、特に八月までの半年間は何だったのか。戦争とは何だったのか。いまもって答えのない思いの日々であります。

### 日立工場空襲爆撃と戦争の悲惨さ 鈴木 一夫（終戦時一四歳）

昭和一六年一二月八日真珠湾攻撃によって太平洋戦争が勃発しました。

戦局は南方各諸島の攻略必勝によって、制海空権を制圧し日本全土は勝ちいくさに盛り上がり、必勝が続いていたが、昭和一七年ミッドウェー海戦において日本海軍は大敗し、太平洋の主導権を奪われてしまいました。資源のない銃後では昭和一八年夏頃から物資不足で、お寺の釣鐘から各家庭の金物、カヤの吊り輪まで強制供出が行われた。又、食糧事情も悪化し、各家庭が食糧の割り当て配給では足りず、米、麦を求め農家への買い出しに、モクモクと黒煙のひどい汽車に乗り、母の着物を背の買い出し袋に、物々交換に行ったが、子供では米や麦には変えられずサツマイモとの交換でした。母の大事な着物がイモに、悔しかった。食事もイモ・大豆や野菜の入った飯、イモの中に米粒が見えるイモ粥、夕食が南瓜かイモだけの時もありました。ひもじいどん底生活でした。

昭和一九年五月アツツ島の玉砕により、日本本土空襲の拠点となりました。

七月にサイパン島の陥落、昭和二〇年一月にフィリピンに米軍上陸、三月には硫黄島の玉砕、沖縄本島に米軍上陸と戦況は加速的に悪化してきました。

五月に父の祖母から助川は軍事工場が近いので危ないから、実家の隣に空き家があるとの事で疎開をしました。私の転校は二期期からにすることで、助川国民学校に通学してありました。高等科は勤労働員によつて、父と同じ工場の上台にあつた鑄造課に務めておりました。六月九日、三笠宮殿下の激励、ご来社により、六月一〇日は振替休日でしたが、律儀な父は工場防護員の責任上出勤でした。朝六時二〇分、元気な声で「行つてくるよ」と弁当を抱え出勤する父に、「いつてらっしゃい」と声をかけ玄関をでる後姿を見たのが最後でした。

この日が父との別れになるとは夢にも思いませんでした。午前六時四五分、警戒警報発令が、ラジオから「敵B二九編隊伊豆諸島を北進中」の放送でした。

父が工場に着いて間もない、午前七時五分、鳴り響く空襲警報のサイレン、ラジオから、「敵B二九編隊静岡付近を東北進中」の放送に東京方面だろうと、時間の経過と共に緊張感もほぐれ間もなく解除だろうと思っていました。警報発令から二時間近い、午前八時五四分、異様な爆音のB二九編隊一三機が見えたと同時にゴー、ゴゴーンと爆撃の爆発音と、爆音が交錯して万雷一時に落ちた様な音が聞きました。低く飛ぶB二九を見ようと二人ほど防空壕から出て樹陰から見上げておりました。南から北にとB二九の編隊が第一波が来襲して、約五、六分経つたことから、第二波、第三波、第四波と波状攻撃の轟音と爆発音が聞こえる壕の中は恐怖で、皆、静まっていました。

爆音も遠のき、午前九時四〇分警報が解除されました。ホッ

と胸をなで下ろし、南の方向を見ると山合いから黒煙がたち昇り空を覆っているのが見えました。情報によると今の爆撃は日立海岸工場との事で、母も姉弟も元気に出勤した父の安否が気になりました。すぐにも飛んで行きたい胸も張り裂ける思いの母は、乳飲子がいて行けません。大事にして置いた米をはやる気持ちで炊きだす、父は昼食も食わずに腹を空かしているのはと、炊き立ての飯で日の丸弁当を作り、「早く姉と助川に行け」と急ぎ立てられ、姉と二人線路の上を父の元気な姿を思いながら、黙々と歩いた、やっと助川駅に着きました。小走りでも工場近くの叔母の家に行くと顔面蒼白で唇の色は無く、小刻みに震えており、父は来ていない何の知らせも無いとの事でした。早く現状をと工場近くまで行き、その惨状を見て啞然とし姉の手を握り震えが止まりませんでした。爆弾の爆発痕には赤く染まった水溜り、建屋の鉄骨は鉛細工の様にも無残にヘシ曲がり折れ、スレートはすべて吹き飛び、黒煙がモウモウと舞い上がり空を覆っており、昨日までの穏やかな晴れた日とは、うって変わった凄まじい形相の廃墟と化した工場でした。

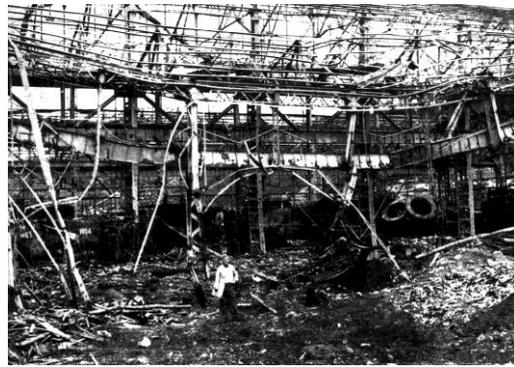
日暮れ前、涙顔の叔母に別れを告げ家に帰り、母と叔父に工場の現状様子を話しました。母は台所の片隅で泣いており、ひと晩一睡もせず夜を明かした様子でした。爆撃の翌日遺体の収容所が日立高等女学校のこと、母と叔父と三人で収容所に出向きました。幾十と並ぶお棺をもしや父ではと、ひとつ一つ蓋を持ち上げ捜しました。無残な全身黒焦げの遺体、服はボロボロ全身無数の傷痕の遺体、足のない遺体、胴から下半身の遺体、首のない遺体もありました。救出され持ち込まれてくる新しいお棺も蓋を取って捜しました。

悲惨な遺体の無残さに涙が流れ落ちました。この収容所にい

る人達は我が肉親を捜す遺族の方達で五日も経つと目は血走り  
疲れた様子でした。爆撃により工場では多くの犠牲者の中  
で、判然としない不明の犠牲者は六〇数名あり、その犠

牲者に父も入っております。戦争  
は人も物も環境もすべて奪う恐  
ろしく残酷なものであり、戦争を  
知らない世代が大半を占める現  
代、この様な戦争の悲惨さを言い  
伝えることの大切さを、戦争は二  
度と起こさない、平和な世界を祈  
り願うものです。

戦争の恐ろしさを悲惨さが身  
にしみ、忘れることの出来ない体  
験でした。



▲ 1トン爆弾で破壊された海岸工場  
(米国国立公文書館蔵)

### 須田 武 (終戦時一五歳)

◇軍隊生活を顧みて

昭和一九年三月、市内の国民学校高等科二年を卒業して、同  
年四月、陸軍の少年飛行兵を志願して、東京陸軍少年飛行兵学  
校へ入校して、以来、一年五カ月の軍隊生活を体験しました。

我々の育った頃は、戦時華やかなれし頃で、今の若者が車に  
憧れる様に、男であれば、海軍の予科練、海の荒鷲か、陸軍の  
少年飛行兵、陸の雛鷲でした。私もご多分に漏れず、一四才と  
五カ月で軍隊生活に入りました。今、その昔を想い出し乍ら書  
いて居ますが、私の人生観と云うか、ものの考え方を教えられ

た処だったかと思いま  
す。

概略を申し上げます  
と、昭和一九年四月一二  
日、東京陸軍少年飛行兵  
学校、入校、採用予定者  
として、集められて、第  
二次身体検査後、合格者のみが、中隊へ、配属となります。身  
体検査は厳しく、風邪を引いて居ては、不合格、腹具合が悪く  
ても、不合格です。

昭和一九年一〇月兵科決定、操縦、通信、整備と、区分けさ  
れて、私は整備科となり、一つ隣の中隊へ編制替えとなり移動  
しました。

昭和二〇年三月同校卒業。同年同月、所沢陸軍航空整備学校  
電気班へ編入。同年四月、学校制度廃止となり、紺第五六〇部  
隊と改称。同年五月一日、陸軍上等兵を命ぜられる。同年六月  
一〇日、同命令の伝達式があり、丁度、この日は日立の空襲の  
あった日の様でした。

同年七月末、岩手県盛岡市厨川へ、紺第五六〇部隊分屯隊と  
して移動、同年八月一五日、終戦。

同年八月末解散、復員、仙台より上り列車にて、朝の薄暗い  
処を日立に着き、焼野原の中、家を探して、家族と逢ったのが  
昼近くだった事を今でも思い出します。

我々が飛行兵学校卒業の少し前に、教官より「お前達は、御  
国に捧げた体、何時でも死に征ける様、準備をして置け」と云  
われて、当時の事ですから、髪の毛と指の爪等を紙に包み、辞  
世として「大君の御楯となりて空に征き死して皇国の華と散る



なり」と書いて、残りましたが、後日、中隊幹部との四十六年振りの集いで出席して下さった教官より見せて貰い感動致しました。

学校時代が一番のメインですが、校風は、至誠、純真、元氣、周到、と云いまして、日課として四月より一〇月迄は、朝五時半起床、午前中は普通学、午後は実技、夕方五時半夕食、三時半位で学実共終り、四時以降、六時の頃迄に決められた順で入浴をします。そして、六時半頃より七時半迄自習、少し休んで八時半頃迄自習時間となつて居ました。九時に日夕点呼があり九時半には消灯ラッパが鳴り、本当は寢床の中でラッパを聞くのが普通なんですが、消灯して、薄暗い中を、班長さんの説教が始まります。当日の行動に対して、一人一人の反省です。特に整理整頓に関しては厳守の心構えです。午前午後の学実の訓練中、内務班（常に生活して居る部屋を言います）の整頓棚に支給されて居る、第一種軍装（外出着、制服）、体操着（体操時間の時に着用）等を角をきちんと付けて重ねて置くのですが、私は無器用で揃えておくのが大変でした。これが整頓が悪いと云うので、ひっくり返されて居る事です。学実の休息時間の一〇分間の間に整頓し直ししなければいけないので、これ又、大変な事でした。幸いにも私は何とか、その様な事には成りませんでした。

そして、軍隊に入りますと、先ず最初に覚えなければならぬのが軍人勅諭です。一週間の間に覚えなければ、週一度の外出許可が生まれません。また当番制で、夜間、みんなが寝て居る間に不寝番（二人で起きて居て部屋廻りを監視する事）をする事です。それでこれにも守らなければならぬ項目が幾つかあつて覚える事が大変でした。

話は前後しますが、私は飛行兵を志願した時の募集項目の中で志願者の資格が決まつて居て、大正一三年四月二日より昭和五年四月一日の間に生まれたる者となつており、日立からは、同期生として七名居ます。

九州知賢の特攻記念館に行く時五人で笑顔で写した写真が飾つて有りますが、「小犬を抱いた特攻兵」と題して、出撃前日、毎日新聞のカメラマンが写したものだそうですが、あの人は、我々より六カ月前早く昭和一八年一〇月九州の大刀洗陸軍飛行学校にて訓練された少年飛行兵出身者です。昭和二〇年五月二十七日、九州万世基地より飛立つて沖繩沖にいる米空母に体当たりして散華された方々です。こうした人々の又多くの戦災で亡くなられた方々の犠牲の上に我々誰もが居る事を忘れないで居て欲しいと私は思います。

私の三つ年上の従兄弟も昭和一八年一〇月海軍を志願して、工作員として昭和二〇年二月の頃戦死しました。又、多賀工專に行つて居た従兄弟も繰上げ卒業で学徒動員で海軍に編入されて、昭和一九年始めの頃学徒徒兵として、海軍に入り、昭和二〇年二月末、フィリピン沖にて、戦死されました。

今年には戦後七〇年、なぜ日本は戦争に入ったのか、その事を皆んなで考え、良い知恵を出し合つて、国を掌る方々をお願い申し上げます。

◇海外邦人 軍人引揚げ船特別輸送艦「竹」

私は終戦後、復員してから、昭和二〇年一〇月末の頃より昭和二二年四月初めまで、元駆逐艦「竹」、当時は特別輸送艦「竹」と云いまして、第二復員省久里浜運搬部に所属して、海外からの邦人軍人等の引揚げ輸送業務に従事しました。

当時は乗組員不足により「復員軍人集まれ」の新聞募集により、元陸軍の少年飛行兵や、船舶兵、海軍からは予科練出身者も多く集まりました、元海軍機関学校にて一週間、海軍生活を体験しました。

そして、横浜より同艦に乗艦して、賄部の手伝い要員として勤務しました。

最初はパラオ島より邦人を乗せて浦賀へ引揚げ、グアム島より沖縄人を沖縄まで、上海より軍人を乗せて浦賀まで、これは二度続けました。

最後の頃は、コロ島より邦人引揚げでしたが、戦争の悲惨さを見じみと見せ付けられました。女の人の服装、身なり、格好です。数人の人だけですが、髪の毛は短くし顔色はぱつとして居ませんでした。話に聞けば八月九日ソ連参戦により、あちこちと逃げ隠れして、途中泣く赤ん坊は、中国人に渡したり、亡くなってしまった子供は途中埋めたり、顔には、鍋墨等を塗り付けて、汚れた服装をして居たそうです。

この仕事の後、船員生活をしましたが、昭和二〇年三年六月、貨物船に乗組、北緯五一度のアレキサンドルス、サワリンスキ―へ石炭積みに行きましたが、人夫が、積込んだ石炭を平らにならす作業を乗組員がさせられました。

最後の航海、コロ島からの引揚げで航海中、コレラ患者二名の死亡、水葬が有りましたが、或る一人の女学生は友達が亡くなり、水葬の時「私も一緒に沈めて」と棺桶にしがみ付いて離そうとしなかった光景は、年は私と幾らも違わない様な人だっただけに可哀想で今でも目に浮かんできます。

舞鶴に入港後、コレラ患者発生、急遽、佐世保へ廻航、約一ヶ月、乗組員も一緒に佐世保港沖に隔離させられました。

◇戦死した兄（日誌より）

昭和一七年二月、兄は水戸工業卒業、龍ヶ崎工場で働いていたが、入営の通知が来た。当時は満二〇才になると、兵役の義務があり三年位、訓練を受けることになっていた。

二月二十七日、明日入営するので、投げ餅を投げ、お祝いの食事をする。

二月二十八日、朝から天気が良いので、皆喜んでいた。兄は九時の汽車で行く。入営する人は一三人、見送りの人が沢山集まり、何度も万歳をする。汽車が来て、走り出した。僕は追いかけて、手を振り、「元気で、頑張つて」と叫んだ。その日の夜は早く寝たが、とてもさびしくなった。

兄は宇都宮に入営、その後、中国の北支で訓練を受け、山西方面の作戦に参加する。しかし、戦争が激しくなり、援軍として、ニューギニアのウエクリに上陸し、通信兵として、ウエワク、アイタベ、マダン、ヤカムルで激しい戦いをしたようだ。

戦地よりの軍事郵便が四回来た。それにより南方に行ったのは分ったが、現地で食糧の自給のため豆、トウミギ等作っていると。戦争をしながら、畑を作るなど、不思議に思っていたが、今思うと、日本よりの補給路が断たれ、食糧不足になってしまったのだろう。

昭和二〇年八月一五日、私の家は一トン爆弾、焼夷弾の被害を受け、長かった戦争が終わった。

昭和二十一年一月三日、隣りの家の兵隊に行っていた人が帰って来た。そして兄の安否を心配して、三回も聞きに来る。「生きていれば、もう帰ったはずだ」と。遠く離れていたのが、兄の

安否を気づかっているのだろう。

一月二八日、兄の原隊から、三八〇円が送金されてきた。

これは、兄が自分の手で、送ってくれたのかと思つて喜んだが、このようにお金が来ると、死んだ公報が来る前兆だと言われた。兄、兄と心がかける。

二月三日、父が未復員軍人の家の集会に行き、帰つてきて、「河という部隊はニューギニアでも、激しい戦いをしたようだ、又、食料不足で死んだ人も多い、今は生き残った人を復員船で帰国させている。今月二〇日頃には、帰つてくるだろう。帰つて来なかつたら戦死したと思うほかない。二〇人に一人しか生きていない」と。

六月一四日、心配しているものが来た。戦死の公報と、白い布で包んだ小さな箱、何が入っているのかと、振つてみると、カタカタと音がする。小さな骨でも入っているのだろうか、開けてみると、英霊と印刷された小さな紙片が一つ、入っているだけだった。遅くなつてもいい、帰つてきて欲しいという願ひも消えた。思えば思う程、沈むばかり、姉はシクシク泣き出した。自分も二つ三つこらえても涙が出てきた。

兄よ、よく頑張った。静かに眠れ、俺が父母を大事にしてやるから、在りし日、兄と遊んだことが、走馬燈の如く思い出される。

六月一七日、町内の人が次々と来て、兄の仏壇を拜んでくれた。しかし、兄は本当に戦死したのだろうか。三年間も、連絡がない、葉書も来ないのだから、本当なのだろう。戦死の公報があつても、帰つてきたという話も聞く、遅くつてもよいから、帰つてきて欲しい。

#### ◇国による慰霊巡拝の参加

平成二〇年七月、日立市報に厚生労働省主催の慰霊巡拝にニューギニア方面があるのを知り、申し込み参加した。

一〇月一八日、私達慰霊参加者は成田に集合、総数三二名、茨城県よりは三名、戦死地ごとに二班に編成され、飛行機で午後九時五分発、ニューギニアのポートモレスビーへ、午前四時半に着く。明るくなつていた。

一〇月一九日、マダン周辺慰霊。小さな船に乗る。南洋なので波は静か、目的地のニューギニアに上陸できず、海上で戦死された人へ、花束、線香を船上で供える。

船を下り、その後、戦争した跡地めぐり、大きな大木の繁った密林の中に墜落し、翼が折れた双発機、海が見える高台に速射砲が保存されていた。このあたりに司令部があつたと言う。その跡地に、コンクリートの慰霊碑があり、表面に日本とニューギニアの地形、中央に忠魂と刻まれてあつた。

私達は祭壇を作り、日の丸の旗を掲げ、供物を並べ、線香を上げていると、珍しそうに上半身裸の子供、沢山の人が集まり眺めていた。

一〇月二〇日、ウエワク周辺慰霊。波の静かな海岸、ここから沢山の日本の兵隊が敵前上陸し、激しい戦いをしたという。慰霊碑があつた。その上に穴のあいた鉄カブトが、かぶせてあり悲しく思った。



一〇月二一日、アイタベ、ヤカムル周辺慰霊。柵の中に慰霊碑があり、樹木が植えられ、その枝に、トウミギが五ヶ吊され、中央には仏像が建てられ、きれいに清掃されていた。

兄は、ここで戦死したようなので、写真、私が書いた般若心経、菓子等を供え、焼香した後、海が近くなるので、きれいな石を兄の遺品にしたいと拾う。

この慰霊碑のすぐ隣りに、日本の援助で設置された太陽光発電設備があり、現地人の家に電灯があった。

一〇月二二日、マルンバ周辺慰霊。南無遍照金剛第一中隊の碑があった。私達が日の丸の旗を立て、焼香していると、現地人が沢山集まってきた。松葉杖の老人が、「モンシカメヨ、カメサンヨ」と、ここにこしながら歌い出した。私はその老人と肩を組んで、続けて歌っていると、現地人もみんなそれに合わせて、何度も歌う。しばらく、なごやかな雰囲気包まれた。

一〇月二三日、ウエワク周辺慰霊。慰霊碑は、戦死せずに生き残った人が、帰国まで滞在したという島が、よく見える高台に、その脇に、機関銃が固定されてあった。

一〇月二四日、ニューギニア全体の慰霊。ニューギニア全体の慰霊祭用としての建物、国旗掲揚塔があり、周囲には樹木、池があり、ハスの花が咲き、美しい公園だった。茨城県知事よりの生花を供え、慰霊のことは、平和への誓い、焼香する。

一〇月二五日、ポートモレスビー空港郊外慰霊。ポートモレ



スピーは、ニューギニア最大の都市であるが、西部にあり、日本軍は東部より攻めたので、高く険しい山々があり、落とすことが出来なかった。

ニューギニアの戦いは、米、濠の連合軍との戦い、初めは勝利していたが、海上補給路が断たれ、後半は食糧不足、やせ細り餓死、更に、熱帯地のマラリア病との戦い、兄もマラリアになり、苦しんだようだ。

正義のため、国のためにと、二四才の若さで散るが、はるか遠き望郷の念を抱き、年老いた父母、姉弟を思い、早く日本に帰りたいたい、何度も思ったことである。

今なお、ジャングルの中に、沢山の白骨が埋まっているという。兄の遺骨も、未だ帰って来ていない、一日も早く回収し、祖国日本で供養したい。

厚生省の人の世話で、ニューギニア慰霊が現地人とも和やかに、予定すべての慰霊地を巡回供養できたことを、感謝致します。

兄が戦死したことで、遺族会に入会、靖国神社参拝、日立市の戦没者慰霊祭の参列、供養してきた。兄は人間として生まれ、長男として家を守り、父母を助け、人生を長く楽しみたかっただろうに。

戦争というものは、いかに愚かなことか、私達は、過去の苦しみ、悲しみの中より、何とか立ち上がってきたが、平和国家になるようにさらに努力し、発展させていきたいと思う。



戦後七〇年を経た今、兄は戦争の犠牲になつたのではなく、港で波を防ぐ堤防の礎になつて、私達を荒波から守ってくれてゐるのだ。

沢山の戦没者の方々にも感謝の念を忘れないようにしたい。

#### ◇戦争中の中学校

中学二年生（今の日立一高）になると、戦争に勝つたためにと学校は軍の予備校化していった。

英語の授業はなくなり、体育は軍事訓練、体育の先生は配属将校の助手になつた。授業が始まる前には「軍人の賜わりたる五ヶ条」を全員で斉唱し、一人でもさせられ、声が小さいと「大きな声で」と気合いを入れられた。

授業は地上戦の仕方としての歩伏前進、傘型展開をする。腹ばいになり、右手に木銃を持ち、左腕で前に進むので、服が汚れ、ひじが痛かつた。最後は突撃、立ち上り、走つて行き、わら人形を「エイヤー、エイヤー」と何度も突く。声が小さいと、気合いが足りないと言われ、やりなおしさせられた。

登下校は足にゲートルを巻き、白いカバンを肩にかけ、木銃をかつき、町中いたる所、軍事色になつていった。

夜行軍をする。夕方四時に中学校集合、第一回は高萩小まで、第二回は常陸太田駅まで木銃をかつき歩いた。夜見る景色は、今のように道路には街灯がないので、こんもり茂つた樹木が、夜空におぼけのように見え、何となく気味悪い。帰りは眠くなり、眠りながらも歩いている。「一時止れ」の号令が出ても歩いていて、前の人に当たつたりした。

校庭にはグライダーが搬入され、上級生が乗り、ゴムロープをみんなで引く。地上二メートル位は滑空する。気持が良いだ

ろう、乗りたいなどと眺めた。

雨天体操場には、鉄砲が掛けられ、四、五年生は校庭の隅に造られた射撃場での撃つ訓練が始まつた。

二年生になると、先生は予科練航空隊の受験を、熱心にすすめてきた。

受験し兵隊になり国を守る。非常に大切なことである。しかし、場合によっては戦死する。受験するということは、死を覚悟することだ。

机を並べ仲良しだったH君は、予科練航空隊に合格し、さつさとしてしまった。

私はどうすれば良いのか、死が怖いのか、落着かず、悩み、苦しみ、集中しての勉強は出来なくなつた。

とうとう私も、この学校全体での熱気に押され、予科練を受験する。しかし、視力、身長が少し足りないと、不合格、恥ずかしかつた。どうすれば良いのか、又悩み、苦しむ。

国のため死ぬ、死を恐れているのか。暫らく過ぎて、戦車兵の募集があつた。今度こそはと、受験する。

「合格」の通知が来た。本当に嬉しかつた。

昭和一九年九月、戦争は増々激しく、戦争用品増産のため、中学生も学徒動員となる。

現在の助川中学校の所に、日製の教育工場があつた。

軍歌を歌つた後、諸注意を聞き、工場の仕事での必要な基礎的技術のやすりがけ、ハンマー打ち等の練習をする。

ハンマー打ちは、左手に持つた鉄の棒を、笛の合図で、ピージャンと、ハンマーを振り上げ叩くのだが、誤つて手を叩き、コブが出来、痛かつた。四日間訓練を受け各現場に配置された。

私達は、日製の会瀬工場の製缶課で、輸送船の大きなボイラー製造の仕事だった。

工場の中はうす暗く大きな鉄の筒が何本も並べてあり、クレインが走り、ダダダダという大きな連続音、青白い溶接の火花、工員達が黙々と仕事をしていた。

ボイラーは、厚い長方形の大きな鉄板一枚を千トンプレスで、半円形に押し曲げ、合わせ円筒形にし、両端に鏡板を付けて完成する。

その合わせ目を、電気溶接するが、凸部になってしまった所を、圧縮空気を利用したニューマジックハンマーで、削ったり、叩いたりして、平均に平らにする。

この仕事を私達中学生にして欲しいとのことだった。

こんな大事なこと、経験の全くない私達に出来るのかと心配になったが、工場に来たのだから、やるほかはない。指導員が削り方、姿勢、色々と教えてくれた。また友達と競争させられ、技術が向上していった。「それで良い」と言われた時は本当に嬉しく戦争に役立つことが、出来たと思っただ。

しかし、大きな鉄のボイラーの中に入って削るので、ダダダの連続騒音、耳に綿をつめているが、家に帰っても消えず、小さな声は、聞き返すことが多くなった。

一月二十八日、千トンプレスの所で仕事をしていると、午後三時頃警戒警報が鳴った。事務所へ心配なので聞きに行った。敵機は四機である。

続いて空襲に変わった。暫らくすると汽笛が待避を告げた。外へ出て南の空を見つめていたら、飛行雲と指をさした。見ると、細長い白い雲、B二九の雲が四本長々と蛇のように、その後を日本の戦闘機が細い雲、追撃しているのだろうか、落とし

てくれと祈る。

初めて見た。戦争が苛烈になってきている。もつと頑張り兵器増産しようと誓った。

二月三〇日、防空壕が心配になってきたので、父と山へその材料を切りに行き、太い松、杉を取ってくる。

午後より、防空壕を前よりも大きく、床をつけ、柱を組み合わせて頑丈に、作りなおす。

昭和二〇年一月一日、元旦から警戒がなったが、弁当を持って三学期の始業式に登校するというのは初めて、今の戦局が重大であることを強く感じた。

式が終って、四、五年生の数人に、工場での作業の仕方考案について、表彰状が渡された。自分も頑張るぞと誓った。

報賞金一〇円とわらじをもらって工場に行く。工場は、いつもと変わりなく皆働いていた。三時に慰問袋が配られた。みかんが一杯入っていた。神棚に供えた後、家族と食べた。

戦争が激しくなってきたので、日曜日はなくなり、毎日が「月火水木金」の仕事の連続だった。

中学生として学問を学び、知識を広め、身体を鍛える時期を学徒動員により、工場で過ごした。戦争に勝つためにと、騒音の中、初めての機械を使用しての仕事で、出来るか心配だった。

しかし、会社の指導員、工員、みんなが我々中学生をあたたくかく、失敗しても叱らず修正してくれる。そして、安全に注意した機械の取扱い方、グラインダーでのドリル、タガネ等の研磨の仕方、その後の生活技術として、基礎が出来て役立った。

苦しく辛いことも多かったが、素直に戦争に勝つためにと頑張った頃がなつかしい。

◇一トン爆弾

六月一〇日は、日立工場は休日だった。

朝から警戒警報が出ていたが、私達勤労学徒中学生は、大久保の山で兵隊さんと、松や杉の伐採を始める。間もなく、グリーン、グリーンと、にぶい爆音、木の間より空を見る。

B二九が編隊を組んで、北の方へ飛んで行く、どこへ行くのだろうと、木の間から、眺めていると、バンバンバンと、弾丸の破裂する音、白い煙、下から高射砲で撃ったのだ。当たってくれと祈る。(現在、茨大工学部東側高台に高射砲陣地があった。)

しかし、弾丸はB二九まで届かないのか、編隊をくずさない。B二九より黒い粒が沢山、パラパラと落ちた。ビューと音が聞こえ、地響、ガガアンという大きな音。

爆弾が日立工場に落ちたのだ。幾筋もの黒い煙が、もくもくと上がってきた。

また次の編隊、そして黒い粒、ガガアン。

兵隊さんは、「日立工場がやられたようだ。今日は、これで作業を終る。帰ってよい」と。私の家は、日立工場の東側すぐ近い、心配しながら急いで帰る。

会瀬の稻荷山を過ぎ、日立工場の南側の道路に来ると、工場は屋根がなく、鉄骨は曲り、全く無残な姿、黒い煙が何本も上がっている。

工場わきの道路の電柱は傾き、電線はたれ下がり、それに馬の腹わたが、ひものように掛かっていた。

自宅の地域の相賀町に入ると、爆弾で潰れてしまった防空壕の中から、三人がかりで、抱き上げていた。思わず合掌する。

自宅は、直撃は受けなかったが、爆風や、飛んできた石や木片で、瓦は割れてしまった。

父母は間一髪で、防空壕に飛び込んで助かった。妹は逃げおくれ、玄関で小さく丸まっていた。その脇に大きな石が飛んできて、危うく命びろいした。

相賀町では、K畳店の東側に、女医の歯科医院があったが、直撃を受けたのか、夫婦二人の姿がない。今は慰霊碑が建ててある。また近所に不動尊があったが、本堂には落ちず、すぐ脇の防火用水タンクに落ち、大きな穴があいていた。

◇艦砲射撃

雨降る夜中、突然バンバンという音、頭の上をヒルヒルヒル、そしてガンガカン。

父は即座に「艦砲だ」と、叫んだ。

あわて寝巻のまま、素足で防空壕の中へ飛び込んだ。

すると又、バンバンバン。頭の上をヒルヒルヒルと、弾が飛んでいく音。このヒルヒルヒルの振動音が本当に気持ち悪い。

どこを狙って撃っているのだろうか。次第に近くなってきた。今度は俺達の所か、裏の家の人も、あわてて飛び込んできた。

バンバンバン、ヒルヒルヒルと発射音、振動音が頭の上を通り過する度に、防空壕の奥の片隅に、体を小さく縮め、「南無大師遍照金剛」「南無大師遍照金剛」と、両手をすり合わせた。

ヒルヒルヒルが次第に遠く、南の方になり、聞こえなくなりホッとした。

その後、山へ行くと弾丸の破片で、鋭くレの形に削りとられた杉の大木があった。

#### ◇焼夷弾

二、三日前より、日立に焼夷弾という噂が流れていた。近所の人は、恐ろしくなり逃げてしまったのか、人の姿がない。

私の家も心配になり、既に小木津の知人の空隠居に、母と妹二人は疎開していたが、そこへ、父と二人で、荷車に布団、仏壇等沢山積み避難した。

夜中、一二時頃、バリバリと大きな音、驚き、あわて外へ飛び出した。日立の方が真赤、焼夷弾だろう。キラキラ光りながら、落ちてくる。

花火のように、きれいだなと、眺めていたら、バリバリと、自分の回りにも、落ちてきた。深く埋まった穴の中から、勢いよく火が吹き上げている。

私は下駄ばきだったので、とっさにかかとで、火の粉を浴びないように、注意して土をかきよせ埋めた。

二、三発は消したが、周囲を見ると、お勝手の床下が、勢いよく火を吹いている。

竹箒で消そうとしたが無理、どんどん火が広がり燃えていく。父が「消すのは無理、荷物は全部外へ出せ」と、手当り次第、寝ていた布団など、外へ投げた。

煙が白くなってきた。父は「もう駄目だ、入るな」と、大声で叫ぶ。少し過ぎると、バーンと大きな音がして、家中が火の海となった。

母と姉妹達は、裏の竹山の防空壕にいた。その入口に焼夷弾が落ちたので、恐ろしくて、火の消えるまで、小さくなっていったという。

疎開先が全焼してしまった。相賀町の自宅は、どうだったろうか。心配になる。

少し明るくなってから、運び出した自転車で見に行く。

滑川の旧国道を通り、母校の日立中学校（現在は日立一高）を見る。講堂、木造校舎、三階建ての鉄筋校舎は焼けてしまっていたが、未だ火は小さく燃えていた。

日立市内は、ほとんどが焼け野原、遠くまで見通せ、白煙がくすぶりがっている。道路には電線がたれ下がり、自転車を持ち上げ通る。

日製病院前を通り、会瀬町へと行く。燃えていない。家、家がある。

会瀬の坂を上る時、神様に「私の家は燃えていないように」と、何度も祈りながら、自転車を押す。

相賀町に入った。ポツ、ポツと燃えた家がある。大丈夫だろうか。我が自宅は無事だった、助かった。嬉しくて、今までの疲れも忘れて、自転車を飛ばし急ぎ帰る。

#### ◇終戦の頃

戦争は増々激しく、押されてきて、どこで名譽の玉砕、転進と、美しく報じているが、アメリカの飛行機が飛んできて、日本の飛行機は向かって攻撃に行かない。

広島、長崎に新型爆弾が落ちたが、軍は「日本は神国、必ず神風が吹く」と言う。沖縄が敗れても、「本土が決戦の場である」と、強気である。しかし、誰も日本が勝てるとは思えなくなっていた。

通っていた中学校は焼け、学徒動員の工場は破壊され、爆弾で雨もりする自宅に待機していたが、食料がない。母の実家は（日立市大和田町）農家なので、少しは分けてもらえるだろうと、妹と荷車を引いて行った。

八月一五日、「村の若い者は、軍の手伝いをするので、真弓山に行け」との知らせがあった。

私は近所の人と、一緒に真弓山に行く。

ここは高台、久慈川、大洗の平野が広々と眺められる。海から上陸して来るアメリカを迎え撃つするには、最適の位置のようだ。

兵隊さんの言うように、体がスッポリと入る位の小さな穴をいくつも掘った。敵の戦車が来たら、「ここにかくれていて、竹で突くのだ」と、そんなことしたって駄目と思ったが、いくつも言われたように掘る。

この四、五日は、アメリカの飛行機が飛んで来ない。空襲のサイレンも鳴らない。静かな日が続いているが、なぜだろう。

不思議に思っていたが、今日は昼に重大放送があるという。戦争は最後の時だ、もつと頑張れの激励の放送かと思っていた。

昼になった。兵隊さんと、ラジオを囲み、ジーと聞く。

天皇からの放送だった。ラジオがピーピー雑音が入って、良く聞こえない。

「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び、ここの大平の平和を開かんとする。……」

放送の内容が、よく理解できない。兵隊さんに聞く。

「日本が負けたのだ」と。今まで張りつめていた気持ちだが、すっかり抜け座り込んでしまった。

長く、色々と頑張った戦争、町も工場も、私の家も、沢山の被害を受けて終わったのだ。

次の日、荷車を引いて自宅に帰るが、今まで爆音がすれば、身を木や物影にかくし、飛行機を見上げる習慣がついていたことを、不思議に思った。

夜になった。光りが外に漏れないように、電灯に黒い布をかけていたが、取りはずした。

急に部屋中、隅の方まで明るくまぶしい。庭も光が反射して、奥の方までよく見える。縁側から久し振りに、ゆっくり眺める。

敵機はもう来ない。静かな夜だ。

「平和」というものは、いいものだ、しみじみ感じた。

その後一ヶ月位過ぎて、鮎川の八反原に、アメリカのブルトナーが来て、太い松の木を押し倒し、根ごと木を持ち上げ、片隅に重ね、少し地面を平らにすると、鉄板を敷き滑走路、直ぐ、軽飛行機が着陸した。

日本だったら、どうだったろうか。一本一本、鋸で切り、人力で片付ける。アメリカの機械力のすごさに驚いた。

これでは、いくら精神力が大事だと言っても、科学の力には勝てないと思った。その後、ここを基地として、飛行機が着陸し、ジープが我が物顔して街中を走り廻る。

子供がいれば、手を振りパンやチョコレートを撒いたり、くれたりした。

刀や鉄砲を持っていたら「提出しろ、見つけたら死刑にする」という「知らせ」が出た。私の家は、大きな道路に面していて、アメリカのジープがよく通り、今は金属探知機というのがあり、一軒々々調べるといふ。

私の家にも刀や鉄砲（旧式の村田銃）があった。もし調べられたらという恐怖心から、刀は半分に切り、竹などを切るナタに、鉄砲は折り曲げ、鉄くずにしてしまった。

今、本当に悔しい、旧式だけど宝物だったと悔やまれる。

◇塩作り

戦後は、すべての物が不足したが、塩は貴重品で、誰もが欲しがっていた。

この地域は海の近く、製塩は昔の人がしていた。自分達でも出来ないかと、隣りと相談し、作ってみようとなった。

釜は知人に、鉄製のものを頼み、かまどは、庭の防空壕の跡地に、石や煉瓦を並べ、土をこね、煙突をつける。

燃料は爆弾で壊れた家の柱や板、山から切り出したくぬぎ、杉、松等を使用した。

海水を海から汲み、荷車で運ぶ、火を入れ、海水が蒸発しなくなれば、その度に補充した。

朝早くから、夜遅くまで、火は焚き通す。

二日目の午後の頃より、釜の底がうすく白くなり始め、塩の臭いがしてきた。塩の臭いがあることを知った。

釜の底が白くなってきたら、少しずつ火を弱め、海水を全部蒸発させ、結晶した塩をすくい、ざるに入れる。

初日は、鉄釜の金気が少し出て、茶色がかっていたが、約一五リットル位出来た。

二回目からは、純白の塩が出来て嬉しかった。

塩作りは、約二年続いたが、燃料の用意が大変なので終わった。その他、不足していた色々な物と交換でき助かった。

◇一月三日

防空壕を父と取りこわした。大きい材木が続々と出てきた。

思えば、この壕の中で朝食や昼食をとった。艦砲の時は、雨がポタリポタリ、ブルブル震えていたことを思い出す。この頑丈な壕も、ただの地面になった。あゝ涙が出そうだ。

◇一月二三日

近くに住んでいた人の紹介で、福島県夏井に物々交換、苦勞して作った塩五升を持って、母と出かけた。

駅でN君と一緒に色々話をしたが、日々が食糧不足、勉強する気になれない。机に向かっても、ただ安閑として一日を過ごしてしまう。将来を考えれば、この青春期にと、落胆していた。私も同感だった、一日一日が努力の日でなく、闇の世界に進んでいる気がする。

平で乗り換えた、ここからは混雑していて立ち通し、トネルの連続であった。

突然、誰かが「火事だ、早く汽車を止める」と絶叫した。振り向くと、客車と客車を継ぐ布が燃えている。

大変なことになったと思ったが、沈着を思い出し、心を押さえたが、火は風にあおられ、一層強くなった。煙が自分達の列車に、どんどん入ってくる。

誰も総立ち、荷物を手に持ち不安そう。汽車が走っている。トネルに入る。木に燃え移った。「もうダメだ」と、大声で怒鳴っている。

汽車は止まった。見ると川があり高い鉄橋の上、飛び下りることは出来ないが、運転士さんが、気がついたことで安心した。直ぐ、車掌さん達がやかんの水で消してくれた。又、汽車は走り出した。

◇一月二四日

いろいろと話をし、塩五升と米六升を交換。大豆、そば粉などは、お金を出し買い帰る。平駅で乗り換え、常磐線に乗る。

上りの汽車が来た。客車は人で一杯、入口は大きな荷物を持

った人で、混み合っている。乗れそうもないが、片足がやっと乗れ、母も乗れた。日立まで立ち通しだった。

改札口を出ようとすると、警察官が、目を光らせ、ヤミ米を取り締まっていた。

つかまるかと一瞬思ったが、警察官は私の尻の方に手をやり押す。早く行けという仕草。待合室の中央には、摘発された米のような袋が山になってあり、数人が不安そうに腰を降ろしていた。警察官の情有り難く思った。

#### 鈴木 静枝（終戦時一七歳）

◇出征する人を見送る

小学校六年の頃、学校から佐和駅に出征する人を見送りに、何度も行きました。

駅の待合室、広場は日の丸の旗や幟を持った人で一杯でした。出征する人は肩に、「祝出征」と書いてある白いたすきを掛けていました。

「○○君万歳」と、誰かが叫ぶと、みんなはそれに合わせて、「万歳万歳」と日の丸や両手をあげました。

汽車がきて乗り込むと、窓から身をのり出し、手を振りました。私達も手や旗を大きくふり別れを惜しみました。

汽車が去ってしまった後、涙をこらえていました。帰り道は、さびしくなりました。

◇学徒動員

女学校二年生の時、学徒動員になり多賀工場へ行きました。

工場の入口で、ハチマキをしめ、今日も頑張るぞ、と気持ちを引きしめプレス課で、鉄板のイバリ取りを毎日毎日しました。

円筒の形に抜けている穴のヘリの、イバリを取るのですが、初めは取れなかったり、取り過ぎたり、うまく出来なくて、何回も、注意されましたが、少しずつ上手になって、ほめられるようになりました。

これが戦地の兵隊さんに、役立つ機械になると思うと、仕事に励みが出ました。

その他、ボール盤で、鉄板に穴あけの作業もしました。

◇千人針

私達女性は、兵隊さんにお守りとして、千人針を縫いました。

寅は「千里行つて、千里帰る」という無事を祈つて始まったのでしようか、白い木綿の手ぬぐいに、寅の絵があり点々がついていきます。その点々を赤い糸で縫い玉を作るのです。寅年の人は年の数だけ作れます。

一軒一軒廻ったり、街頭に立って、女の人に千人針を作ってもらいました。

婦人会長さんに届けたら、大変喜んでくれました。

◇機銃掃射される

工場が終つて多賀駅に帰ってきた時です。飛行機の音が大き



▲千人針を作る  
(1941(昭和16)年嶋根弘さん撮影)

くなつて来たと思つたら、低空からの機銃掃射に会いました。私達がホームで列車を待っているのを、狙つたのでしよう。バンバンつと、すごい音がしました。

友だちが撃たれました。足の指にコンクリートの破片が当たり、「痛い痛い」とうずくまり、涙を流していたら、駅員さんが直ぐきて手当をしてくれました。

#### ◇父の煙草巻き

父は煙草が大好きで、一日三〇本位は吸っていました。配給では足りません。

それなら自分で作ろうと、近所の農家から煙草の葉をもらい、よく干し、乾いたら小さくきざみ、障子紙や、習字紙を使い、細く巻きました。巻き方によって、細くなったり、太くなったりしました。

火をつけて煙が出ればいいみたいですが、おいしそうに、庭を眺めながら吸っていました。

#### ◇一升びんで米つき

私たち姉弟の三人は、米つきの当番です。一升ビンに玄米を少し入れて、細い棒でつくのですが、静かに、平均につかないと米が砕けて、小さくなってしまうので、気をつかいました。

当時の米は一人何升と配給されるのですが、玄米でくるので、ゴソゴソしておいしくありませんでした。それで少しでもおいしくしようと、米のまわりに付いているもみ殻を取るのに、ビンに玄米を入れて棒でつくのです。

何回もついて、黒かった米が白くなってきたら、出来上がりです。どのくらい白くするのか、強くつくると米が砕けてしまう

ので、静かに、ビンの底まで平均につく、気を使いました。妹は私より上手。弟は全然だめでしたが、自分でついて白くなった米を食べるのは、おいしかったです。

#### ◇食糧不足

私の家は、金物店と農業をやっていましたが、生活用品が足りなくなりました。

畑のジャガイモ、サツマイモ、大根、人参など出来れば、直ぐ買ってくれる人が来ますが、お金でなく、こちらで欲しい物、地下足袋、着物、塩、色々な物と交換をしました。

四、五人が仲間になった買い出しの人が何度も来ました。親しみがわき、お茶を出したりしました。又必要なることを、色々と教えてもらって良かったです。

#### 終戦の年の思い出



▲伊藤長助さん画（日立市郷土博物館蔵）

#### 齋藤 義嗣（終戦時一八歳）

昭和二〇年三月に敗戦色の濃い中、石岡市の中学校をそれも一年繰上げて五年生と一緒に四年生で卒業しました。ある日、

当時の兎平の供給に勤務している従兄が訪ねて来ました。「こんな非常時の時なので、どこへも勤めて居ない者は、どんな所へ徴用で持つて行かれるか判らんから、俺の勤めて居る日立製作所へ就職させてやるから一緒にいかんか？」とすすめられ、いずれ石岡あたりで働こうと思つていたので、少し早いけれど従兄もその弟も居る日立ならと素直に承諾し、従兄に連れられて行つたのが日立製作所海岸工場でした。従兄が一切の手配をしてくれ居たようで、連れて行かれたのがタービン工場でした。

部長、課長、係長に紹介され、配属されたのが中二階の配給係室でした。中二階から工場内を眺めると、タービンを作る部品を作る機械が整然と据えられ工員さん達が真剣に働いて居られる姿に感動しました。配給係とはその機械その機械の製品が出来上がるのを見て、次にかける部品を伝票で指示する役目で、係長が丁寧に教えて下さり、一つ一つの部品が出来上がるのが楽しみで、見るもの聞くものが全部物珍しく毎日が楽しく、張り切つて会社へ入社するのが楽しみでした。住居は従兄が寮長を勤める海岸工場に近い追川町の春陽男子寮だった。

四月からの勤務で、二、三ヶ月は平穩無事に工場も軍需産業の工程を続けて居りましたが、何と言つても水戸から小木津にかけての工場は軍需工場であるので、アメリカ軍が見逃すはずがなく、ある夜、雷のような音が聞こえ、起き出してみたら寮の前の通路が一〇メートル四方位の穴があいており、びっくりしました。夜のこととて太平洋の方から赤い灯が真横に飛んで来て当たると雷のような爆発音が聞こえ、足のすくむような思ひでした。私は何が何だか判らず朝になつて会社へ行つたら、アメリカの軍艦が日立沖から爆弾を発射した艦砲射撃であることが判りました。弾は主に山手方面に集中したらしく電線工場

と山手工場が海岸工場よりも被害が大きかつたようです。

私たちの男子寮は助川町にある女子寮の女性達が何かあつたら救助に行くことになつて居たので砲撃が終わつた頃合いを見て、女子寮生が走り込んで来て、「私等の防空壕が生埋めになつてしまつたから助けて下さい」と叫んだ。スコップを持つてかけたが、私の方までスコップが足りなくて廻つて来ないので、私は身に付けていたヘルメットで砂をかき分けた。日立という所は海に近く砂地で、女子寮の防空壕の外も砂地で、防空壕の真上に一発大きな爆弾の破片が直撃し防空壕がこわれて仕舞い、逃げ込んだ女子寮生二〇数名が生き埋めとなつてしまつたのである。入口に壕に入り切れなかつた女の人達は、両方の入口に二、三人ずつ砂に胸まで押さえられ、我々の砂の除去で救い出したが、何時間か砂に圧迫されていたのが空気にふれると物すごい勢いで足がふくれあがり、一人では歩けない状態になり、男子が各二名ずつ肩を貸して助け出す騒ぎだった。中に逃げ込んだ女性達は全員圧迫死で一人一人戸板を探して来て、戸板で広場へ運びそのまま寝かせた。日中は暑いので銀バエが死体に寄つてくるが追払うのに骨折つた。石岡から徴用で動員されて行つて居た女性は、艦砲射撃の飛んで来た破片で舌を半分持つて行かれ頬は耳から下真横に千切られ、手拭いで顎を下からしばり上げ止血したが、戦後石岡へ戻つても一生大きなマスクをかけ通して暮らした可哀想な人だった。一トン爆弾攻撃を受けた時は、海岸工場のうしろの高台にあつた研究所が一番大きな被害で、研究所に勤めていた人達は、研究所の下に作つた防空壕に逃げ込み、これも砂地のため松丸太の櫓がこわれ、壕の中の人は砂の中に折り重なるように生き埋めとなり、逃げ出せず窒息死をするより他なかつた。B二九の毎日のような波

状攻撃の中、夜は毎晩研究所下の防空壕へ行き、死体掘りが私達生き残った者達の大切な仕事だった。一トン爆弾攻撃でもまだ市内には建物が残っているのが米軍の偵察機で判るのか、三回目はいよいよ焼夷弾攻撃で日立の市内は見事に焼野原になってしまった。

市内にあった宿舎は焼けてしまったので私達の寮生と共に滑川町に焼け残った男子寮に住込み研究所下の死体掘りに終戦後も通った。

終戦の勅語は海岸工場の広場で緊張して聞いたが雑音はげしく意味不明で拝聴した。終わってから同僚に戦争が終わったんだよと説明され納得したが、毎晩毎晩死体掘りをやって居たので終戦という認識はその当時はなかった。ただ電灯を黒い衣をつけないで生活できるようになったのが嬉しかった。

四月から一二月までの九カ月間の日製の従業員だったが三回の米軍の攻撃に奇しくも生き延び今日あることを感謝し、これからの日立市の発展と日立製作所の事業が益々発展することを願うものです。



▲艦砲射撃により被災した日立工場青年学校の寮 (1945(昭和20)年7月18日頃 日立製作所日立工場提供)

私の六月一〇日 午前九時

吉田 実(終戦時一八歳)

昭和二〇年五月下旬のある日、職場で主任と購買課長から「明日より自分の間、特殊任務」につくことを命ぜられ、部長からも激励を受けて、翌日それに参加した。よもや上司三人との永遠の別れとなろうとは露ほども考えずに……。

私たちの一隊約五〇名程は、大雄院から本山への山道を登った。それまでに私達は、本山周辺の山岳陣地構築のために動員された事を知らされ、噂では別の数隊は、真弓山、風神山方面にも向かったという事で、日に日に昂まる本土決戦の切迫をひしひしと感じた。

命ぜられた陣地構築の場所は大角矢の山の斜面の茨や灌木を自分たちで切り開き、神峰山頂を前面に、その真下には山並みで見えないが本山本坑を遠く囲み込む位置にあった。そして一つの陣地を五、六名で分担し、深さ一、五メートル、幅一メートル、長さ一五メートル程の塹壕(さんごう)を山の斜面に沿って構築し、その中央に広さ五平方メートル程の横穴を掘り下げる事であった。言わずとも、それは米兵の降下部隊や、上陸部隊に対するゲリラ活動の防備拠点の一つと判ったが、その作業は辛かった。毎朝スコップやツルハシ、それに太くて長く重い丸太棒等を交互に担ぎ、約三キロメートル程の急峻な山道を登りつめ、何時が昼食で、何分が休憩時間とも判らぬ連続作業が約二週間続いた。

六月九日、その突然許可があつて山を下りた。記憶は、その時の疲労で、大雄院に出たのも、鉾山電車に乗ったのも茫漠模糊(あいまいもこ)としているが、破れ摺り切れた靴を引きずり乍ら職場に戻った。然し、帰任報告すべき前記三人の直属上長は

出張その他でお会い出来ず、そのまま寮に引き上げた。

すると寮の玄関先で、母校の同級生で日立製作所に入社した四名の友のうち、平井、関口の両君が、入営で明朝の一番列車で帰郷するため、事務室で手続中の処に出遭った。私は直ちにもう一人の朋友、庶務課の川井君に連絡すると、心ばかりの壮行会をと思ひ立ち、某所に秘し預け置いた訣別の飲み菓を用意した。それは一二〇〇C入りの菓壇に、局方のエチルアルコールと葡萄糖、安息香散などの香料で合成した即席ブランドイであつた。酒の味とて殆ど嗜んだ事のない若き日の四人は、一本の菓壇で、その夜したたかに酔つた。特に本山の陣地構築帰りの私には利いた。利き過ぎた。

その時、私は、寮本館調理室の水戸側に隣接した女中部屋前の浄水場脇の芝生の上にうつ伏し、両手で目と鼻、そして両耳を押え付けていた。キーン、ヒューンと物凄い音を立て頭上を通過して行く無数の爆弾が、やがて工場各所で一斉に炸裂し、その地響きと振動を伴なつて耳をゆるがす轟音で、それ迄の深い眠りからの寝惚けから、ようやく目が覚めたのだつた。

それにしても、二階から誰に叩き起こされて、何処を通つて此の芝生にうつ伏していたのか？昨夜の壮行会の後の事が皆目ボーンとして判らぬまま、自室の窓辺を見上げれば、その屋根の上に雷雲の様に、もくもく湧き上がつて空高く一面を覆い出した硝煙を見た。私は本能的に、寮の全員が退避したであろう女中部屋の物置かげの防空壕に飛び込んだ。その時が六月一〇日の午前九時直前と意識するよしもなく。

防空壕は暗かつた。入口近くより奥の方に人々の気配はあつたが、最寄りの人達が多数の女中さん達である事に気付くのと同時に、私は細紐なしの寝巻姿で、その下はパンツも付けない

素裸なのに、始めて気付いた。勿論、壕の奥寄りの寮生はヘルメットにゲートル、女中さん達ですら頭巾にモンペ、それぞれ身仕度万全で待機姿勢であるのに。私は顔を赤くして恥じると同時に、壕を飛び出し自室に戻つた。廊下の所々に飛散した爆風によるガラスの破片を、素足で避けて歩くのにやゝ時間を要したが、自室には私の布団のみ乱暴に放置されていた。その布団をひっくり返しおっくり返して、自分の下着と靴下をようやく見つけた時だつた。「敵機来襲！退避！退避！」と何処か遠くで叫び声がした。さらに耳を澄ませば遙か彼方から、すぐそれと判る爆撃機の編隊音が次第に近づいて来るではないか。私は慌てた。

やつとの事で上衣とズボンを探し出すと、廊下を走り乍ら着用し、先刻と同じ浄水場脇の芝生に出た時、成沢方向の上空を横一線に展開した二〇数機のB二九が、轟音を響かせて近づきつつあるのが目につき、芝生にうつ伏した。その瞬間、それぞれのB二九から豆粒の様な無数の爆弾が一つずつ機体を離れたと見る間に、点は線となり、粒は大きな塊となつて、同時にキーン、ヒューンと奇怪な音を立てて頭上に迫つて来る。私は再度、目、鼻、両耳を押さえてうつ伏せし直した。第二波の来襲であつた。

私が戦闘帽、革靴、ゲートルを身につけ直し終わつて壕に戻つた時、第三波の来襲があり、第四波も、同じ壕の中で待機させられていた。思えば私が身仕度を整えている間に、寮生で編成された二隊の救援隊が寮を後に、次々に山側門目がけて出動して行つたのである。壕の中に残されたのは女中さん達の他は寮生の数もまばらで、最初の半数以下に減つていた。私は完全に皆に立ち遅れたのである。本山の陣地構築が何であれ、同輩

の壮行会が何であれ、私は今もつてその事を恥ずかしく思う。暗い壕の中で救援隊の寮友や、職場の上長、先輩達の安否を気遣いながら私は地団駄踏んだ。

そして、警報解除を待つ程も無く、私達は山側門を目がけて突進した。グラウンドや会瀬寮の海側あたりからの工場一面は、月面のクレーターやクレパスの連続で、その上に鉄骨が覆いかぶさり、それに爆弾で吹き飛ばされた人々の手足や衣服が不気味にたれ下がっている中を、夢中で上台斜面の防空壕に飛び込んだ。

壕内は崩落した大小の砂礫が入口から奥に進む程うず高く、其処かしこで、埋め込まれた人々のうめき声や、救いを求める叫び声がし、それを頼りに、既に自力で這い出した人や、いち早く馳せ参じた他の救援の人々と一緒に、懸命に砂礫をはがした。最初のうちこそ、「痛い！その岩の下は俺の首根っこだ」、「俺の足を踏まんでくれ！」、などはまだ良かったが、「俺の足の下に誰か横に倒れてるらしい、駄目かな！」との砂礫の下の声に、私達は無我夢中で素手のまま掘り続けた。

私の意識はその辺からおかしくなってきた。何人ぐらい皆で助けられたのか？その作業はそのまま何時まで何日間続いたのか？自分達が助け出した人々や、運び出した犠牲者の中に寮友や、知己の方々が居たのか否か？

その中で僅かに、記憶に明確なものが五つあった。その一つは、その日の朝食と昼食をとっていなかった事。然し夕食や夜食のこと、仮眠をとったのか否かは判らない。

次なる記憶は、私達寮生の救援活動が、日立鉾山からの専門の掘さく隊と交換して中止となった事。但しそれが何日目であったかは判らない。

三つ目の記憶は、衣服のみならず私達の身体に滲み付いた屍臭である。救援活動の給食には大きな握飯と共に、しばらく見た事もない肉や魚の煮物が山と出され腹一杯に喰べ込んだが、それは最初の時だけだった。その煮物の臭いは、やがて身に滲みついて離れぬ屍臭と区別が付かなくなり、誰もが手を出さなくなつた。その屍臭は、入浴後衣服を上から下まで着替えても、何日かが過ぎてても、鼻について離れなかつた。

別の記憶は、真夜中の寮のトイレに行き帰りの行列であつた。自室で誰かが声を掛けると俺も、俺もと三々四人が続き、廊下づたいに隣室を過ぎると、それを待っていた様に各部屋から寮友がそれに続いて来る。笑えない幾夜かが続いた。

五つ目の記憶は、寮友三四名の英霊の名前が寮の黒板に書き出され、そして何日目かに職場の直属上長の主任、課長、部長を始め幾多の先輩知己の御無念を知らされた時の事である。

## 私の戦争体験

西村 春男（終戦時一九歳）

### ◇艦砲射撃

「ダダダダダーン」「バリバリバリ」。昭和二〇年七月一七日午後一時過ぎ、まどろみ始めた安らかな眠りは、何の前触れもなく、いきなり、全くいきなり破られた。

ここは父が勤めていた日立鉾山の大雄院病院下社宅の一室である。東側の二間半の雨戸一面に土砂や小石がバラバラと激しく降りそそぎ、屋根と天井が「バリバリ」と云う物凄い音と共にブチ抜かれ、吊っていた蚊帳がバサリと寝床の上に落ちてきた。すべては全く同時に、一瞬のうちに起つた。無我夢中で

飛び起き、頭が完全に目覚めた時は、投網に掛かった魚のように、蚊帳の中でもがいていた。飛行機の爆音が聞こえない！これは艦砲射撃だ！共楽館付近がやられたな、と思った。

手探りで、枕元に畳んでおいた服を掴んで蚊帳の外へ這い出した。その時、隣にいた弟突然「アチィ！」と大声を出した。襖の隣の八畳間から「どうした！大丈夫か！」と父の声。「大丈夫だ！」と弟の返事。家族全員の無事を確認しながら、素早く洋服に着替え、鉾山病院の前の岩山へ会社を作った横穴壕へ避難する事を申し合わせた。そうしている間にも第二弾、第三弾の炸裂音と閃光が煌めき、土砂が降り注ぐ。一刻を争う。両親と小学四年の妹が先に雨の中へ飛び出し、弟と私が祖母を連れて逃げることにした。

ところがどうした事だ。祖母は逃げないと言うのだ。祖母は「こんな雨降りの真夜中ではとても歩けない。邪魔になるだけだ」と言う。二人で背負って行くから、と言っても動かない。そして「何処にいても死ぬ時は死ぬ、お念仏を唱えていけば阿弥陀様と一緒に怖くない」と、覚悟の様子である。これは本気だな。梃でも動かないなと思った。そして逆に「若い者が無駄に死んではいけない。早く行きなさい」と諭された。それではと、四畳部屋の押入れの下の段に隙間を作って座らせ、周りに布団を積み上げた。「それじゃネ、行くからネ」の声を残して、二人で厚めの布団を引っ被って雨の中へ駆け出した。

社宅の間を山の下まで一気に走り、山裾を百メートル程走って横穴壕へ辿り着いた。砲弾の炸裂音が少し遠のいたような気がした。壕の中はもう一杯の人であった。少しでも奥の方へと潜り込んだが、父母が何処に居るのかも分からない。皆、声を殺して押黙って立っていた。まるで満員電車のような中で、一

日の事を頭の中で思い返してみた。……：夕方からの雷雨で、夢うつつにドロドロドロと云う遠雷のような音を聞きながら眠ったような気がする。……：そんなことを考えて長い時間が過ぎ、やがて東の空が白み始め、何人かで恐る恐る外へ出てみた。艦砲射撃は既に止んでいた。雨の後のヒンヤリとした外の空気が美味しかった。私と弟は家へ飛んで行った。祖母は一晚まんじりともせず、阿弥陀様を念じていた。「もう大丈夫だよ」と部屋へ連れ出し、雨戸を開けた。明るくなった部屋を見て驚いた。

私と弟と祖母の三人は同じ六畳間に寝ていた。窓側に祖母、次に私、その次に弟の順で。私と弟の布団の間は二〇センチとは離れていない。そこに、幅一二〜一三センチ、長さ五〇センチ位で、周りがギザギザと鋭くて重い、砲弾の破片が落ちていた。もし、もう少しどちらかに寄っていたら、私か弟のどちらかがその破片で、腹を抉られて死んでいたに違いない。何と運が良かったことか。蚊帳から這い出した時の弟の叫び声は、この破片に触れたものだったのだ。この他に、足元の押入れの中から、もう少し小さい砲弾の破片が一個見つかった。

こうして戦争は現実に私達の身近にせまり、人々に可也の緊張感と恐怖心を与えた。しかし、前年暮れの兵隊検査で第二乙種合格だったが、理工系学生だったので、召集延期になっていた私は、日本が負けるとは思ってもみなかった。戦死するだろうが、最後には必ず勝つと信じていた。

#### ◇機銃掃射

焼夷弾による日立大空襲により我が家も焼け出され、着のみ着のまま、家族全員、鉾山の石灰岩を採掘する現場の行動の奥の方へ避難していた。私と弟は、我が家の焼け跡にゴロ寝を

して、昼間は焼け跡からまだ使えそうなもの、例えば割れなかつたが焼けて色が変わった瀬戸物や、フオーク、スプーン等を探したりしていた。

会社は、罹災して行き場のない従業員家族達を集めて、技術者養成所の寮へ収容した。私たちも畳の部屋へ入ってホッとしたり、敵機動部隊が近くに來ているらしく、敵艦載機が頻繁に飛んで來るようになった。それで夜が明けると、朝飯もそこそこに家族は父に連れられて近くの隧道へ避難したが、例によつて私と弟は二人で行動していた。

その日も艦載機の來襲があり、皆、避難して付近には誰もいなかった。私達は何かを取りに養成所へ行つて、部屋へは入らず窓の外から上体だけ乗り入れて、荷物を物色していた。それを超低空で飛んできた敵機に見えさせてしまった。敵パイロットは操縦席から身を乗り出して我々を見つけると、機体を上昇反転させた。「危ない！撃たれる！」と思うまもなく敵機はこちらに向かつて急降下、我々の頭上に突っ込んできた。主翼の前縁が横一文字に見えるだけ。瞬間的に二人は傍の宮田川へ飛び込んで、川底に伏せた。ダ、ダ、ダ、ダ、と体の近くを弾がかすめ、一メートル位のところにあつた子供の腕位のオハグロの幹が折れて倒れた。敵機は急上昇して飛び去り、危ないところで助かつた。宮田川の水が少なく、反対側の岸を流れていて、こちら側は砂地だったので助かつたのである。敵のパイロットは倒れた木を見てヤッタ！と思つたのかも知れない。

#### ◇終戦前後の食糧事情、その他

戦争中は曲がりなりにも世の中の秩序は保たれていた。食糧

事情も相当苦しくなつては來たが、配給制度は何とか守られていた。但し米以外の代用食、例えば干麺やさつま芋が配給されるようになって來た。我が家の食事も麵を七〇八ミリの長さに砕いたものや芋が混じつた飯であつた。勿論、弁当も同じで、夕食はうどんの時もあり、飽食とは言えない時代であつた。それでも、日立鉱山は必要度、重要度を表わす第一次産業に指定されていたので、遅配、欠配もなく、国内では良い方であつたと思う。

焼夷弾で日立が丸焼けになつた時も、食糧事情の切迫感は余り感じなかつた。弟と焼け跡にゴロ寝をしていた時、婦人会か有志の方におにぎりの配給を無償で頂いたこともあつた。このような相互扶助の精神も、終戦を境に崩れて、皆自己本位になつて行つた。

それまでだつて、政府の配給制度のルートに乗らないで、主食を蔭の方で売り買ひしていた《ヤミ米》《ヤミ屋》が戦後は公然と横行し、世の中は無政府状態になつて、昭和

二一年頃まで続いた。国鉄の列車内はヤミ屋や闇の物資で溢れ、人は窓から出入りし、車内は立錐の余地も無かつた。少し後のことだが私は札幌から戻る時、椅子の下へ新聞紙を敷いて寝たことがある。

終戦直後の八月末の頃、焼け跡の真つ暗闇の中で父は、間違つて川に落ち、足の骨を折り、胸に打撲傷を負い、それが元で一月四日に亡くなつた。



▲伊藤長助さん画（日立市郷土博物館蔵）

その頃はまだ葬儀場も無く、親族縁者や近所の人達が当家に集まり、そこで葬儀を行い出棺する習わしだったので、人が大勢集まった時の食べ物をどうしようかと先ず第一番に心配し、母と弟と三人で食料の買い出しに出掛けた。大甕で電鉄線に乗り換え、石名坂の下の大橋辺りの農家から、さつま芋を南京袋に五つ買って、私と弟が二つずつ、母が一つ背負って帰ったのだが、当時は主食類の勝手な移動は禁止されていて、要所要所には警察官がいて厳しく見張りをしていた。

それで我々は、人の居ない淋しげな処を選んで、日立まで芋を背負って歩いて帰った。先ず、電鉄線沿いに久慈浜へ出て浜辺を通り、今の二四五号線のある崖上を通ったが、ススキなど雑草が背丈ほどに伸びていた。今の燈台辺りを通り、水木浜を迂回し、また海端の崖の上を歩き、河原子の集落を敬遠し、また崖上の小道を辿り、やっと鮎川へ着き、ここからは浜辺の渚を通り、やっと助川駅近くの崖下まで辿り着いた。此処から駅の袴線橋を渡り、鉾山電車の駅に着いて、やっとホツとした。

こうして父の葬儀を済ませたが、私が学校を出て就職するまで、苦勞の連続であった。

父の退職金などを全部集めて、私が就職するまでの月数で割り、一ヶ月分の使用金額を決めたが、折からの猛烈なインフレで金の価値がドンドン下がり、物価は上がり、どうにも手が付けられない状態になってしまった。

父の死後一〇日も過ぎないで、祖母は口減らしの為に、札幌の妹の所へ行くと言いだした。後で考えれば、秋田の大館の然るべき資産家で育った祖母にとって、自分達夫婦で貰い子して育てた父に死なれ、(祖父は戦前に亡くなった)縁の薄い我々一家とこれ以上このような苦しい生活を続けることは耐え切れ

なかったのかも知れない。

一〇月末に少年兵から復員した下の弟は、「俺が働くから」と言って働き出した。(一家で誰か働かないと社宅に居られなかった)私と上の弟はまだ学生だった。一家に三人も若い食べ盛りの男がいたので、この時はひどかった。ある夕食の時、大根や菜っ葉を入れた雑炊を誰も一杯きりであった。瞬く間に平らげたが、もうお代わりは無く我々兄弟は顔を見合わせていたが、誰からともなく、空になった釜へ手を差し入れ、指先で釜の内側に付いているノロをすくって舐め始め、きれいに舐めつくしてしまったことがあった。

昭和二二年三月に私は多賀工専を卒業し、宮田中学の教員になった。翌年、市内の新制中学が整理統合され、平沢中学に転勤、ここで市営住宅に空きがあると云う情報を聞いて、鳩ガ丘の引き揚げ住宅の長屋に、母と妹を連れて引越した。

食糧事情は少し落ち着き始めたが、世の中は物凄いインフレの最中だった。公務員の給料は法律で決まっていた、教員である私の初任給は月に三六〇円であった。その年の一二月の給料は五四〇円で、翌年の二三年一月一日には二三〇〇円、同年の六月一日には二九九〇円であった。わずか一年余の間に給料のベースが上がったのである。つまり、三六〇円で手に入ったものが、僅か一年余の間に約三〇〇〇円出さないと買えなくなると云うことで、お金の価値が下がったのである。このような状態をインフレーションというのである。

さて、日本の世の中は先の大戦を契機に変わり、幸いにも隆盛発展を続けている。これからも道を誤まることなく、益々発展するよう願ってやまない次第です。

一二月八日、二度と帰ることの出来ない飛行機でパールハーバーの湾に浮かぶ軍艦に突入した日本の若者を軍神の名をつけて新聞の一面に報道したときから太平洋戦争が始まったのです。小さな島国の日本と豊かなアメリカと。

「おめでとうございます」と郵便配達された赤紙一枚で戦場へ駆り出された若者たちを、銃後婦人の名をつけられた私たちは日立駅頭で日の丸の旗を振って送る役目をさせられたものです。白い割烹着に愛国婦人会のタスキをかけて。でもその息子さんを送る母親は心で泣いていたのでないでしょうか。少しでも戦争反対のことを口にしたら「特高」という軍人がいて恐ろしい目に合う時代でした。その頃私たちはモンペにゲートルを巻いて集合し「オイツチニ」と号令をさせられたり、行軍の練習をさせられたり、足の上げ方が悪いぞと叱られたし、そしてバケツリレーで消火訓練もさせられたものでした。

◇一トン爆弾投下で日立工場を攻撃される 全滅

その日の前日、宮様がいらっしやるので次の日は休日になったことが幸いして多数の従業員が救われました。

強力な攻撃で後日（終戦後）ですが見学する事が出来たとき、直径三メートルの大きな穴を見ただけで想像が出来ました。たまたま出勤された方が多く亡くなったそうです。（その日、私は盛岡へ行って不在だったので後から耳にした話。）

◇七月一七日 艦砲射撃

眠りについたころでしょうか、身をゆるがす程の音に飛び起

き、防空壕に飛び込みました。その夜は豪雨でしたので中にどろんどろん水が入ってきます。私たちの命はこれまでと覚悟と手を握り合ったものでした。

その時のごう音は、すぐ近くの今の日立一高の体育館に落下した音だったのです。あの時代にしては白亜の殿堂など呼ばれ、白いセメントの外壁で大きな型だったので、偵察していた飛行機に目を付けられたのでしょうか。よく海上から命中したものです。

艦砲射撃で本当に気の毒だったのは、勤労奉仕で日立工場へ学徒動員され寮生活をしていた女学生の寮が直撃で全員死亡されたことです。その跡地は七〇年を過ぎてもそのまま何も建ててなかったのです。若い命を思うと涙が出ます

◇七月一八日

昨夜の艦砲射撃に恐れをなした私たちは、さつまを加えた米の夕食を済ませ三人用に蚊帳とゴザを持って山中へ泊ることにしました。夏の山中ですもの蛇がいたかもしれませんと今思うと鳥肌が立つ思いです。

◇七月一九日 日立の町 焼夷弾でほとんど消滅

山中へ寝ることに恐れをなして、自宅で就寝。

またしてもサイレンの音、例の支度をして外へ飛び出すと遠い山々が赤く燃えている様子。とにかく逃げようと小木津方面へ走りました。ふり返ると日立方面が火で明るくなっていました。皆思いは同じ人達の行列です。その時低空で飛行機から私たちが撃とうと銃を向けるのが見えたのです。夫が白いコートを着ていたので誰かに目立つから脱いでと叫ばれ、急ぎ脱ぎ捨

てました。面白半分だったのでしょうか。その飛行機はすぐ遠くへ去って行きました。

その時妹は、畑に葉を見つけそれを身体にのせ動かずにいたそうです。

段々と夜が明けた頃、戻り始めましたが近くの家で男女不明で黒くまるで丸太がころがっている様な死体を見たのです。消火しようとして逃げ遅れた人なのでしょう。神経は異常になっていたのでしょうか、路上で亡くなった姿を見ても、黙って通り過ぎました。

自宅を近くで目にしたのは、今、正に玄関がドサツと焼け落ちる時でした。そして物置あたり買い置きしていたレンタンが赤々と燃えているのです。

あとから気がついたのですが、防火用水の中に一個の焼夷弾が不発のまま入っていたのです。その時もし消火しようとしてバケツで水をその用水から汲み出そうとしたら、あるいは直撃で私はこの世にいなかったかもしれませぬ。不幸中の幸いと思ったりしています。

焼けて見通しのよくなった日立は、青々とした海が美しく、どこからも見えたことが思い出されませぬ。

青空のもと、市役所の方が「罹災証明書」を作成してくださいました。その小さな紙きれ一枚でどこまでも乗車出来るとのこと盛岡方面行に帰ることにしましたが、すし詰め状態、男の人は窓から入るのは当たり前、私は駅員が押してくださいましたのでやっと乗車できました。

常磐線は、山が多くトンネルの度に黒い煙が入り込みます。多分すすけた顔になったことでしょう。通路に座り込みひとり出に涙が流れてきました。その時、窓側の若い男の方が、無言

で立派な白いおむすびを私に差し出してくれたのです。大豆の煎ったものと水しか口にしないので空腹であったのに、私は横に首を振って拒否してしまつたのです。自尊心だったのでしょうか。その方の母さんが、自分では口にせず息子に持たせたのかもしれない。あるいは、召集されていく方だったかも、とにかくその好意を無にしてごめんなさい、今、後悔しています。しばらくして、終戦を知つたのは仙台―盛岡間の車中のことでした。男の方が、「戦争終わったぞー」と大声で知らせるようになり走り去って行きました。

会社の社宅が一軒空いて日立へ戻ることになり、最低の生活用品を揃えて迎えに夫が来てくれましたが、食事用のテーブルがないのでリングゴの木箱を横にして台にし、脇の空間は戸棚代わりです。食料のない時代でした。

平成の今、物品があふれ賞味期限の過ぎた食品は捨てる時代、そして断捨離の言葉等々、天と地の差があります。

平和は本当にいいものですね。苦勞があつた人生でしたが、苦あれば樂ありでした。

#### ◇戦時中の食料内容

バクダンの名をつけられたさつまいも。味もなくなつただ大きいもの。それにお米を混ぜたのが主食。

海辺に流れ着いた「かじめ」なる海藻。これは、とても食べられたものではありませんでした。

さつまいものつるもさすがに食べませんでした。

今は高級魚のアンコウ。戦時中は流通の関係か日立は飽きるほどあり、空腹を満たしてくれたものです。

そのお蔭か、私は今でも吊るし切りが出来ます。

## ◇ヤミ米の話

少々の米は体に巻いて運びました。なけなしの物品とお米を農家で交換して駅に着いたとたん、待ちかまえていた警官に取り上げられていたのを目撃したことがあります。おなかを空かした家族が待っているのに。

そのお米どこへ行ったのでしようね。

最近の新聞である学者がヤミ米を一切求めず配給のみで餓死された記事を見ました。



▲伊藤長助さん画（日立市郷土博物館蔵）

九九・九九%の死から生へ 昭和一八年二月満洲にて

鈴尾 文吾（終戦時二五歳）

「想い出が多いほど人生はしあわせである」と言われている。まさに、悲喜交々、わが人生には青春がなかった。親のありがたき、親の窮状を幼くして知ったので、物が欲しいというような甘えはできなかった。工場に入社してから軍人として入営するまでの六年間、給料袋は封を切らずに親に渡したものである。それに加えて時代は支那事変まっただ中。軍事色も緊迫の度を増していたので、軍人になることが男子の夢であった。軍人になるまでに、軍事教練で体を鍛錬、軍人勅諭全文を暗誦することが目標で、日夜研鑽に暇なく、青春に溺れている余裕はなかった。国家のため、陛下のため滅私奉公することが男子の本懐

と、今ならさしずめマインドコントロールされていたのである。

父の死、骨を拾った翌々日、日立第四尋常高等小学校で、二歳の壮丁検査があり、甲種合格。時、恰も紀元二六〇〇年であった。昭和一五年一二月三日名古屋城で第三連隊の軍服に着替え、大阪港から出帆、北支蓮雲港上陸、瀧海線を西進、商邱県帰徳の騎兵第四旅団騎兵第七二連隊第四中隊第三班に入営。幾多の戦闘において初年兵（同年兵）戦死者一名を北支の広野に埋め、昭和一七年八月黄塵渦巻く北支を後に、山海関を越え北上、満州四平省昌図に移駐。この地で機甲師団の編成となり、東満の牡丹江省勃利に駐屯した。

今、ここに記す私の想い出は、わが人生の中で最悪の苦闘を強いられた最も過酷な事件で、印象の最たるものである。

北支、中支、南支での戦闘の時の苦しみなど、もの数ではない。なぜならば戦闘で戦死することは軍人の名誉であり男子の本懐これに過ぐるもの無しという観念で、靖国神社に神として祀られる荣誉が頭上に輝くからである。戦死こそ花と思っていたから苦痛はなかった。しかし満州では考えが全く違う。戦場ではない。そんなところで死んだのでは、弾に当たって戦死するのは全く異質のもので、犬死になってしまうからである。

二三才の時だ。今からおおよそ五六年前に遡る、昭和一八年満州の二月。これだけを想い出しても身震いする。満州の冬は零下二〇度、三〇度という極端な寒さになる。寒いと感じるよりは体が、キリキリと締め付けられて痛いという表現が適切であろう。まして夜ともなれば殊更に低下する。

このような峻烈な寒さの二月に、機甲師団総動員の冬季大演習が行われた。私たちの師団の駐屯地は牡丹江勃利の町にあった。この町から東には大きな興鎧湖があり、町と湖を通した東

二〇〇キロはソ連との国境である。今回の冬季大演習は興鑑湖を渡って国境に向かわず北に進路をとってチャムスへ向かう演習だった。まず、勃利の町を出発、演習を開始する地点に集結した。ここが、弥栄村と八千代村で、国策として長野県から二ヶ村が丸ごと移村した開拓団の村だった。ここを起点として夕方六時に全車両（約一五〇〇車両）が出発したのである。

私たちは戦車隊と行動を共にする歩兵で、各戦車に二名ずつ配置させられ、戦車の視界の死角になるところを、肉眼で一人が左側一人が右側の死角になる部分にいる敵を狙撃するのが任務である。まず、戦車の砲塔後方エンジン部の上部に腹這いになり、ベルトで緊縛され、いくら揺れても振り落とされないように固定される。身につけたものは鉄帽と小銃と帯革に弾薬盒と、五分剣、防毒マスクだけである。衣料食料一切合財はトラックに残し、身軽になって出発した。

戦車の目はちょうど貯金箱の口のようにわずかな窓から見るので左右は比較的広く見えるのだが、上と下、近くはまるで死角に入って見えない。その場所を私たちが肉眼で見つけるのである。敵は、人間一人だけが、立ってやっと頭が出せる位の立ち壕を掘って中に入り、戦車が頭の上を通る時、戦車の腹に吸着地雷を両手で差し上げて吸着させ、戦車を爆破する任務を持つているのである。その敵兵を見つけ、狙撃するのが我々の役目で、乗っているのである。私と大阪出身の榎本一等兵がペアを組んでいた。

戦車は大雪原に幅三千メートルくらいに散開して進んでいった。もちろん演習なので敵はいない。私達は揺られながら戦車に身を任せて何もすることがないのである。積雪はやっと膝下ぐらい、雪はしんしんと降るのではなく、砂嵐のように風に飛

ばされる。雪は降ってくるうちに凍ってしまっているのでサラサラしており、濡れることはない。

戦車は横一列になり、雪煙を上げて驀進している。こうして二時間ほど走った時である。突然戦車が停止した。すると砲塔の天蓋がパツと開き、中から戦車長（少尉）が顔を出して「今キヤタピラの機動軸が折れてしまい、前進後進ともに、不能になった」と知らされた。「無線で直ちに、鋼材運搬車と工作車（旋盤機械を積んだ車）を、至急来るよう連絡したが、来て補修しても今晚いっぱい動けない。私たちは、戦車の中にいれば何時間でも寒さは心配ないが、お前たちを中に入れるスペースは全くない。外で待たせたのでは一時間と持たず凍死してしまう。そこで今、本部に連絡、二人の救援に、毛布、お湯、食糧を積んでくるよう依頼したら、すぐに派遣するといっているので、戦車の跡をたどって進め！そして救援車に合流せよ。これは命令だ。」と言われた。「ハイッ、只今より戦車の跡をたどって前進方向に出発します！終わり。」と復唱して敬礼、一瞬の時間も浪費することはできないのですぐ出発した。

膝下まである雪にドブツ、ドブツと足を突っ込みながら歩き出した。救援車が来るまでは立ち止まっていることは許されない。まず、動いていなければ凍死する、これはまさに鉄則である。救援車に出会うまでは歩いていなければならぬ。始めのうちはそのほど時間もかからず来てくれるものと思っているから心配などは全くなく樂觀して力一杯ドブツドブツと進んでいった。雪は容赦なく横殴りに飛んでいる。

大雪原は皚皚たる果てしない平坦地。雪明かりで五〇メートル先ぐらいまでは見える。その先はボヤツとしているだけ。救援車がこちらに来る時はライトをつけてくるだろうから、必ず

判る筈。そのうちに来るだろうと気分もあつけらかんと、機動軸さえ折れなければ歩かずに済んだのになあと言いながら、歩いてきた。そのうちに戦車のキャタピラの跡がどんどん消えてきた。キャタピラの跡がまったく見えなくなるのにも、それほど時間はかからなかった。こうなると目標になるものが全くなくなってしまふ。どこを向いても一点の目標になるものなど見当たらない。大草原だったのだろう、木一本ないのである。まあ後向きにならないければまさか今来た方に戻ることもあるまい。兎に角真直ぐ歩くことだと、榎本と話し合いながら歩いた。どのくらいの時間を歩いたのかは、全く見当がつかない。しかし、一向に来る気配がない。

私たちは全く目標がなくなつて、ただ真直ぐ歩くというだけで、少しでも左か右に曲がつてしまえば、前進方向がだいぶ外れてしまう懸念もある。しかしそれを確かめる方法もない。ただ、歩いていなければ死が現実に来る。体力的にも自信があつたが、そのうちに来てくれるという樂觀は少しづつ揺らいできた。しかし体力も時間とともにだんだん消耗してゆくのも事実である。

まず、精神面よりも先に襲つてきたのが、喉の渇きである。これが歩いてある私達に最大の敵となつた。水筒はトラックに置いてきた。榎本が、喉が渴いたから雪を食べたいという。常日頃、教練をしている時から雪は食べてはいけないと教えられている。食べるとほとんどすぐに下痢をする。この寒さの中で下痢でもしたら、体力消耗は計り知れず、すぐに参つてしまふ。「駄目だ！」と大きな声で制する。もうどれ位の時間歩いてきたのか、時計を見ようか、しかしそれさえ大変だ。まず裏毛付きの大手袋を抜き、糸の手袋を抜き、軍手を抜き、裏毛付き

の外套の袖を捲し上げなければ見る事ができない。しかし素手になることも恐ろしい。冷えたら温めるのがまた大変だ。いや時間を見たらこんな時間に時間が経過したのかと思うだけで、士気が阻喪したらこれも困る。やはり見ないことにした。

今度は榎本が、「鈴尾兵長殿、疲れたから腰を降ろして休ませてください！」と言う。判らぬではないが、無理からぬことは知りつつも、「駄目だ！」と制する。休ませたら、三分、五分、ついつい一〇分になる。そんなことをしたら、汗をかいているその汗が冷たくなってしまふ。それこそ、冷えた体を回復させる食糧を持っていない。「駄目だ！」と大声で制する。「体が冷えてしまふぞ、歩け、歩くんだ！」歩つていれば体の中のエネルギーは燃焼して、熱量を出すので体の冷えることはない。少し歩いているとまた、榎本が休みたいといった。これが第二の敵となつてきた。再び、これの繰り返しだ。応酬となつてきた。来てくれるはずの救援車はどうしたのか、私たちを探してきてくれるはずなのに来ない、見えない。榎本には言わないが私の心は動揺してきた。この榎本が動かなくなつたらそれこそ最後の時だ。だからといって歩けなくなった榎本を置いて、私だけ歩いて行くわけにはゆかない。

「歩く以外に命を保つ手段があるか、歩け、歩け、歩くんだ、まだへこたれるな！」と励ます。体の疲れが目に見えてきた。榎本の体がふらふらと揺れる。「これは大変だ。救援車よ、早く来てくれ！」と一縷の望みを棄てずに歩く。歩みがだんだん遅くなつてきた。そのうちに榎本が、腹が減つて歩くのに力が入らないと言う。榎本の言うことは、同じ条件で同じ強度で私も襲われているのだ。その時にふと気づいた。今までよりいくらか遠くが見えるようになってきているのだ。夜明けが来ていた。

たちまち明るくなってきた。朝だと思いながら、心はずぐに昨夜八時からの時間を数えていた。「あれっ、一一時間になる！」すつかり明るくなった。明るくなったから、今度は救援車に発見される度合いが大きくなる。「がんばるんだ、へこたれるな、こんなところで止まって死にたいか、こんなならしのない死に方をしたいのか、駄目だ、歩くんだ。歩いてる限り命はある！」

相変わらず雪は降り続き、横殴りに吹き飛んでいる。雪の粒が小さいので視界はある程度遠くまで何とか見える。榎本が歩けないという。「そんなこと聞いていられるか、お前が止まったら一緒に俺も死ぬ、こんなところで死んでいられるか、お袋を泣かせることになるぞ、そのうちに救援車がきつと来る。救援車だつて我々を救援する至上命令で探しているのだ、そう簡単に断念して引き上げることはない。」必ず来ると空頼みになってきたが、励ます手段としてそう言わざるを得ない。榎本の後になつて背中から後押しをする。私も同じくらいふらふらとくる。そのうちにも時間は容赦なく過ぎ去っているのは確かだ。もう何時頃だろう。まるで見当がつかない。「歩くんだ、歩くんだ！」榎本に言う言葉は私にも言っているのだ。「こんなところで死んでたまるか。死ぬものか。」われと我が身に、我が心に鞭打ちつつ、なお、榎本の背中を押し続ける。風は降る雪をひゅうひゅうと泣きながら、横殴りに遠慮なく吹き飛ばしている。

大雪原には黒いものなど一点たりとも見えない。白い世界、冷徹な世界、冷酷な世界、冷厳な世界、何物をも包み込んでしまふ世界、情けもなければ、愛情もない。あるのは無情だけである。どこを向いても目標になるものはない。何もなし。白い世界だけだ。もう励ます私の方が限界にきている。死にたくない、こんなところで犬死にしたくない。ふるさとの母や、弟た

ち、康一、義姉さんのこと、子ども時代に飛びまわった山や、海水浴をした会瀬の海、出征するときの親兄弟や青年学校の仲間、駅の両側いっぱい日の丸の旗、名古屋の金の鯨鏢、大阪の港、門司の関門海峡を通った光景、北支で、自分の側で声も出さずに戦死した戦友の顔、上等兵になった時の喜び、第一選抜で兵長になった時のうれしさ、宮城前の二重橋のたもとで皇居を遙拝したこと、まるで走馬灯のように頭の中を、ぐるぐると映像が急旋回する。「負けられるか、こんなところでへこたれてなるものか！」会社に入ってから入営するまで、青春を投げ打って軍人教練し、関東大演習で鍛えた体、ただ一筋に暗誦に努力した軍人勅諭、それを暗誦できるまでに努力した自分、北支の幾多の戦線で死なずに生きた五体、こんなところで野垂れ死にできるか、野垂れ死にするためにこの地に来たのではない。おのれに、「頑張れ！頑張るんだ。」と発破をかける。相変わらず雪と風は荒れている。眠気が襲ってきた。だんだん頭も目も、ぼうつとしてくる。ふらふら、ぐらぐらと前のめりになる。それを踏ん張って支える。ぼうつとして視界がなくなってきた。これでは駄目だと、手袋のまま顔は何度も何度も叩く。叩いた後はしばらく目が開く。歩いていっているうちに、また何も見えなくなる。しかし榎本を後押しする手は、自動ロボットのように前に向かって力を出している。榎本も私も、まるで眠って歩いているのと同じだ。あれこれ考える意志がなくなってきた。「歩くんだ、おれも歩かねばならない。救援車が来る筈だ。歩けなくなれば死が待っているだけだ。死にたくない。犬死にしたくない。」そのこと以外はもう、気持ちが悪くなってきた。雪は容赦なく降る。風は善も悪もない。鬼の風の袋が開きつぱなしになっているのだろう。ちよつとでも気を緩めようなら悪魔

につけ入れられる。また、よろよろつとよろける。ハッと我に返る。兵舎で笑いころげた榎本の顔が雪原の中に浮かび上がる。演習のない休日に暖炉のぬくもりを囲んで楽しく語り合った戦友の笑顔が明滅する。救援車はどうしているのか。私たちが間違った方向に歩いて、探しているところから遠ざかっているのか。それを確かめるものは何もない。

「鈴尾兵長殿、もう歩けません…。」この野郎！意気地なし、それでも帝国軍人か、お前は出征する時の誓いを忘れたのか。その時家族に何と行って出てきたのだ。日本男子の心意気を堂々と言い、胸を張って出てきたのではないか。その気持ちはどこへやったのだ。お母さんを、犬死になんかで悲しませたいのか！」そう言われれば、無言でまた、ふらふら、よろよろと歩く。兎に角歩くのをやめて休んだ時はもうおしまいだ。「負けるな、頑張るんだ、こんなところで死にたくない。死にたくない。」この心の葛藤も何百回繰り返したことだろう。時間は何時頃だろう。もう何時間ぐらいこうして歩いているのだろう。「雪よ止んでくれ、風よ止んでくれ、情けあるならこの願いをきいてくれ！」

皚皚たる大雪原。日差しは全くない。それでも四方全く真っ白なので、やはり目の方も馬鹿になっているのだろう。ぼやっとして前の方も定かに見えない。いや、歩いてはいても、目は視力をなくして眠っているのかもしれない。しかし、歩かねばならない。進んでいなければならぬ。体が動いているから体温を保っているのだ。救援車が来てくれない。至上命令を受けているのだから、最後の最後まで探すのを打ち切ることはあるまい。きつと血眼になって探しているに違いない。しかし、若しかしたら、常識から考えて、零下三〇度、いや三五度の夜を

通して、食糧無し、水なしで歩いているのだから、もう雪の中にごろりと屍になって転がっていると思つていいのかもわからない。「来てくれ！来てくれよ！俺たちはこうして頑張つて待つているのだから…。」

黙々と、そして遅々として一步一步前へ踏み出している。軍隊では、最後の一兵までとか、最後の血の一滴までとよく言い古されている。その精神こそが、日本軍が全世界に恐れられている大和魂なのだろう。私だつて榎本だつて持っている。その流れの中でこうしてたゆまず苦難に立ち向かつて歩いているのだ。今度は榎本がどかりと腰をおろしてしまった。脇の下に両腕を入れて抱き起こす。「がんばれ！がんばるんだ！」榎本とて、座ったまま立たなければ凍死することは、骨の髄までわかっている。起こして立たせてまた歩き出す。もう、とうに腹は空っぽ、腹の皮は背骨にひっついていて、力出す余地がない。飲まず食わずの十何時間。あらゆる心の葛藤でストレスは満杯になっている。

前方は、曇りガラスのように、ぼやっとして何がなんだかさっぱり判らない。判っていることはまだ歩いている。歩いてから出てくるのか判らない。唯一つ、死にたくない、野垂れ死にしたくないという執念だけである。大空に迷い込んだ一つの星のようなものだ。だが、一人ではない、二人である。頼られる人が、頼る人がいる。私とて榎本を頼りにし、また頼られている。これが一人だったら、何時間もの孤独には耐えられなかったろう。二人だからここまで来られたのだ。榎本は、「歩けない、歩けない。」を連発しながらよくここまで歩いてくれた。榎本を何としても歩かせなければならぬというそのことが励み

になつたことも否めない。言い換えればここまで生きてこられたのは榎本のおかげである。命の恩人でもある。こちらから礼を言わねばならない。

そうこうして亡者のように、ふらふら、よろよろと歩いていたが、何だか暗くなってきたようである。目のせいかと思つたが、待てよ、どのくらい時間が経過しているのか全く分からないが、ひよつとすると夕方になつたのかなと思つた。また、一歩一歩と歩いていると暗さが増してくる。其の時気がついた。雪が小やみになり、風がぱたつと止んだのである。あつ、夕方だ。また、顔を手袋のまま何度も叩いた。叩かれた時には、ぼーっとした寝ぼけ眼も驚いたのか、ぱつと見開いた。あつちこつちと遠方を見ようと目を見張つた。雪も止んでいる。

ああ、夜が来るのか、救援車にはとうとう出会えなかつた。生きる頼りにしていた救援車も、天使としてわが前に来てはくれなかつた。いよいよ最期の時が来たらしい。真つ暗になつたらもうおしまいだ。気温はより一層急激に低下する。しかし考えれば、常人も及ばぬ生への努力をしたのだ。最後の一兵までの心境で、死と戦ってきたのだ。たとえ犬死にしたとしても、やるだけやつた。最善、最高の努力をした、その点悔いるところは一点もない。しかし満州に来なければよかつた。満州という戦地でないところへ来たのが不運だつたのだ。これもめぐり合わせなのか、運命なのか、戦地にいたら気持ちよくこんな苦しみをしないで戦死という荣誉があつたのに。なまじ満州に来たおかげで、戦場以上の苦しみにさいなまれた。最後に五体に発破をかける意味で、また顔を何度も叩いた。ぼうつとしている寝ぼけまなこがまた少しの時間パツと開いた。改めて四方を見渡した。雪も全く止み、風もパツと止んでいる。そ

の時なんとなく黒い点々が、かすかに見えたような気がした。「あれつ、何か黒いものが…。」眼の錯覚かなと、もう一度あらん限り目を見開いてみた。こちらは肉眼である。しかし動いている。

あつ動いている、自動車だ、どこから出てきた声なのか、大きく叫んだ。「榎本、自動車だ、自動車だー！」と絶叫した。小銃を高く上げて、大きく振つた。こちらは肉眼で見つけたのだ。向こうには双眼鏡というものがある。白一色の中に黒いものがあれば確かめるのは定理、お互いに見たのだ。私は「榎本！助かつたぞ、助かつた！」それ歩けと後押しをする。何と、力が出た押し方になつた。火事場の底力というものか。

向こうの自動車が停まつた。誰かこちらへ駆けてくる。「榎本、そら歩け」と、ぐつと力を入れて押す。駆けると言つても、膝下ほどもある雪原を来るので、駆ける方も大変だ。やや近くなつて、向こうから「何隊のものだー！」という声はつきり聞き取れたが、その距離へ届くほど大きな声を出せるのエネルギーが自分にはない。しかしその声を聞いた瞬間「あッ！柳沢の声だ。」と判つた。それもその筈、昭和一五年名古屋で一緒になつて以来、北支にあつて初年兵から中隊の同じ班で苦楽を共にし、残飯を食い合いながら幾多の戦闘もして、まさに同じ釜の飯を食つた同年兵の同班の柳沢の声、聞き間違えるわけがない。

榎本に、「柳沢だ。もう大丈夫だ、元気を出せ！」と後押ししているところへ柳沢が駆けてきた。私の顔を見るなり、「何だ、鈴尾か、どうした！」という。「昨夜戦車が頓挫、前進不能になり、救援車が向うからその車に合流しろと言われて歩き出したが、今まで出会わず、飲まず食わずに歩いていと言つたと「よしわかつた、すぐに連隊長に報告する。俺は駆けて行くから兎

に角あそこまで歩いて来い。」と言って先に駆けだした。

考えてみれば夕暮れ近くになって、雪が止み、風が止んだことは、神が私達の至誠の努力を見て慈愛を施してくれたのだろう。やつと連隊長の前までたどり着き、二人並んで「連隊長殿に敬礼！」と、私の声で捧銃の号令をかけて敬礼した。パッと挙手の礼をして降ろした。「敬礼終わり！」と銃を降ろしたら、連隊長は「何も言うな！」「柳沢！」「ハッ。」「二人を車に乗せて毛布をあるだけ使い身体を包み、何枚もかけてやれ！」との命令である。「ハイッ！そうします。」と、柳沢は私達を連隊長の護衛トラックに乗せ、毛布で身体を包み何枚もかけてくれた。

私の口から出た最初の言葉は、「柳沢何か食わせろ！」だった。「よし今すぐやる！」と早速パンを出してきた。柳沢の手からもぎ取るようにして取り、むしゃぶりついた。喉もカラカラ、これとて普通のカラカラとわけが違う。パンにむせて、水をくれと頼み、そして一口水を飲んで蘇生した。連隊長の護衛車に収容されて毛布にくるまれた時は、私たちはすでに二二時間、飲まず食わずで歩いていたのである。柳沢が先に帰って連隊長に、私たちの昨夜からの出来事を話しておいたので、敬礼を終えた時、何も言うなと言ったのだろう。

柳沢からむしり取るようにして食べたパンはどのくらいか……。このパンはメリケン粉を練った中にたくさんの野菜を刻みこみ丸めてカレー粉を激辛になるほど入れて、団子にして蒸したものである。カチカチになっているが、食べると体の中で辛みが発熱を出して、体がぼかぼかと温まるものである。演習の時は、通常これを雑嚥が膨らむほど満杯にして持たされた。これは命令がなくともいつでも自由に食べてよい耐寒食になっていた。このパンをどれくらい食べたのか、水をどれくらい飲んだのか

は全く覚えていない。助かったという安堵と、腹に詰め込んだことで寝てしまった。それからどのくらい寝たのかもわからず寝ていて、車がちょっと大きな段差のあるところを通ったのだろう。ドンドンと大きく体をゆすられハッと目が覚めた。軍隊は厳しい軍律のところ、まして連隊長の護衛車、これはいつまでもこうしていられない、ガバッと起きたら、傍らにいた参謀官らしい少佐の将校が、「そのまま寝ていてよい、帰りつくまで寝せておけと連隊長の命令だ。」という。それを聞いてまた眠ろうとして、「今何時でありますか？」と尋ねると「もう間もなく暗くなる。」と言われた。「それでは寝させていただきます。」と、また毛布の中に潜った。

何と二四時間寝ていたのである。こうして演習が終わって勃利の司令部に帰着するまで、私と榎本は連隊本部と行動を共にした。帰着後、連隊長に中隊復帰を申し入れ、挨拶を終えて六日ぶりに中隊に戻り、中隊長に帰還の報告をした。私達をまじまじと見ながら、何も言わず頬に涙を流していたが、しばらくして「お前たちを殺さずに済んでよかった。」と、声を震わせて言った。「救援車から、どうしても見つけることができなかつたと報告が来たときに、とうとう殺してしまつたと、俺も泣いてしまつたよ。よく頑張ってくれた。よかったなあ、ゆつくり休め……。」と言われて中隊長室を出た。班付きの大隅大尉にも報告し、三班に帰った。「良かった！良かった！」と皆が寄って祝福してくれた。中隊長の部屋より三班に帰った時、後を追うように中隊事務所の坂本曹長が来て、「今、中隊長殿より、鈴尾と榎本の二人に一五日間、一切の業務・勤務を免除する、しっかりと休養を取れ！とのことだ。」と、中隊長の命令を伝達していった。あの満州の真冬の二月。地上のすべてのものが凍る厳寒の昼

夜二二時間飲まず食わず、白皚皚の果てしない大雪原を犬死にしたくないという執念で、死の行軍ともいえるべき寒さと戦い、汚名を蹴散らして、親不孝をしたくないという一念で人の努力の極限を超越して生き通した。たった一步の大切さを身に沁みて知った。そして、こんな素晴らしい肉体を授けてくれた親に感謝する限りである。今では遥かに過ぎ去ったうたかたの夢と、苦しかったの一語に尽きる。

平成十一年一月 吉日 記（七九歳）

投稿に寄せて

戦後七〇年を迎えた今年。よくも、ここまで生き延びたことよと思う。世の皆さんに自分の若き日の戦争体験を少しでも伝えたいと思い、投稿を決めた。

戦争は一度始まれば、敵も味方もなく多くの命が失われる。一個人の人生も、青春も、夢も、希望も、何もかもがおかまいなしだ。

戦争は二度とあつてはならない。

### ある青年の兵役体験・遺稿より抜粋

黒澤 巖（体験者没）

私達の祖父・父の世代は戦後生まれの私達には想像も及ばない、まさに筆舌に尽くし難い戦争体験をしていた。平和な時代であれば一農村の若者、或は一工場の社員として一生涯を生きる身であったが、戦争の時代に青年期を迎えたこの青年たちは、望むと望まぬに拘わらず戦場にかり出されて壮絶な体験をした。「この命令を受ければ必ず死ぬ」、或は「この命令を出せばほ

死ぬ」と分りながら諸命令を受領したり、命令したりする経験は私達には全くないと云える。そして二度と祖国の地を踏めなかった青年が多く居た事も忘れてはならない。また、銃後の守りたる国民もとりわけ沖繩、広島、長崎、大都市等では悲惨な体験をした。現日立市域の住民もまたB二九による一トン爆弾の爆撃、焼夷弾投下による大火災、艦砲射撃の被弾、艦載機の銃撃、原子爆弾模擬弾の投下など悲惨な戦争体験をしていた。父は既に他界し自分の言葉では語る事は出来ないが、生前の遺稿等から行動概要を抜粋し、この時代の若者達の戦場体験の一端を語り継ぎたいと思う。

父は弓部隊 第三十三師団 師団砲兵 山砲兵第三十三聯隊（六八二五部隊）第二大隊第六中隊の編成完結から解散までの歴史、凡そ七年二か月のうち六年四か月をこの中隊で過ごした。この間聯（聯II連）隊全体では一九〇〇名、この中隊は一八六名の戦死者を出した。しかも、昭和一九年三月から昭和二〇年七月の期間に一七一名の戦死者を集中的に出している。

#### 【父の軍歴、行動概要】

大正 八年二月一六日 石名坂に生まれる。この年生まれの男子は昭和一四年中に満二〇歳を迎え、成年男子は国民の義務として徴兵検査を受けることになる。

昭和一二〜一四年 日立製作所内併設の青年訓練所（軍事教練所）に一八歳から二〇歳の三年間属し、教練に励む。

昭和一四年夏頃 大正八年生まれの男子はこの年徴兵検査を受け、甲種合格、来年は軍隊に入る事を覚悟した。

昭和一四年 秋から初冬にかけて歯医者通い、挨拶回り、千社参り等に明け暮れる。一月末付を以て日立製作所海岸

工場に休職届を出す。

昭和一五年二月一日 野砲兵第一聯隊（世田谷）に山砲兵第三十三聯隊要員として入営した。

昭和一五年二月七日 何種類かの予防接種を受け、中支安義県付近の警備に就いていた原隊に迫及するため品川駅出發、駅頭等で家族等に見送られた。

昭和一五年二月九日 支那（中国）大陸に向かつて広島県 宇品港出航 同月一二日揚子江口通過、戦地加算

昭和一五年二月二一日頃 安義到着、教育隊入隊、新兵教育（第一期）を受ける。

昭和一五年五月末日頃 第一期検閲終了、第六中隊に復帰、同日より安義市の警備に就く

昭和一五年六月一九〜二一日頃 第一次梧桐嶺作戦に参加、黒澤は右足甲側に迫撃砲弾破片創を負う。

昭和一五年中 この年敵は活発な活動を見せて、敵の度重なる攻勢に反撃すべく、その都度出動した。

昭和一六年三月二〇日頃 一五年徴集兵安義着、教育隊助手（当時上等兵）になり、新兵教育に携わる。

昭和一六年三月一四日〜二二日 第一次錦江作戦  
黒澤は教育隊に在り参加せず。

昭和一六年三月二二日〜四月二日 第二次錦江作戦。錦江作戦から帰隊したその晩緊急出動が下令された。直ちに砲手を再編成、教育隊から本隊に呼び戻され黒澤は二番砲手として参加、雨降りしきる中出動した。敵の勢力圏に飛び込み、第三十四師団を救援する目的の出動で、弾薬不足の中不眠不休の作戦行動であった。

昭和一六年四月一三日頃 北支山西省に向け移動開始

昭和一六年四月二八日頃 山西省 潞安に到着、三〇日天長節を祝い、次期作戦準備に入る。

昭和一六年五月一日頃 行動開始、山西省に跋扈する国民党軍主力を包圍殲滅すると云う作戦目的の中原会戦に参加。黒澤は新兵を引率し戦鬪資材の輸送業務に当る。潞安を出發、澤州↓董封鎮↓曲沃を経て、五月七〜八日頃山西省雪泉嶺付近に至る。

昭和一六年五月一二〜一三日頃 友軍は雨・霧が晴れると敵陣から見下ろす位置に居た。忽ち銃砲火を撃ち浴びせられ、大隊長、将校、砲車分隊、砲手負傷者続出した。黒澤は教育隊から呼び戻され初の砲車分隊長となり、敵陣に冷静沈着にして正確なる砲撃を加えると敵陣は壊乱、友軍が敵陣突破するに及び敵は潰走し始め、引続き掃討戦に移った。

昭和一六年六月一五日 候馬鎮に達し中原会戦終了

昭和一六年六月一六日 榆次県東車網村に駐屯、同地警備以降新兵教育に当たり、第一期検閲終了、次期作戦準備に入る。

昭和一六年八月一三日〜一〇月一〇日 晋察冀辺区肅清作戦に向け行動開始、この作戦中弾薬班長の任に就く。約六〇日の作戦行動で、山また山の行動で、水無く、埃だらけの毎日で耳の穴から汗腺迄穴と云う穴は埃が詰まった。敵は地の利を生かし、正面から挑んで来ず、押せば引く、引けば押して来る、と云う戦法をとった。阜平を中心とした作戦を展開した。

昭和一六年一〇月一〇日頃 第三十三師団は戦場離脱、東長寿駅から鉄道にて江蘇州碭山に向かう。碭山は徐州平野の

西端に位置する。一六日 江蘇省礪山到着、同日より同地の警備。

昭和一六年一月一日頃 中隊幹部異動、聯隊編成時の古兵除隊。

昭和一六年一月八日 真珠湾攻撃、対米英開戦の詔勅渙発、この地で対米英開戦の詔勅が伝えられた。第三十三師団は支那派遣軍から南方派遣軍に編入された。

昭和一七年一月二二日 礪山城出發、二四日 揚子江南京の対岸浦口に集結した。

昭和一七年二月二二日或は二五日 第三梯団 平安丸浦口出航  
昭和一七年二月 吳淞港 鳥取丸出航（黒澤は鳥取丸乗船と語っていた）

昭和一七年二月二六日頃 揚子江口通過。平安丸、鳥取丸、駆逐艦一隻で輸送船団を組み、第三梯団となり南方の戦場に向かう。遅れた原因には一説に歩二二三の兵員に疑似天然痘の患者が出たからとあるが、輸送船、糧食、弾薬の準備に手間取った可能性もある。

三月二二日頃 バンコック上陸、ルンビーニ公園にて弾薬、糧秣、軍馬、軍装を整える。

三月二三〜一五日 南部緬甸作戦に参加  
三月二六日〜六月二六日 北部緬甸作戦に参加 行動概要バン

コックより（鉄道輸送）↓スワンカローク（行軍開始）  
↓泰緬国境↓緬甸領コーカレー↓バアン↓ビリン↓ペグー↓トングー↓ピンマナ（この付近から戦闘加入）↓サジ↓マンダレー（イラワジ河渡河）↓イエウ↓カレワ（付近に至る）山砲第六中隊転進命令受領（カレワ付近にて作戦中）

（アキヤブへ転進命令受領・山六・五月二一日）↓ミンギ

ヤン↓戦闘資材準備↓（兵員・戦闘資材は列車輸送）↓メイクテラ↓サジ↓ピンマナ↓トングー↓ペグー↓ラングーン↓火砲と中隊主力・砲手の一隊は船便・大発でアキヤブ上陸（別の一隊行動 ブローム↓アラカン山系越え↓タンガツプ↓大発でアキヤブ上陸）↓アキヤブ警備

三月二八日 泰緬国境通過 所謂「千古斧鉞を入れず」の地原生林を切り開きながらの進攻作戦であった。木の下には毒蛇、サソリなどが、木の上には豹やニシキヘビのような大蛇、藪には虎、狼などがいるので、敵ばかりかあらゆるものに注意を払わなければならなかった。酷寒の北支から乾季の緬甸に転戦、将兵も馬も日射病に罹りそうだった。

五月二一日 サジ↓マンダレー（イラワジ河渡河）↓イエウ↓カレワ付近にて作戦中にアキヤブ転進命令を受領した。

五月 アキヤブ移駐を前に砲分隊を再編し、第一砲分隊の正式の二番砲手を十三年徴集兵野口戦友から引き継ぐ。二番砲手は火砲及び弾薬管理、砲手の編成に関する全責任を負う。火砲の発射弾数、弾薬種類毎の弾薬残数、戦闘詳報等の記録管理、信管の設定・管理も重要な役目であった。

六月三日 アキヤブ上陸同日より警備 雨季入り、対空警備、戦車壕・陣地構築、歩・砲・工兵協力、砲手は砲車分哨勤務、無い日は休養か陣地構築に汗を流した。

八月 山下泉大尉陸大入学のため内還  
九月一日 橋本實中尉、第六中隊長拝命

爾後昭和二〇年 三月二八日 メイクテラにて戦没す

るまで在任。現役の将校で山砲第六中隊の最も苦難の作戦を指揮され、激闘の連続であった。

九月か一〇月頃（現日立市）茂宮出身の大砂見習士官（曹長）、分哨で警備中の黒澤を訪ねてきて、面会する。以後何度か会食する機会があった。久しぶりの故郷の様子を聞き胸が熱くなった。弟が師範学校の後輩であったのである程度の故郷と家族の状況を伝え聞かされた。

一〇月一九日 十三年徴集兵内地帰還の為、ミンギャン出発

一〇月から一二月頃 六月上陸時から日本軍の航空戦力少なきを見越し、戦闘機による銃爆撃、戦略爆撃機の爆撃が連日続いていた。山砲の一門を以て対空戦闘の下令が出た。第六中隊は対空戦闘、射撃の訓練を続けていた。敵機の侵入経路が我が砲車の射撃範囲に入ったのを確認、射撃の決断をした。距離一五〇〇メートルにて撃ち命中、僅か榴霰弾三発を以て敵機（ニューハリケーン）を撃墜せしめた。（一〇月二四日の可能性大）山砲兵第三十三聯隊戦記に投稿文掲載あり。

昭和一八年一月 四日 マユ半島進出下令、先遣隊として歩兵部隊がマユ半島のアングモに上陸、ドンベイクに急行する。この線より敵重砲が南進して来ると、アキャブが直接射程に入ってしまうので、敵より前にこの地帯を占領する事がアキャブ防衛の生命線であった。また、友軍の弾薬糧秣の補給の限界線でもあった。

一月五日 ドンベイク北方ニキロ地点の小流の線に前進、陣地構築。この陣地で二か月近い間、血で血を洗う様な激戦、本格的な近代戦、物量戦の洗礼を受けることになる。

一月六日 ラチドンが攻撃を受けた。

一月一日〜十五日 英印軍（第四七旅団）による第一次攻勢。

当初ラチドン方面に敵主力が来ると予想、それは外れド  
ンベイク方面に敵主力が攻撃してきた。

一月二八日〜二〇日 英印軍第二次攻勢

一月二九日〜二月九日 英印軍（第五五印度旅団）の第三次攻勢、戦車三十両を第一線にして強襲してきた。

二月二五日〜一九日 英印軍の第四次攻勢。第五十五印度旅団（四個大隊）、及び全砲兵支援

三月一三日 歩二一三第二大隊（砂子田）第六中隊大砂中尉、アキャブ県ユワゼット付近で腹部負傷、一八日アキャブ分院で戦傷死する。

三月一四日 英印軍の第五次攻勢（英国側には第五次攻勢の記録は無い、との事）、黒澤の記憶では山六中隊はラチドン方面に移動、砂子田大隊に配属、マユ半島進攻作戦に従事中。ドンベイク守備隊の功績は上聞に達し感状授与する。その戦況と戦果は歩兵第二一三聯隊戦誌、朝雲新聞社刊「戦史叢書一五」に詳述あり

\*ドンベイク守備隊は、兵員に於いても、戦闘資材・弾薬に於いても大消耗戦を強いられた。

五月一四日 マユ半島から英印軍を駆逐、プチドン〜モンドーの線に達する。

六月六日 第三十三師団防衛担任区域へ移動のため、アキャブ  
出航する。

移動経路Ⅱ大発にてタンガップへ陸路アラカン山脈越えくイラワジ河渡河くブROOM〜鐵路ラングーン〜トン  
グー〜サジ〜メイクテーラ着。この間敵制空権下の移動の  
為に夜間移動中心の行動であった。

六月二日から二三日頃、メイクテラ着、休養期間

六月二四日、同じ村の同年兵、茅根君はカナンビンにて戦死。

彼は大隊の残務整理に当たり、後発組となる。大発で移動の最中、敵機の機銃掃射に遭い、戦没した、と大隊本部の兵に後から聞いた。

八月〜九月、サジ付近の鉄橋警備、サジは緬甸中原に位置し、鉄道輸送の要、鉄道の鉄橋防衛は至上命令であった。

九月一八日、次期作戦（後のインパール作戦）この頃は将兵には知らさず、準備の為、メイクテラ出発、モーライク県に向かう。

九月三〇日、モーライク県モクー村に到着、第六中隊第一砲分隊はさらに奥のパンタ、歩二一五聯隊第五中隊（山田中隊長）に配属、警備に就く。パンタは第三十三団防衛担当地区最右翼の警備地で、英印軍との遭遇線上にあった。時折侵入してきた敵と戦闘になり、榴霰弾のゼロ距離射撃を撃ち浴びせた。敵は恐怖心に襲われ退却して行った。山田隊の将兵に頼もしがられた。

昭和一九年、運命の年は明けた。正月山田隊の演芸会に、会食に招待を受けた。砲兵隊からも飛び入り参加し、山田中隊長からも喜ばれた。次期作戦を前にして楽しい一コマの思い出になった。

二月、山田中隊配属を解かれ、中隊主力に合流した。間もなく次期作戦が始まろうとする直前の事で、他の分隊、歩兵部隊は作戦準備がほぼ整っていた。我が分隊も急いで火砲の整備点検、次期作戦準備をした。

三月八日夜（九日、未明）弓師団インパール作戦行動開始

三月一〇日、カバウ河を渡河前進中敵の地雷帯に接触、砲身（駄

載）馬は砲身を駄載したまま吹き飛ばされ、五番砲手は即死した。

三月一日、ヤザギョウ北方地区から砂子田大隊第五第六中隊配属、インパール南道方面ヘンタムを目指して、重畳の山並みに向かって行動開始した。第三十三師団主力が追いついてくるであろう敵の退路を遮断する計画であった。三月二三日、「緬甸」「印度」国境を通過

三月二四日、五日頃、インパール南道ヘンタム付近の稜線に進出、数日待機し師団命令を待った。「チツカの敵宿営部隊に奇襲射撃せよ。」の命令を受け、チツカ北方高地に進出、敵の宿営地に砲撃を加えた。敵は日本軍の砲兵が突然現れ大混乱しているのが見えた。我が隊は敵の砲撃をかわし当初の作戦予定地ヘンタム付近の山頂に戻った。間もなく敵が退却してきた。驚くべきことに敵軍は、徒歩部隊は四列、或は六列縦隊、戦車、砲車、自動貨車隊列を組み、整然と行軍して来る。我が隊の上空には敵戦闘機、爆撃機がうん蚊のごとく飛行し、何十門もの敵重砲部隊は当方の山頂に向け、一弾でも撃とうものなら忽ち全滅させるの、意志を示してきた。やがて、師団司令部命令により「退路を解放し」、砲撃をやめた。退路遮断のアイデアは良かったが、余りにも彼我兵力、戦力の差が大きく作戦の目的を果たすことが出来なかった。既に我が部隊は歩砲工兵部隊共に弾薬、糧秣共に尽きかけて居た。

四月八日、チュラチャンプールに進出、恒田輜重隊より二百発の弾薬の補給を受けた。

四月一六日、森の高地付近、インゴロックの谷に到着  
四月一八日、森の高地攻撃に支援射撃するも、歩兵を消耗する

だけで頓挫する。

五月八日頃 第六中隊別働隊タム道方面、高木准尉マイピークで戦死

五月一六日 同夜歩兵部隊は敵陣前一〇〇〇二〇〇メートル先を、西方山地より北進した。

五月一七夜〜一八日未明 山砲隊は闇夜の行軍では砲車、馬匹を運ぶことは到底不可能なので夜間行動は断念、雨季のインパール平野特有の、早朝にミルクを流したような朝霧の中を、息を殺し、声を立てず、馬のヒズメの音を消し、嘶きをさせず行軍させることにした。物音を立てたり、霧が晴れたりすると、忽ち敵が気付き機関銃、火砲等が火を噴き、我が隊は全滅する事になる。「雨よ！止まないで呉れ。霧よ！晴れないで呉れ。」と、祈りながら進んだ。薄氷を踏むような進軍で、山砲隊だけで五個中隊が通過した。

五月一八日 シルチャー道路を越えて、五八四六高地北側の稜線に出た。

五月一九日夜 弾薬糧秣、兵員準備間に合わぬうちに、ビシエンプールと二九二六高地の同時攻撃を師団司令部は命じて来た。歩二一四第一大隊はビシエンプール北端から侵入し、シルチャー道路分岐点を占領しインパール南道を遮断する。同第二大隊は二九二六高地を占領しインパール南道を遮断する。山砲第六中隊はヌンガン陣地を撤収しブンテ北方稜線に陣地を構築し、砲列を布置した。

攻撃開始時刻は五月一九日夜半である。夜間射撃の準備を完了し、予定時間を待って支援射撃開始、予定の弾丸数を撃って支援射撃終了した。

五月二〇日 歩二一四第二大隊は二九二六高地頂上付近に到達したが、堅固な陣地に阻まれ、攻撃は頓挫して進めなかった。

五月二〇日或は二一日の夜間 黒澤は弾薬馬四頭と馭者、砲手を指揮し、二九二六高地に進出していた山砲兵第三中隊に、我が砲兵部隊が出来得る最大限の支援、弾薬輸送の任務を果たした。

五月二二日〜二三日 第三中隊は主力及び戦砲隊は火砲二門と運命を共にした。突入四日目、ビシエンプール放棄した。

五月二六日 攻撃第七日の午前零時 山守大尉以下七〇余名からなる集成歩兵中隊はビシエンプール夜襲を執行する事になった。突入する前に山砲兵第六中隊は支援射撃を行った。

六月八日 三澤山砲兵第三十三聯隊第一大隊長復帰。第一、二、六、八中隊の四個中隊計火砲四門、第三中隊段列からなる大隊の戦闘人員は百名位となっていた。

六月一六日頃 ライマトン南側の蜂の巣陣地攻略戦では第六中隊は銃眼射撃を担当、突撃正面の銃眼を撲滅したが、第二戦の機関銃のため歩兵の攻撃は惨めに失敗した。

六月二四日 敵はタイレンポクヒを奪還し、作間部隊を包囲殲滅する計画がある事が判明した。作間部隊は事実上の転進（＝撤退）命令を受領した。タイレンポクヒを経てインゴロックへの転進であった。インパール南道方面即ち師団主力の撤退の始まりであった。

七月中旬 トルボンの隘路口に陣地占領（道標三二哩）

七月二〇日 トルボンで三回目の戦闘

七月二五日 朝から砲撃と爆撃が集中した。この世笹原聯隊は

トルボン口を撤退した。

七月三〇日 印緬国境通過

八月二日 笹原聯隊(歩二一五) 道標四二哩

八月一五日 笹原聯隊道標五〇哩

八月中旬頃 インパール南道七三哩付近で山砲兵第六、七中隊

が砲弾凡そ百発を分け合った。

八月一九日 笹原聯隊 印緬国境通過

八月二五日 笹原聯隊 道標八六哩通過

九月八日 笹原聯隊 道標一〇〇哩付近 シングル通過

九月一二日 笹原聯隊 マニプール河渡河点到着

九月一三日 笹原聯隊 右河渡河完了、トンザン東側に陣地構

築

九月一四日 敵マニプール河渡河、一五日トンザン北東ルンタ

ック占領、一七日笹原聯隊は完全に包囲された。

九月一九日 笹原聯隊長、集中砲火を浴び戦死。同夜敵中突破

して撤退を始めた。

九月二〇日 笹原聯隊 一四二哩道標付近に進出した。

九月二一日 夜半作間聯隊の地域内に入る。本道上をティデム

に向かった。

九月下旬 師団の後衛は作間部隊に交代した。

一〇月一〇日頃 敵はティデムの我が主陣地に迫ってきた。

一〇月一三日 頃から英印軍は歩兵五〇〇名、戦車一〇両、砲

五く六門、迫撃砲一〇門を以て猛攻を開始した。航空機

の延機数は一二〇〜一四〇機に及ぶ。

一〇月一六日 持久の目的を達成し、ティデム撤退 バイタル

コーナー↓ケネディピーク↓金峰山↓ホートホワイト↓

シーンに撤退、各所で持久戦闘を続けた。

一〇月下旬頃 シーン付近

十一月〇〇日頃 カレミョウ県第二ストッケード付近に敵が先

回りして南道上に陣地構築、既に退路は遮断されていた。

そのスプリング状の鉄条網に接触忽ち敵の知る所となり

集中射撃を浴びせられ吉野軍曹戦死、渡河点に至る新た

な道を搜索することになった。戦死者名簿によると吉野

軍曹戦死日は十一月一三日である。

十一月〇〇日 ネンザヤ河渡河橋発見、中隊を導き渡河する。

十一月二四日 払暁、カレワの渡河点でチンドウイン河渡河

\* 撤退が遅々として進まずその速度が何故遅いのか、補足説明をさせて頂きます。

一 糧食の不足、特に塩の不足が将兵の体力を奪っていた。

三月八日、インパール進攻以来、弾薬糧秣の補給は限ら

れており、弾薬は唯一回二百発受取ったにすぎなかった。

糧秣は殆ど補給なく、現地徴発を含めて四月〜一月の

八か月間で穀物摂取量は一斗未満であったろうと思う、

と黒澤は生前語っていた。主食は低地では筍、湿地では

露の芽、森林では木の芽や葉、木の実があればご馳走で

あった。経験により酸味のある植物は食えると云う。

二 傷病兵が多くその移動に時間がかかった。医薬品も補給

が無く、通常なら助かる命を多く失った。熱病、下痢、

負傷何れの治療も出来なかった。また、塩の欠乏も命を

奪う大きな原因であった。

三 戦死傷病者を多く出して、定員不足甚だしく戦闘資材

搬送に同じ場所を何度も往復しなければならなかった。

飢餓で体力失った傷病兵には辛い任務であった。

四 時は雨季、撤退路は泥濘と化し、水田または沼と化して

いた。道路は砲弾、爆弾が爆裂した穴が開き、また、撤退路には不発弾が散乱し、また不発弾の穴が其処彼処に開いていた。是が曲者で時限爆弾が混じっていたのでその処理を待つか、遠く迂回しなければならなかった。

五 軍馬は死絶え、自動車も無く、すべて人力で輸送した。

六 敵に制空権があるので行動は夜間に限られていた。また、機動力を生かした敵が我に先行し陣地を構築、友軍は弾薬兵力不足で攻撃を避け、それを大きく迂回するので撤退の距離は凶上距離よりはるかに大きかった。

七 慢性の食料欠乏、繰り返し発する熱病、下痢は体力を奪う。それでも原隊について行軍しなければならぬ。ひたすら自力で歩続けることのみが、明日の命を繋ぐ事なのだ。

八 砲兵は追い迫る敵と交戦（撤退戦闘）しながらの殿を務めた。遙か後方の部隊が重砲、傷病患者の遅々とした後退を繰り返す間、死守命令を守り続けた。転進命令を受領し次の地点まで撤退した。

一二月末頃 チンドウイン河で敵の渡河拒止戦闘を続けた西進台陣地で、敵機の襲来を受け掩体壕に避難していた時、爆弾がブスツと壕の地中深く入り込んだ。咄嗟の判断と云うより反射的に壕外に飛び出した。直後、爆弾が破裂何人もの死者が出た。この爆弾は延期信管であったのであろう。地中深く潜ってから爆発した。この後敵機と交戦中に機関砲弾破片盲貫創を負う。治療の為メイクテラの野戦病院に入院する。しばし中隊を離れる事になっ

た。

一二月末日メイクテラの兵站病院を自主的に退院、立ち寄った師団輜重の自動貨車に便乗師団司令部に到着。

昭和二〇年一月 五日頃 モニワ付近にいた第六中隊主力に追及、以後パコック戦、イラワジ河河畔会戦、メイクテラ会戦に参加する。何れも近接の激戦であった。

一月□□日、パコック守備

二月八日 印度第七師団 パコックに本格的攻撃開始

二月一日、パコック撤退命令受領。イラワジ河中洲の戦闘、敵のイラワジ河渡河拒止戦闘参加、作戦中にメイクテラ防衛の為、歩二一四及び配属砲兵山三三聯隊が抽出された。

三月七日 作間聯隊及び配属砲兵安部山砲、メイクテラ西飛行場無血占領、八日早くも敵戦車部隊の反撃を受けたが、安部山砲と重砲中隊の支援により撃退

三月九日 再び予想せぬ方角から敵戦車来攻、重砲陣地は砲門を敵に向ける事が間に合わず爆砕された。作間聯隊及び同配属部隊は第十八師団中永太郎中將の指揮下に入った。

三月一〇日、一日 菊の藤村歩兵聯隊、工兵聯隊はミンジャン道道標六哩付近において敵戦車部隊と激戦を展開し、大損害を蒙り兵力三分の一以下に低下した。

三月一六日 山崎聯隊、東飛行場に突入、敵戦車の反撃に遭いマンダレー街道北側に退く。

三月一八日 作間聯隊（湖東台西正面を担当）正面は激しい砲爆撃の後、戦車十数両を要する二個群に攻撃を受けたが、重砲、山砲の支援のもと撃退した。よく一九日敵は攻撃を再開、再びこれを撃退した。

三月二日夜 第四十九師団メイクテラ市外東南角に夜間攻撃を行ったが、大損害を受けて大敗する。第十八師団は山崎聯隊及び安五十三師団羽賀聯隊を以て東飛行場を攻撃し、二三日朝までにその大部を占領確保した。

三月二四日 山崎聯隊はメイクテラ市街地の一角を占領、混戦を続けていた。日本軍側は弾薬糧秣欠乏、戦死者多数を出して苦しんでいたが、英軍側も苦しんでいたようである。日本軍側が弾薬不足で、二八日夜一足先に退却を始めて勝者と敗者がはつきりすることになる。

三月二八日 この日は夜明け前から敵戦車のエンジン音が轟々と鳴り響き、友軍の将兵は皆、「今日は敵が来るぞ」と気を引き締めた。皆、密かに死を覚悟していただろう。早朝から湖東台に徹底的な絨毯爆撃が繰り返され、爆撃の間に戦闘機が監視と銃撃に次々やってきた。雲一つなく乾季の太陽が照りつける頃、敵の戦車隊が、広く深く湖東台の我が陣地付近に侵入、進攻してきた。

痛恨の日。日が傾いてきた頃、敵の戦車隊が湖東台に上ってきた。安部山砲の三個中隊計三門の弾薬が尽き掛けて来た頃であるが、橋本隊指揮小隊は指揮所を離れず射撃指示を続けていた。忽ち指揮所付近を敵戦車隊は見つけ取り囲むように攻撃してきた。残念ながら我が山砲弾では敵戦車に命中しても弾き返され、打撃を与える事は希であった。橋本隊の指揮所は蹂躪され橋本中隊長、飯島少尉等四名が戦死、中隊主力を失った。

三月二八日夜 指揮小隊が全滅状態で砲撃停止の命令が無く砲撃を続けていた時、安部大隊長から第四中隊中隊長友田大尉に砲撃停止を命じた。その命令で直ちに砲撃停止し、

火砲を地隙に牽き込み直ちに分解、地中に埋めた。その夜会戦の打ち切りが決定され、その夜のうちに敵の間隙を縫って脱出、途中小規模の戦闘を交えながらシャン高原の麓に辿り着いた。

四月六日 シャン高原の麓に辿り着き、作間聯隊、河原聯隊に合流した。

四月一〇日 シャン高原に転進命令が出た。

四月一二日 敵の大銃撃を交わし、大牛車部隊が奇跡的に脱出に成功した。

四月一三日～五月三十一日 「克」作戦に参加

四月一五日頃 カロー道に出た。転進目標は、図上六百キロメートル南、彼方のモールメンであった。ケマピユ、パブンの間は火砲の臂力搬送を必要とする山越えの悪路で、ゲリラ、雨季も迫る悪条件であった。

五月三日 首都ラングーン陥落が陥落した。

六月九日 モールメンに集結命令

六月□□日 モールメン近郊に到着

六月□□日 ムドンに到着

六月中旬 チャイン村にいた第六中隊に、新任中隊長片山中尉が赴任して来た。爾後敵の上陸に備え陣地構築に、対戦車戦の演習に明け暮れていた。

八月六日 広島に原爆投下される。

八月八日 ソ連日本に宣戦布告

八月一四日 最後の御前会議

八月一五日 終戦の詔のラジオ放送傍受

八月二〇日 タンビザヤ駅で乗車、泰緬鉄道で泰国に向かう

八月二二日 泰緬国境通過

八月二四日 泰國ノンプラドッグ集結、武装解除、終戦業務

八月二五日 終戦業務に就く。分隊は鉄道の補修、建築資材の切出し、輸送等に駆り出された。

昭和二年四月末 急に帰還船に乗る番が早まったと云う連絡が入った。先に帰還予定の部隊に伝染病患者が発生したからだと云う。

五月一日 バンコック港出航、内地帰還へ。異国の地で草生す屍に最敬礼で別れを告げた。

五月二五日 六年四か月ぶりに見る祖国日本、帰還船上から見た白砂青松に涙を流した。そして二度と祖国の土を踏めなかつた戦友に申し訳ないと涙した。

五月二六日 佐世保港上陸、善行証書付与、現役満期除隊、聯隊解散、故郷に向かう。

五月二〇日頃 我が家へ帰還。

昭和一五年一月三〇日、家を出る時送ってくれた祖母、母は既に他界、父は中風で身動きも儘ならない状況で、家は痛み、食料も底を尽き、家計は疲弊しきっていた。戦後の再建の明るさは一つも見えない状態であった。

五月末頃 日立製作所海岸工場に帰還の挨拶と復職届に行くと、工場は戦災で瓦礫と化し、復職の願いは叶わなかった。爾後、救済事業の堤防工事の人足などで細々とした生計を立て始めた。やがて農地解放の動きが急となって来たので、戦争中人手が無く小作に出していた農地を返して貰い一時農業に従事した。しかし、米等は供出割当が厳しく、生活は苦しかった。

昭和二七年四月一六日 朝鮮戦争の特需により、日立製作所海岸工場タービン製造部タービン製造課に復職した。(厚生

年金加入記録 根拠) 爾後、主にタテ型旋盤により発電機主軸研磨担当、水力↓火力↓原子力発電への過程に参加、ガスタービン発電機七万kw(当時の記録品)に参加した。

昭和三五年頃より戦友会活動が組織的に行われ始めた。①同年兵の戦友会、②茨城県支部の戦友会、③全国大会(主として宇都宮十四師団管轄の茨城県、栃木県、群馬県、長野県、戦後地方から移り住んだ東京都が持ち回りで監事、東北・九州からも集まる)、後年元山砲兵第三十三聯隊の合同慰霊祭を切っ掛けに④山三三会が開催されるに及び①同年兵の戦友会は発展的に解消された。

昭和四三年八月一七日 元第六中隊は靖国神社にて慰霊祭を執行、祭文は黒澤が担当した。

昭和五二年二月一三日 靖国神社にて、山三三会合同慰霊祭「山砲兵第三十三聯隊戦記」発行

昭和五二年一〇月 日立製作所完全退職する。

昭和六四年一月 昭和天皇御崩御 一時代が終わったと感慨一入と、元皇軍将兵は話し合った、と聞いた。

平成一一年三月三十一日 山三三会 靖国神社にて、第十五回合同慰霊祭に参加

平成二一年四月 六日 靖国神社個人で昇殿参拝九〇歳  
平成二五年一二月三〇日 九四歳にて永眠する。

平成十八年以来数年かけて父の遺稿、証言等から個人の戦記を纏めてきました。その中で、今は故人となられた父の戦友方、或はその遺族方から提供された貴重な記録、軍隊手牒、戦記・手記等を見せて頂いた。また、左記の戦記・文献に接

する機会を得て幾つかの日付、地名の誤りを訂正した。見せて頂いた軍隊手牒により、特に支那派遣軍時代、緬甸進攻作戦時の作戦名、地名等の公式記録を確認できました。

#### 参考文献

- 山砲兵第三十三聯隊戦記・歩兵第二一三聯隊戦誌・歩兵第二一四聯隊戦記・歩兵第二一五聯隊戦記・工兵第三十三聯隊戦記・山三三本部編「戦塵回想」・山砲兵第三十三聯隊第二大隊第四中隊編「祖国の礎」
- 坂本地区慰霊の碑をまもる会発行「平和のいしずえ」
- 戦友書簡、戦友の軍隊手牒、戦友個人の軍歴書（遺書）
- 朝雲新聞社発行「戦史叢書一五」

## 第二章 これからの平和を願って

# 日立市の平和啓発事業 平成二八年三月現在

## ●平和啓発広告塔等の設置 広告塔

- ・十王支所敷地内
- ・日立・高萩広域下水道組合敷
- ・小木津駅ロータリー
- ・国道六号石名坂ロータリー
- ・国道二四五号みなと町入口

## 銘板

- ・新都市広場
  - ・常陸多賀駅ロータリー
- かくへきはいぜつ  
核兵器廃絶・平和都市宣言がしるされていきます。



▲常陸多賀駅ロータリー



国道 245 号みなと町入口 ▶

核兵器廃絶・平和都市宣言  
世界の平和と安全は、人類共通の願いである。  
いま、国際的な核軍拡競争は、核戦争の危機を増大し、人類生存の恐怖となっている。

私達は、再び「広島」「長崎」のあの惨禍を繰り返さないためにも、すべての国に対し、核兵器の廃絶と軍縮を求め、いかなる国の核兵器も許してはならない。

一瞬にして尊い命を奪い、財産を灰にしてしまったあの悲惨な戦争をいかなる理由があろうとも繰り返してはならない。

日立市は、日本国憲法の恒久平和の理念に基づき、核兵器廃絶と人類永遠の平和を希求し、ここに「核兵器廃絶・平和都市」となることを厳粛に宣言する。

昭和六〇年二月二四日

## ●日立市平和展の開催(八月) 目的

「核兵器廃絶・平和都市宣言」(昭和六〇年二月二四日議決)の考え方をもとに、日立市の戦災状況や戦時中の生活の様子の写真、さらには原爆に関する写真ポスター等の展示をおこない、戦争の悲惨さと平和の尊さを広く市民に訴え、戦争と平和に関する意識啓発を図るものです。

宣言翌年の一九八六(昭和六一)年から実施し、二〇一五(平成二七)年度で二九回目となりました。

## 内容

日立戦災写真パネル、広島・長崎原爆写真パネル、戦争関連の実物資料の展示、折り鶴作成など



▲第 29 回日立市平和展の様子



▲第29回日上市平和展の様子



## ●「平和への旅」はけん 青少年派遣事業

### 事業内容

◇二〇二二（平成二三）年度派遣

### 目的

「核兵器廃絶・平和都市宣言」にもとづく平和啓発事業の一環として、終戦五〇周年の一九九五（平成七）年から三年ごとに、市内中学生を被爆地である広島市及び長崎市に交互に派遣し、原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参列や原爆資料館見学等を通じて、戦争の悲惨さと平和の大切さ、命の尊さについて学ぶ機会を提供しています。

【日程】八月五日（金）～七日（日）二泊三日

【派遣先】 広島県広島市

【派遣人数】 一八名

（市内中学生一五名、引率者三名）

### 【主な派遣内容】

- ・ 広島市原爆死没者慰霊式、平和祈念式への参加
- ・ 広島平和記念資料館、原爆ドームなどの見学
- ・ 戦災体験者の講話
- ・ とうろう流しへの参加、フィールドワーク等

### 【その他】

- ・ 事前研修会（二回）、事後研修会等の実施

◇二〇一四（平成二六）年度派遣

【日程】九月二二日（金）～二三日（土）

（台風の影響のため日程を変更して実施）

一泊二日

【派遣先】 長崎県長崎市

【派遣人数】 一八名

（市内中学生一五名、引率者二名）

【主な派遣内容】

- ・長崎原爆資料館等の見学
- ・被爆体験者講話の聴講

【その他】

- ・事前研修会（二回）、事後研修会等の実施
- ・各学校の文化祭において報告会の実施



●「平和の鐘」<sup>かね</sup>建設

終戦五〇周年の一九九五（平成七）年八月一五日に、永久に戦争のない平和な世界の実現を願う日立市民の心の表象として、戦災者への慰霊<sup>いれい</sup>の意を込め、建設されました。

▲日立駅前に建設された「平和の鐘」

清水目千加子氏作の「平和の鐘…祈り」や日立市ゆかりの作曲家吉田正氏の曲などが、カリヨンという14個の鐘によって奏でられる。

## ●ワールドワイド・ピース・マーカー

米国の造形作家ティータ・バツケロー氏の発案で、世界一九八カ国に世界平和の象徴としてひとつずつステンレス製マーカーを受託都市に設置し、世界平和の啓発に努めることを目的としている事業で、日立市は日本で唯一の設置都市として選ばれ、終戦六〇周年の二〇〇五（平成一七）年八月一日に、「平和の鐘」の脇に設置されました。（世界で五番目の設置都市となる）



## ●終戦七〇周年記念事業（二〇一五（平成二七）年度）

### 「語りつぐ平和への想い」

実施日 八月一日（土）

会場 日立シビックセンター多用途ホール

### 内容

第一部 市内戦災体験者による講話

講師…皆川 直司さん

第二部 戦争体験記録文集「十四歳の戦争」

執筆者と高校生の対談・朗読

出演者…大越 ハルエさん

亀山 節子さん

県立日立第二高等学校 放送部



### 戦災体験談の収集

◇映像による収集

体験者六名にインタビューをし、「未来へと語り継ぐ日立の戦災」証言集を制作しました。

◇文書による収集

市民二五名から体験談が寄せられ、体験談集「未来へと語り継ぐ日立の戦災」を作成しました。



◇編集にあたって

- ・ 標記については当時の呼称に従いました。
- ・ お寄せいただいた体験談は、紙面の都合上、内容や趣旨をそこなわないように配慮しながら、一部編集して、掲載しています。
- ・ 事実の確認ができない部分については、体験談の記述を尊重しました。
- ・ 引用元を示していない写真や絵は、体験談とともにお寄せいただいたものです。

終戦 70 周年記念事業「未来へと語り継ぐ日立の戦災」

平成 28 年 3 月発行

編集・発行 日立市生活環境部市民活動課

連絡先 〒317-8601 茨城県日立市助川町 1 丁目 1 番 1 号

TEL 0294(22)3111 内線 535

FAX 0294(24)5301

Email kokubun@city.hitachi.lg.jp